俺とお前のロンリークリスマス

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とお前のロンリークリスマス

【Ｎコード】
Ｎ５３１６Ｉ

【作者名】
かるびーえーる

【あらすじ】
『私を買って下さいっ！』
冬至を迎えたある日、俺はふざけたエロガキに出会った。親に捨てられ、童貞でもうすぐ三十路街道まっしぐらな俺になんてことを言いやがる。でもそのガキはただのエロガキではなくて……ちょっぴり愉快な奴らに囲まれて、そんでもってちょっぴりシリアス風味の物語。

12月22日（1）

「マジパネェ……（汗）」

冬至を迎え、街はクリスマスモード満載に彩られたある日。俺はそんな周りの楽しそうな雰囲気とは打って変って、憂鬱な気分で手元にある通帳に目をやった。その通帳の差引残高の一番下の覧にははっきりと『0』という絶望的な数値が記入されていた。

「俺は明日からどうやって生きていけばいいのですか？」

俺はそんな答えのない質問を自分に投げ掛ける……すげぇ欝だ。何度見ても0、0、0、0……零。今、ちょっとカッコいいとか思った自分は馬鹿ですか？そうですね。

「はぁ～…まずったなぁ、こりゃ。まさか、知らぬ間に実家からの入金が途絶えていたとは、不覚」

うん、おかしいなとは思っていたんだ。先月、いや……半年くらい前からか。あれ？金、増えてるかコレ？もしかして減ってるのではないの？とは感じてはいたんだ。まぁ、元々入ってた金が大金だったから俺の金銭感覚が鈍っていたのかもしんない。いや、それにしても酷いな俺の鈍感さ、いや頭。今日確認したらまさか、差引残高がワンコイン（※500円）だったなんてっ！とりあえず、どういうことか実家の両親に電話したんだが……

『お客様がおかけになった電話番号は現在使われておりません』

……ｗｈｙ？何故？何それ？おいしいの？思わずミー、頭が真っ白

になったよトム。
あぁ、これはアレか？……捨　て　ら　れ　た　。この歳にもなって？おいちゃん、もう三十路一歩手前（※２９歳と１１ヶ月）だよ？あれか……半年前に実家から送られてきた『ママとパパが選ぶ司ちゃんのお嫁さんこーほー（はぁと）』と書かれたふざけた一冊の本を無視してゴミにポーイしたのが悪かったのか？いや、だって仕方ないじゃん……あの本開いた瞬間、地獄絵図だったんだぜ？見開きで妖怪が出てきたかと思ったよ。すぐさま、ギブアップしたよ。そして本気で吐いたよ、二日酔いでさ。寿命縮んだかと思ったよ。

「ちっちゃい事は気にするな！それ！わかちこ！わかちこー！」（チャラオＤＱＮ）
「やぁーもぉーん！かっちゃん、それマジウケルー！わかちこわかちこって……キャハハハハ！」（ガングロＤＱＮ）

俺の前を歩くカップルのＤＱＮ共が馬鹿騒ぎしていた。ただのパクリじゃねぇか……くそっ、思いっきり顔面に蹴り入れて、あの女は俺の肉便器にしてやりたい……いや、やらねぇけど。しかし、真剣にどうすっかねぇ……日雇いのバイト入れるか？くそぅ、しかし今俺はケーキ屋のアルバイト真っ最中だ……ただでさえ忙しいこの時期にこれ以上バイトは入れにくい……ケーキ屋のバイトの給料は月末まで待たねばならない。店長に無理言って、前金貰っとくか？

「……まぁ、ごちゃごちゃ考えてもしゃあない。今は空腹を満たすとしよう」

ちょうど近くに庶民の味方の吉●家が見えたので、入るとしよう。そして俺が店に入ろうとした時、視界にあるものが入ってきた。

『私を買って下さい（↑1万円から）』

へったくそな字でそう書かれた看板を持った女が吉●家の前に立っていた。腰のあたりまで伸びている銀髪のロング、全体的にこじんまりとした幼女体形に白くて透き通るような肌、どう見ても中学生くらいにしか見えない。いや、女の子がこんな夜の街に一人で突っ立って、そんな法に触れそうな看板を持って立っているつー時点でドキドキ……じゃなくてビックリするのだが……

「なんでトナカイのコスプレなんだ……」

いや、あれはコスプレつーより着ぐるみだな。いや、今がクリスマスだからというのは分かる。でもな？んなひと昔前の不良少女が書くみたいなエロエロな看板を持って……何でトナカイの格好なんだ！？萎えるでしょ？萎えますよね？萎えると言えっ！反論は認めないっ！だから俺は宣言しよう！

「際どいパンティが見えそうなサンタの格好が王道だろうがっ！！！」

俺はこんこんと降る雪の空を仰いで高らかに大声でそう言った。ふっ……ぶちまけてやったぜ。

「え、えぇ～～～……ちょっ、何あの男。ちょーキモいんですけどぉー」（ブタＤＱＮ）
「脇の下臭そうぉ～～～うげぇーーー……ついでにイカ臭そう」（ブッチＤＱＮ）
「ふぉ、ふぉっ……あらまぁ、若い方はサカッてらっしゃるのぉ……あたしも半世紀前は（省略）」（昔日を思い出すおばあちゃん）

周りのＤＱＮから一般ぴーぽー、お年寄りまで色んな視線を感じる。……あれ？俺、何言っちゃってんの？ぐぉ！何だ！？この野次馬はっ！？俺、ちょーモテモテ！？んなわけあるかっ！！！

「お、お前らっ！？俺はサル山の大将じゃないんだぞっ！？ち、散れっ！しっ！しっ！」

俺が手であっちいけのポーズをすると野次馬はブツブツ文句を言いながら散っていく。……な、何だ？この羞恥プレイは……うっわぁ、すっげぇ恥ずい。俺は顔にわずかな熱を感じながら、再び吉●家に入ろうとするが……

「ま、待ってくださいっ！お兄さんっ！（／／／）」
「……あ？」

背後から俺を呼ぶ声がしたので、反射で振り向くとそこにいたのはさっきのエロ看板を持って突っ立っていた女の子だった。何故か少し頬を染めて俺を見つめてくる。

「……はぁ、はぁ（／／／）」

そしてそのトナカイの女の子は何故か両手を太ももあたりにおいて息を乱す……何だコイツ？サカッテンのか？なんていやらしい女だ。

……そして俺は何ていやらしい奴だ。

「……えーっと、俺に何か用？」

なかなか何も言ってくれないので、痺れを切らして俺は自分から口を開いた。

「かっ、かっ……」

「……かっ？」

「買って下さいっ！」

……は？いきなり何を言い出すんだコイツ？

「……えっ？何？お前の着ているトナカイの着ぐるみを売ってくれるのか？俺に？いやでも……俺は動物フェチじゃないからなぁ……せめて、ブタならいいけどよ」

「ち、違いますっ！これ売ったら私着る服無いですっ！野盗ですか貴方はっ！？」

銀髪の女の子はさらに顔を真っ赤にさせながら、俺にぷんすかぷんすか抗議してくる。

「じゃあ、何だよ。俺はお前から何か買えるほどの金なんて持ってねぇぞ」

ワンコインで何が出来るというのだろうか。吉●家の牛丼を食うっきゃねぇっ！そうだ、こんな所でこんなクソガキに構っている余裕はねぇ。俺は踵を返し……

「じゃ、そゆことで」

右手を挙げ、そのまま吉●家入っていこうと前に歩いていくが……

「ま、待ってください……私を、私を……！」

「私を……私を買って下さぁいっ！！！（／／／）……ふにゃ、あ……あぅ」

バタッ……

銀髪の女はとんでもない事を大声で喚き、そのまま雪の積もる地面に倒れた。

「お、おいっ……！すげぇことぶちまけながら倒れるんじゃあないっ！あぁーもぅ！野次馬共！だからてめぇらは俺を見るんじゃないっ！あっ、そこのクソガキッ！今、俺に向けて鼻糞飛ばしやがったろっ！？ちょっと前出てこいやコラァ！！！」

俺のロンリークリスマスは始まったばかり……だと思った。しかし、この時俺は知る由も無かった。
いつものロンリークリスマスよりも、大変で……エロくて、そんでもってすげぇエロエロな日常が始まるなんて！夢にも思わなかったんだ！……うん、ごめん。今、ちょっと嘘ついた。

12月22日（2）

「バクバクバクバクムシャムシャムシャムシャ！！！！！！！！！！！！！」

今、俺の隣で女の子らしからぬ豪快な勢いで牛丼を食す幼女一匹。

「……牛丼、うまいか？」

「はいっ、こんな高級料理食べられるなんて……！夢みたいですっ！」

高級料理って……ふっつうの庶民が食べる牛丼なんだが。とにかく、よっぽど空腹みたいだったのな。

「……で？お前、あそこで何してたんだ？」

「あっ、そうでしたっ！お兄さん！私を買って下さいっ！！！」

幼女が俺に向けて高らかにそう言うと、店にいた客及び店員が一斉に俺達に振り向き、凝視してきた。

「ちょっ、やめろてめー、馬鹿でかい声でんな台詞言うなっ。あっ、ちょっ、店員さーん、何でもないんですよーだから、その……どこかに電話しようとするのやめてくださーい」

「私は馬鹿じゃないですっ！」

「おめーは馬鹿だっ！あんな街のど真ん中でエロ看板持っている時点でなっ！」

そうだ、何が『私を買って下さい』だ。いつの時代の不良少女だ。第一、俺が助けてやったから良かったものの変質者が声を掛けて来

たらどうするつもりだったんだコイツ？所詮、俺と目の前にいるこのクソガキは赤の他人だが、あんな姿見たらハァハァ……じゃなくて、ちょっと心配しちゃうだろうがよぉー！

「とりあえず、お前、それ食ったら家帰れ。お子ちゃまがこんな夜に外に出歩いてはいけません」

「嫌ですっ！お兄さんが私を買ってくださいっ！それに私はお子様じゃないですっ！れっきとした社会人ですっ！お酒も飲めるしタバコも吸えるハタチですっ！」

「なにぃ～～～？ふざけるなっ！あと面白い冗談を言うなっ！幼女っ！」

「お、おぉおお面白い冗談ってなんですかぁ！？幼女って……失礼ですっ！ぷんぷんですっ！（／／／）」

幼女はカウンターのテーブルを思いっきり両手で叩き、大声を張り上げる。

「てめぇの言動！格好！体系！全てがお前が幼女であると如実に示しているだろうがぁー！幼女は家に帰ってくクソして寝ろやぁーコラァー！」

俺も負けじと立ち上がり、幼女に向かって大声で抗議する。

「なっ……！あ、貴方っ！だ、だだだだだ大失礼ですぅ！うぅー！もぅ、許しませんっ！お兄さんが私を買ってくれるまでここに居座ってますっ！」

「やめとけやっ！吉●家の店員さんに迷惑だろーがよぉー！だいたいなぁ！その1万円ってなんだっ！1万円って！無駄に高ぇんだよっ！お前分かるかぁ！？1万稼ぐのにどれだけ親は苦労しているのか！？俺はわからねぇけどなっ！」

ダメじゃん！俺！アッハハハハハハ……はぁ。

「じゃ、じゃあ……１９８円！イチキュッパでどうですかっ！？イチキュッパで私を買って下さいっ！」

な、何…！？牛丼（並盛）から差引き残る金は……１２０円！？ぐぁー足りねぇー！じゃねぇえええーーーー！！！！！金の問題じゃねぇだろっ！？どんだけ最低な野郎なんだ俺はっ！？

「一万からドンだけ下がってんだぁー！？自分大切にしろや！スーパーの特売じゃねぇんだぞっ！」

「うぅ……じゃ、じゃあ、かくなる上は……私、脱ぎますっ！それで許してくださいぃいいい（泣）」

「ちょっ……許すとか許さないとかそういう話じゃねぇだろう！？そして何、泣いてんの！？ちょっ、やめてよそーゆーの！？まずいよこの構図！色んな方々にちょー誤解を生むよ！あー！ちょっ、てんいんさーん！早まったことしないでぇー！その親機を下ろしてぇー！自分達帰りマース！もう精算して帰りますからぁー！」

「合計で１０１０円となります」

「は……？」

レジで精算した店員が真顔でそう言った。嘘……嘘でしょ？俺、牛丼並盛（※３８０円）しか食ってないですよ……？なんでそんな信

じられない金額に膨れ上がってんの……？ん、待てよ……？１０１０円－３８０円で、６３０円……

「……うぷっ、お腹いっぱいですぅ」

幼女はお腹を押さえて、それでいて幸せに満ちた顔で満足しておられました。

「てめぇー！牛丼特盛食いやがったな！？俺でも食ったことないのに！返せ！俺達の夢！ＴＨＥ特盛！」

俺の手は自然と幼女の胸倉を掴んでいた……食い物の怨みは恐ろしいぞコラァ！

「ひぅ！？な、何言ってるのかわからないですよぉ～～～？離してくださいぃぃぃぃ～～～！」

くそ、くそっ、くそぅ……！何故か知らんが涙が溢れ出てきたっ……！くぅ、うっ、うっ、うぅ……

「くそぅ、俺のワンコインじゃ足りねぇぞ……おい、幼女。お前も金出せ」

「……？」

幼女は首をかしげ、不思議そうな顔で俺を見つめてくる……何その、ちょっとかぁいい顔。……え？まさか、ましゃか、ましゃか、ね？

「ちょっ、おまっ……」

「……お客様？」

それからの俺達の行動は神速の如く速かった。ぽけ〜っとアホ面をしている幼女の手を引き、一気に俺達は店を飛び出した。何だこのレトロな漫画っぽい展開は！？

「うぉおおおおおおおーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

「きゃうぅうぅうううううーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

夜の街を駆け抜ける……目的地？居場所？そんなもん一文無しの俺にはどこにもねぇ！！！金のねぇ俺は時期に大家さんに追い出されるだろうからなぁ！アッハハハハ、あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃーーーーーーーーー！！！！！！！！こんな自分に嫌悪を抱くぜぇーーーー！！！！ひゃっほーーーーう！！！！！

「はうぅうううううううーーーーーーーー！！！！！！！！！！！な、何で逃げるんですかぁあああああああーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

幼女が必死で何か言ってるが、気にしないぃー♪気にしないぃー♪気にしないぃー♪

「トンチンカンチントンチンカンチン気、に、しーないぃ♪気にしないー♪気にしないー♪気にしないー♪」
「何で一●さん調！？気にしてくださいよぉおおおおおおーーーーー！！！！　これじゃあ、私達食い逃げですよぉおおおおおおおおーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」
「気にしないYO！ちぇけらっ！気にしないYOYOYOYOYOYOちぇけだうっ！フゥー！」

「う、うわぁ！お、お兄さんが壊れちゃいましたぁあああああーーーーー！！！！！！」

そして、俺は当てもなく幼女を引き連れて夜の街を駆けるのであった。

12月22日（3）

帰巣本能というものだろうか……散々、街中を走り回って最終的に行き着いた場所は俺の巣窟であるボロ屋の賃貸住宅だった。

「はぁ……はぁ……」

……それに、何で俺はこの幼女まで連れてきたんだ。ほっとけばよかったじゃん！俺のバカチン！

「こ、ここがっ……お兄さんのお家ですね！つまり……それは私を買ってくれると、そう解釈していいということですねっ！きゃー！やったです！」

幼女はキラキラした瞳で俺を見つめ、きゃぴきゃぴした様子ではしゃぎだす。

「何でそうなるんだよ。単に逃げ回って、行き着いた場所が偶然ここだったんだよ」

「えっと、そういえば……私、お兄さんの名前知らないです。教えてくださいっ！御主人様っ！」

「こら、待てやテメェ。何、さらっと俺の台詞を流して、俺がお前を買うみたいな流れ作っちゃってんだよ。あと、御主人様って何だコラ？もう、『私は貴方のモノですぅ！』みたいな感じになってんのかコラァ？」

ぎゅぅううう〜〜〜

俺は両手を駆使して、目の前にいる幼女の頬を横に引っ張った。うん、ちょっと一瞬『御主人様』に揺らぎかけたけどねっ！それはな

いチョ！

「あうぅぅぅう～～～～～ふぁなひてくだふぁいいい～～～～～」

ちょっと、涙目で情けない顔でジタバタする幼女。ヤバイ、ちょっと萌　え　ま　す　た。……いかんっいかんっ、幼女をいぢめるのが趣味とか思われちゃあかなわんっ！俺は名残惜しかったが、両手を離した。って、名残惜しいのかっ！？俺っ！？

「うぅ……ひっく、名前……」

シクシク泣き出す幼女……え。何この罪悪感……ちょっ、だからホントやめてよそーゆーの。大したことしてないだろ？俺？

「人の名前を聞くときは自分(てめぇ)から名乗るのが礼儀ってもんだろうが」

「あぅ……（／／／）そ、それはそうですねっ！」

「あ……？何？何でお前、赤くなっちゃってんの？」

「うぅ、は、ハタチとしてですね！いえっ、大人としてちょっと礼儀知らずで恥ずかしかったというか何と言うかその……うぅ、とにかくですっ！社会人としてなっていなかった自分が恥ずかしかったのですっ！」

「はぁ……？何言ってんだ。幼女はそんな事、気にしなくていーの」

「あ、あぁー！まだ私がハタチだってこと信じていないんですねぇ！？……って、早く私の名前を名乗らせてください！」

「勝手に名乗れよ……」

疲れる……ホント疲れる。ＤＱＮの相手も相当疲れるが、幼女の相手はそれ以上に疲れるな……はぁ。

「私の名前は榎本双葉(えのもとふたば)ですっ、気軽に『双葉ちん』とでも呼んで下

さい！よろしくお願いしますっ！」
「よろしくしねーよ、双葉ちん●」
「ひどいですっ！（泣）」

もう、名前とかどうでもいいからさっさと帰って欲しい……『私を買って下さい』とか連呼するエロガキなんぞ傍に居たら……何するかわかんねぇーじゃねぇーかっ！俺だってなぁ……！俺だって！ケダモノという名の男なんだぞぉ！その辺のところよろしくお願いしますっ！

「あぁー分かった、分かった。双葉ちんね、ハイ。双葉ちん、とりあえず帰れ」グイッ

俺は幼女の背中を押す……かっえれっ！かっえれ！帰れソレントへ！

「あぁ！まだ、私、お兄さんの名前聞いてないですっ！約束したじゃないですかぁー！名前、教えてくれるって！うぅー！嘘つきですっ！嘘つきは泥棒の始まりですよっ！？」
「やかましいっ！こっちは泥棒くらいで怯まねぇんだよっ！もう、既にお前のせいで食い逃げしちゃったしねっ！アハハハハハ！ほらっ！笑えよっ！こんな惨めな社会人を笑えよっ！こらぁ！幼女ぉー！俺だってなぁ！？いっぱいおっぱいなんだよっ！やっべっ！おっぱいって言っちゃった！ほらなっ、俺はもうこれくらい末期なんだよっ！人間的になっ！両親にも捨てられて、あと一ヶ月で三十路を迎えるっつーのに今だ童貞オブザキングっ！あっははははーーーー！！！！！笑うしかねぇなっ！こりゃあ！ほらっ！笑えよっ！笑えって言ってんだろがよぉおおおおおおおおーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

知らぬ間に俺の両手は幼女の両腕を掴み大声で罵っていた。あれ…

…？ちょっ、何言っちゃってんだ俺……ちょっ、やめろよ……やめろよ……こんなの、こんなの只の八つ当たりじゃねぇか……この女は関係ねぇだろ？何で、おい、もう止めろ……もうそれ以上やるな……だが、一度紡ぎだした言葉は止まらない…もう、自分の意思で止められない。

「っ……い、痛っ……」

目の前にいる女は両腕の苦痛に顔を歪ませた……その表情に何故かカチンときた俺は女の持っていたエロ看板を無理矢理奪い取り……

「あっ……！」

女は驚いた表情を見せるが、もうそんなの俺には関係無い。怒りを、憤りを、自分でも胸糞悪くなる程の嫌悪を抱きながらエロ看板にぶつけてやりたくなった。

「生きていても楽しくねぇんだよぉおおおおおおおおぉーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」バキィ！！！

俺は看板を渾身の力を入れて、賃貸住宅の石造りの塀にぶち当てた。看板は木で出来ていたせいか塀に当たった瞬間、真っ二つに縦に割れた……

「………あ」

女は呆然と、一瞬何が起こったのか分からないような……今までとは違う表情ーーー悲しみも、怒りも、笑いも……何もかも、何も無い、何もかも失った……無表情で割れた看板をじっと見つめていた。

「……くそっ」

居た堪れないような気持ちになった俺は女に背を向け、自分の巣窟に向かって歩いていく……

「……俺はこんな人間なんだ。悪い事はいわねぇ……もう、家に帰れ」

俺がそう言うと、後方で静かにすすり泣く女の声が聞こえた……

「げっ……」

賃貸住宅の脇にある錆びれて抜け落ちそうなそろそろやばめの階段を二階に上り、奥に進むと一番端っこに俺の借りている部屋がある。その部屋の前で肩を木刀でポンポンと叩きながらタバコを吹かす一匹のＤＱＮ……いや、鬼畜ババァが機嫌が悪そうな顔で立っていた。

「やぁ、司ぁ……遅かったねぇ。こんな夜遅くまで何していたんだい？フゥー……あれかい？夜の街でウッホウホしてたのかい？まだまだ俺は元気ってか？やるねぇ、現役君」

鬼畜ババァこと、この賃貸住宅の大家である鬼流魔血子（きりゅうまちこ）がタバコの副流煙を俺に吹きかけ嫌味を言ってきた。この女、名前からして恐ろしく怖そうだが、名前のとおり怖いし乱暴な女だ。無論、過去に事あるごとに暴力を振るわれた経験値のある俺だから分かる。きっと、この女は今月の家賃の徴収にやって来たんだろう。だから、帰

りたくなかったんだ、ここに。

「……（汗）」

「おやおやぁ……その顔なら、司ぁ。分かってんだろうねぇ？あたしが何でアンタの部屋の前にいるかっつーことをよ……フゥー」

また副流煙を俺に吹きかける鬼畜ババァ……くそっ、何度も俺にてめぇの口臭くさい口から吐いたきったねぇ有毒ガスを俺に吹きかけるな……ガンだけでなく、変な病気にかかったらどうすんだクソッ！……絶対、この女には言えないけどねっ！

「誰が鬼畜ババァだいっ！！！」バキッ

魔血子は俺の背中に木刀を振り下ろした。

「いてぇ！？何しやがるっ！てか、俺何も言ってねぇんですけどっ！？」

「顔に出てんだよっ！それに一応、あたしゃあアンタより年下なんだよっ！このクソジジィ！」

「く、クソジジィって……俺、アンタと1歳しか歳、離れてねぇじゃねぇかっ！」

「細かい事をグチグチグチグチと……アンタは女の腐ったような奴だねっ！可愛らしさのカケラもない男だねっ！」

うるせぇクソババァ！てめぇになんか死んでも好かれたくないんだよブッチ野郎が死にさらせぇゴラァーーーー！……何てことは死んでも言えないけどねっ！

「まぁいいわ……それより、ほれ。今月の家賃寄越せやコラ」

来た……どうする、俺。どうするアイ●ル～♪言ってる場合じゃねぇよっクソッ！マジでどうする……

?目の前にいる女を倒す。

?『てめぇに払うマネーなんかねぇ！』と次●課長の如く目の前にいる女にぶちまける。

?逃げる、とにかくこの場から離脱する。

無理だコラァーーーー！！！！！？はともかく、？と？は天と地がひっくり返っても無理だわっ！？にしても、あの女の放つ殺気の前に俺の足はすくんで動けねぇわコラァーーーー！！！！！……

となると、かくなる上は……

「すいません、もう少し待ってください」

俺は床に両手と頭をつけ、身体全体が低くなるような姿勢……あぁー、土下座だよっ！土下座っ！臆病で悪かったな！でも、他に思いつかなかったんだよチックショー！

「あぁ！？今、なんつった！？もういっぺん言ってみろコラァ！！！」バキッ

魔血子はまた木刀で俺の背中を叩く……くそっ、くそっ、くそぉ……何で奴の方が立場が上なんだっ……俺のほうが年上なのにっ！俺のほうが……俺のほうが……あっ、それ以外思いつかねぇ！！！またまたチックショー！

「た、頼む……あともう少ししたらさ……まとまった金が手に入るんだ……それまで待ってくれっ！頼むっ！このとおりだっ！」

「何、ヤ●ザのドラマの被害者っぽい台詞吐いてんだっ！！！それ

でまかり通ると思ったら大間違いだよっ！！！とにかく払えないんだったら明日には出て行くことだねっ！今日は許してやるっ！感謝しなよ！ニート！」

「俺はニートじゃねぇっ！！！」

くそぉ……言いたい放題言いやがって……いつか、いつかなぁ……いつか……何も出来ねぇよ！これまたチックショー！

「あたしは約束を破る奴が大っ嫌いなんだ。明日の夜までに家賃納めなかったら強制退去させるよ」

魔血子はそう言うと俺に背を向け、階段の方に向かって歩く……が、立ち止まり、俺の方に振り向き……

「あんな小さい子……アンタとどういう関係か知らないけどさ、この真冬の夜に外に放って置いてさ……アンタの方が鬼畜だよ。アンタみたいなニート死ねばいいんだ、フゥー……」

そう言うと、魔血子はタバコを吹かしながら階段を降りて行った。

「だから俺はニートじゃねぇつーてんだろーがよぉー！！！」

見ていたのか……クソッ、何なんだ畜生……勝手なことばっか言いやがって……じゃあ、どうしろつーんだよ…くそぉ……

ここの家賃は1ヶ月、3万円。

六畳間の部屋に小さな台所、トイレに風呂つきで大きな街と最寄の駅に近いことを考えるとリーズナブル、いやかなりお安い家賃だとは思う。だが、今の俺にとっては絶望的な金額で。吉●家でワンコイン置いてきたので、もう俺の手元には一銭も残っていない。本当にどうしよう……いっそのこと、銀行強……待て待てっ！早まるな俺っ！ていうか、それやったら本当に人間として終わっちゃうから絶対やっちゃだめだよっ！まだ他に
手はあるはず……バイト先のケーキ屋で店長に相談して前金貰うとか……まぁ、店長気さくでいい人だからなぁ……なんとかなるかも。でも、問題はその後だよなぁ……その前金で家賃払っちまうと、給料の3分の1くらい金、減っちゃうんだよなぁ……そんな色々な事を六畳間の部屋でゴロゴロしながら俺は考えていた。

「うーん……やっぱ、バイト増やすしかないかぁ……」

12月じゃなくても年越しのバイトもいいかもな。要は12月と1月ちょっと暮らせる金があればいいし。

「うーん、うーん……切ねぇなぁ……今年も彼女出来なかったし、ロンリーなクリスマスになるのか……」

一応、大学の頃の友達はいるけど男同士でクリスマスパーティってのもちょっと……それに、確かあいつら彼女いたような……そんなおノロケ広場に行けるかチックショー！クソッ、完全に八つ当たりだが、あいつらちょっと殴りたくなってきた！

「……つーか、クリスマスパーティとか言ってる場合じゃないじゃん。そんな金に余裕ねぇよ」

クリスマスパーティってあれだろ？プレゼント用意しなきゃならね

ぇんだろ？買えねぇよっ！そんな金ねぇよ！浮かれてる場合じゃないわっ！馬鹿っ！馬鹿っ！俺のバカチン！

「……と、雪か」

窓の外を見ると、雪が降っていた。それもはっきり分かるような強烈で嵐のような雪……あぁ、何年ぶりかねぇー……こんな大雪降るなんて。こっちの街じゃ、全然雪なんか見れなかったのに。何だか新鮮な感じがするね……ふぁああ……とりあえず、今日は身体を休め……

「……って大雪っ！？」

ちょっと待て……俺なんか肝心な事、忘れてねぇか……何か大事な事……大事な……俺は何だか胸のあたりがモヤモヤした気分となって落ち着かなくなり、立って窓側のほうまで移動し、外を眺めた。

「……っ、あ、あいつ！？」

……賃貸住宅の入り口付近、そこで倒れている女がいた。トナカイの……ふざけたエロ看板を持った奴。……確か、名前は……

『私の名前は榎本双葉ですっ、気軽に『双葉ちん』とでも呼んで下さい！よろしくお願いしますっ！』

「っ！」

俺はダッフルコートを羽織り、そのまま大雪の降る夜の外へ駆けて行った。

12月22日（4）

ビュォオオオオーーーー……
表に出ると横風の強い雪の嵐が吹雪いていた。

「寒っ……」

ダッフルコートを羽織っていても寒かった……てか、シャレにならねぇじゃん。ホント勘弁してくれよ……俺はブツブツと愚痴りながらアパートのオンボロ階段を降りてい……
つるっ、ズルゥウウー！

「うぉ！？」

俺は階段で足元が滑りそうになったが、滑る瞬間、何とか手すりに掴まり事なきを得た。うっそ！凍ってるよっ！地面っ！ちょっ、おまっ、ここは北国じゃねぇんだぞっ！？おーい！誰か邦衛さん呼んでこーい！……いかんいかん、ちょっちテンパッてるな俺。しっかし、危ねぇなオイ！すっ転んで階段から落ちて気絶して凍死とかなったらシャレにならんぞオイ！

「し、慎重に行くか……うぅー、さぶっ」

俺は寒さしのぎに両腕を抱えながら、一歩ずつ階段を降りて行った。それにしても……アイツ。何でいつまでもアパートの前に居たんだ……だいたい、その、何だ。何故、俺にかまう？他の俺より百倍優しい奴に頼めばいいのに。……分からん、全くもって理解不能だ。

「くそっ、何やってんだよ俺……」

けれどあんな姿見たら放っておけねぇじゃねぇか……一度目に焼きついたアイツの姿は俺の記憶に残ってる。それが俺の身体を前へ突き出すんだ。一度、冷たくあしらった相手だ。もしかしたらアイツは俺に嫌悪さえ抱いている、つーかその可能性が一番高い。自分でも分かっている、俺は最低でアフォで三十路でちょっと根暗で童貞でもう……何ていうか、その直しようの無い人間的にダメだっつーことは。きっと、客観的に見ればさっきあの女にやった俺の行動は最低の部類に当てはまるだろう……だからこそ、どこかであの女を遠ざけていたのかもしれない。同属嫌悪じゃなくて、俺みたいな冷酷非道人間があの女に近づくことは気が進まないって。それは自分勝手な言い訳に聞こえるかもしれねぇけどさ。

「……何、脳内で語ってんだろうね。俺……」

とにかく、罵倒されても、殴られても、良かった。いや、それくらいして欲しかった。じゃねぇと俺みたいなアフォは一生気付けねぇから。

「はぁ……はぁ……」

そして俺はアパートの前まで行き、雪の上で倒れている女の近くまで寄った。色んな覚悟をして。

「おーい、生きてるかー」

俺は倒れている女の前でしゃがみ、女の頬を掌で軽くペチペチと叩いた。すると、目の前で倒れている女はかすかに反応し、顔をゆっくり上げ……

「あ……お兄さん……お兄さんだぁー、エへへ……（／／／）」

「……っ」

……女は本当に嬉しそうな、無邪気な子供のような真っ赤な顔で俺にそう言った。……何だよ、何だよコレ。何で……何でそんな表情を浮かべるんだ……俺は、俺は一度……お前を見捨てた男なんだぞ……？どうして……どうして……しかし、ソレを口には出来ず俺は……

「よーしっ、まだ生きているみたいだな。よっこら、せっと」

「……あ（／／／）」

俺はそのまま女を背負った。

「おーちめたっ、お前の身体ヤバイくらい冷えてんじゃん」

何故か軽々しい台詞しかいえない自分に対して嫌悪を抱く。あー……ホント、俺最低だわ。こんなんになっちまったのも自分のせいなのに。でも、何故だか不思議と気遣いの台詞が言えない。あれか？俺、コイツの親みたいな感覚で接しているからか？まぁ、幼女だしいいか。

「うぅ……お兄さん、私はハタチですよぉ……」

「お前はあれか？よくあるヒロインの能力を真似て作られたメイドロボか」

「何ですかそれ……全然意味分からないですよぉ……それに私はメイドロボじゃないです……」

さっきから、女の声が弱々しい。震えているのか……寒さで？

「……おい、お前」

俺が「大丈夫か……？」と言おうとしたが、その前に女が弱々しく口を開いた。

「……お兄さん、名前……教えて、下さい……いつまでも他人行儀な形で喋りたくない……です……」

耳元でかすかな息使いが聞こえる。それは女の……いや、もういいだろ他人行儀は。そう、双葉の身体が冷えて体力が落ちてきている事を意味していた。

「……司、溝淵司（みぞぶちつかさ）だ」

「あ……司、司、司……エヘヘ、司さん……ですね？私……もう、覚えましたっ。今度から司さんってお呼びしますっ。そして、今日からヨロシクお願いしますっ、ご主人様！」

「おーコラコラ、それとこれとは別だ。シェアーだコラ。俺はお前を買うなんて一言も言ってねぇぞ。第一、俺は1万なんて大金持ってねぇからな」

「うぅー……いいじゃないですかぁー……人間の腎臓は片方あれば充分なんですよ……？」

「お前かぁいい顔して何さらっと恐ろしい事言っちゃってんの！？悪魔かお前はっ！？」

「か、可愛いだなんてそんな……照れちゃいますっ（／／／）」

「いや、そんな桃色展開出されてもっ！ちっともドキドキしないか

ら！違う意味でドキドキしたわっ！」

何だ……ちょっと元気になったじゃん。双葉は笑顔で俺に「もぉー冗談ですよぉー♪」とか言いながら俺の頭をポンポン叩いてきた。……この幼女、調子に乗りやがって。

「えっと……その、お金……別にいいです。司さんが私を買ってくれたのでいらないです」

「おい、それは買ったと言えるのか？あと、俺はお前を買ってねぇんですけど。買わないんですけど」

「いいんです！司さんは私を……ヘックチ！」

「おいおい可愛らしいクシャミしてんじぇねぇよボケ。とっとと俺の部屋に行くぞ」

「うぅ、申し訳ないです……」

そして、俺は背中に当たるちょっと柔らかな感触に耐えながら（アレな意味で）、双葉を背負って再びアパートのオンボロ階段を上って行った。

「うぅ……寒いです、狭いです、心が寒いですぅ」

双葉は俺の六畳間の部屋に入ると、部屋の端で体育座りでそう呟いた。

「えっ？ちょっ、おまっ、最後の聞き捨てならねぇんですけど」

「うぅ……その上、お腹空きました……」クー

「え？何、君、何で可愛らしい音出してんの？えっ？お腹空いた？嘘だろ？お前、牛丼特盛食ってたじゃん。まるで親の敵のようにガツガツガツガツと」
「そっ、そんなに食べていませんっ！（／／／）」
すると双葉は顔を真っ赤にし、俺にそう抗議した。……あー、あれか？こういうのがでりかしーに欠けているとかなんとか……現実の女ってのは色々とメンドク臭せぇな。
「あー、待ってろ。冷蔵庫に何かあるか探してみる」
そして、俺は台所にあるマイ冷蔵庫を開け、中に何か食糧が残っていないか確かめる……おっ、これと、これなんかいいんじゃねぇか？
「ほら、もずく」
「い、嫌ぁーーー！！！そんな黒くてえげつない物体をこっちに見せないでくださいぃぃぃーーー！！！」
「えげつないって……おまっ、知らねぇのか？もずくはなぁ！食酢とあえて食うとうめぇんだぞっ！？海の贈り物なんだぞぉ！？このヌルヌルが最高にいいだぞぉ！？」
「そ、そんなヌルヌルしたものが大好きだなんて……司さん、不潔ですっ！ケダモノですっ！」
「おーおーコラ待てやてめぇ！もずく好きって言っただけで俺を変質者扱いかコラァ！全国のもずくふぁんくらぶの方々に謝れやコラァ！」
本当に……本当に美味しいんだぜ？もずく……
「ほ、他に無いんですかっ……！？」

「あーもう一つは……ほれ、魚肉ソーセージ」
「うっ……あ、あの！あのあのっ！そ、そういうのはまだ……早いと思うんですっ！その……もう少し、もう少しですねっ……距離が縮まったら……無くもないかな、と……（／／／）」
「……お前は何を想像しているの？いいから、それ食っちまえよＹＯＵ」
「う、うぅー……い、いただきます……れろっ、れろっ……ちゅるっ、ちゅるちゅる……（／／／）」
双葉はさっきより顔を真っ赤にさせ、何故かソーセージをしゃぶり始めた。えっ？何この無駄にエロイ構図。第二の俺が噴火しそうだよ？ビックビクって。
「普通に食えよ……」

「えっと……あの、司さん。その……少し、お願いしたいことがあるんですけど……（／／／）」
ソーセージを食い終えた双葉（あぁ！ほんっと地獄のような……いや、フルーツのような一時だったよ！うん！）は真っ赤な顔で俺に聞いてきた。
「……何だ？」
「えっと、そのぉ……お風呂、貸して頂いても宜しいですか？（／／／）」

双葉は下を向き、モジモジしながら人差し指の先でちょんちょんとさせている。

「え……」

俺は瞬間ーーーーー頭が真っ白になった。

12月22日（5）

ジャァアアアーーー……
浴槽からシャワーの流れる音が聞こえる。

「……あれだ、生殺しだろコレ」

双葉が身体の匂いが気になると……そんな理由で風呂を要求してきやがった。

「クソッ……」

一つ屋根の下で一緒にいるっつーだけで俺のリピドーがズンズン上昇していくっつーのに何だ、そのテンプレ展開。これはあれか？シャワーの音で想像して、オ●ニーしろってか？三十路前の健全なる男舐めんなよっ！俺のアレはまだ枯れてねぇぞオラァ！！！健在だぞっ！どらぁ！！！

「くっ……思春期真っ盛りの中坊か俺は」

俺は煩悩をかなぐり捨てるため、髪を掻き毟った。くっ、消えろっ消えろっ消えろっ！俺の脳内ビジョン消えろっ！あいつの胸は貧乳だっ！まな板だっ！つるっつるだっ！ペチャパイだっ！汚れていないっ！何も生えてない！だから俺は興奮しねぇ！

「ぐぁあああああああああーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！無理じゃあ！興奮するわっ！つーか、詳細に想像したせいで余計興奮したわっ！」

うぉおおお！馬鹿なっ！？俺が……俺が幼女相手に興奮するなんてっ！まさか……まさか、俺はロリコンに目覚めたというのかっ！？嘘だろっ！？マザコンロリコンは男が背負っちゃいけねぇ十字架なのにっ！

「何でだ……おいちゃんの息子ボッキッキしてるよ……」

信じられない事に俺のGパンの股間部は膨れ上がっていた……嘘だろ？

「くっ……俺って奴は……くぅ」

惨め過ぎて涙が溢れてきた。くぅ……三十路間近でこんな、こんな中学生みたいな経験を味わうなんて……あれだ、こんな性的な意味で惨めな気持ちを抱くのは俺が高３の頃、小４の妹と風呂に入った以来だ。

「あれ……？ということは……俺、ロリコンな上にシスコン……？ぐぁあああああああーーーーーーー！！！！！！！ダブルでショックだぁあああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！」

いやいやいやいやいや！！！！ダメだっ、ダメダメダヨ！メリー！このままじゃ俺……その場の勢いで賢者モードに突入しちゃうぞ！？だぁああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！

「いっちに！いっちに！いっちに！静まれ！俺のリビドー！」

俺はリビドーを抑えるためにさらにその場でスクワットをし始めた。

ふんっ、ふんっ！無念夢精！あっ、やっべっ！ふんっ！ミスった！ふんっ！無想だよっ！ふんっ！一文字違いで逆ベクトルの方向にイッチャウよっ！ふんっふんっ！

『子作りしまっしょ♪子作りしまっしょ♪（※冒頭部リピート）』

そして、俺がスクワットでリピドーを抑えていると俺の携帯の着信音が流れた。すっげぇタイミングでアニソンの着うたが流れたが……決して俺がそういうことを願望しているわけではないのであしからず。……本当だよ？

「……はぁはぁ、あ？」

俺は携帯を開き、ディスプレイに映し出された名前を見る。そこに映し出されていた名前は……

『溝淵栞（みぞぶちしおり）』

妹の名前だった。

「うっわ、マジかよ……」

ちょっ……どうしよう……無視すっかな……うーん。

「削除っ、と」

俺は考えるまでもなく電話を切った。うーん、思い切りが良すぎだね俺。

『目が、目がぁぁー！！』

「うおっ！？」ビクッ

電話を切ると今度はすぐさま俺の携帯のメールの着信音であるム●カの着ブォイスが鳴った。な、何だ……？電話の後に鬼のような恐ろしい速さでメールが来たが……

「……まさか」

そして俺は震える手でゆっくりと携帯を再び開き、受信メールを確認した。

『０９／１２／２２　２３：００　妹　件名：（´∀｀）』

「……あれ？本文何も書いてねぇ」

俺は何も書いていない本文を不思議に思い、そのままずっとスクロールしていく……うーん、件名の顔文字からして実はそんなに怒ってないのかな？うん、きっとそうだ。そうに違いない。俺は自分にそう言い聞かせ、ひたすらスクロールしていく。……つか、なげぇよコレ！そして、さらにスクロールしていくと……現れた文字は。

『コロス』

「ｏｒｚ」

『子作りしまっしょ♪子作りしまっしょ♪』

「ひっ！」ビクッ

ちょっ……俺は恐怖感から恐る恐る電話を取った……

「……もしもし」
『……』
「……」
『……』
「……」

……コワッ！（汗）こぇえよっ！無言の間！何か喋れよっ！何だよ！この電話越しからヒシヒシと伝わる緊張感！俺、精神的にくるよコレ！俺はプレッシャーに弱いデリケートな心を持つ男なんだよっ！

「……あの、栞さんや？（汗）」

俺は無言の間に耐え切れなくなり、自分から口を開いた。

『……お兄ちゃん、女の人の匂いがする……』

最初の台詞がそれかよっ！

「ねぇよっ！しねぇよっそんなん！だいたい電話越しで何で匂いまで分かるんだよっ！お前はアレか！？匂いの電波を送受信でもしてんのかっ！？」
『うぅー……わかるもんっ、絶対お兄ちゃん私の知らない女の人としっぽりがっぽりしちゃってるっ！』
「もんって……大学生にもなってお前……（汗）ていうか、年頃の女がしっぽりとかがっぽりとか言うなよっ！とにかく俺にそんな美人な恋人がいると思うかっ！？あぁ！？」
『うん、いないよね。ヨカッター』
「ちょっ、おまっ……そこですぐさま納得されると傷つくんですけど俺のピュアなハート」

『い る の ？』

明るい声とは打って変って、妹の声はドス重い声に変化した。

「イマセンデス」

そう言うしか無かった。だってだって！怖いもん！怖いもんもん！

『そっかー……お兄ちゃん、童貞なんだねー、うププ……』

お前も処女だろこの腐れポンチがァーーーーー！！！！！！……とは言えないのです、ハイ。

「……で？何の用だ？」

『うん、そのね。私、明後日のイブの日にそっちに行くから』

「あぁ……そうか、俺の家に……へぇ～って、何でっ！？」

『な、何よぉ……妹が兄に会いに行くのいけないって言うの？』

無　理　だ　っ　！大問題だっ！特に今の状況ではなっ！双葉を置いておく限り、妹と鉢合わせになる！ダメだ！まさに地獄絵図……やべぇ、俺生きてないかも。でも、そんな事は栞には言えなくて。

「あ、あのさ……悪いけど俺、その日予定入れちゃっててさ……大学の頃の仲間と飲みに行くんだ。だから、無理……」

『嘘。貴志さんと暁さん、奥さんいるでしょ？美希さんも御主人いるし……人生のパートナーがいないのお兄ちゃんだけ。なのに、イブの夜に男同士飲みに行くとかないでしょ？』

「うっ……」

こ、コイツ……覚えてやがるっ！なんちゅー記憶力だっ！クソォ…

…教えるんじゃなかった（泣）し、しかしだなっ……俺は諦めないぞっ！

「あ、あれだよ……あいつら全員破局しちゃってさ。貴志は八股が彼女にばれて別れて、暁は『フ●ラが気持ちいくない』とか言う理由で別れて、美希の奴はほら？魔女のような性格してんじゃん？だから、すぐ別れたんだよ、アハハ（汗）」
『嘘ばっかりっ！お兄ちゃん！もしかして、私に何か隠しごとしてるのっ！？』
「うっ、ち、違うっ！そんな訳無いじゃないかっ！アハハ……ハハ」
『その枯れたような笑いは何？』

ま、まずい……明らかに栞の奴は俺を疑っているっ……！お、落ちケツ俺っ！ばれなきゃいいのだ……双葉の事も。何とかうまいことして、こちらへ栞を来させないような方法はないかっ……！？考えろ、考えろ、考えるんだぁあああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！

『お兄ちゃん……何としても私をそっちに来させないように画策しているみたいだけど……』
「うっ！」
『無駄だと思うよ？だって、私それだけの理由でそっちに行くんじゃないもん。お兄ちゃん、実家からの入金止められてたでしょ？』
「……そ、それがどうしたんだよ」

そ、そうだ……栞は実家から大学に通っている。だとすれば、入金が止められている理由を知っているかもしれない。何でもっと早くそのことに気付かなかったんだクソッ！俺のバカチン！

『何でだと思う？』

「な、何でって……親父やお袋が俺に対して諦めの境地を悟って、勘当されたからだろ？」
『はぁ……やっぱり、そんなことだろうと思った。お兄ちゃん、全然分かってないね』
「分かってないって……何がだよ」
『その逆、お父さんとお母さんは心配しているんだよ？お兄ちゃん知ってるでしょ？お父さんとお母さんは過保護だって』
「……まぁ、そうだな」

確かに、俺に入金している時点で結構な過保護だとは思う。俺もそれに甘えちゃいけねぇって思ってはいるんだけどこの不況の世の中でまともな仕事につけなくてバイトの仕事で何とかやりくりしても生活していくためのお金は足りない。だから入金が途絶えた今、こうして金が底についたのだが。

『だから私お父さんとお母さんに頼まれたの。お兄ちゃんを実家に連れ戻してって』
「はぁ……な、何だよそれっ！？」

だったら何か！？入金が途絶えた理由って、親父とお袋が故意に俺を実家に戻そうとしたからかっ！？俺が偉そうに言える立場じゃないけどふざけんなっ！

『お兄ちゃん……私の苦労も分かってよ。お母さん意気消沈して、虚ろな目で『司……司……』とかブツブツ呟きながら台所でまな板の上に何も材料が置いてない状態で包丁持ってひたすらダンダン叩いている時あるんだよ？』
「えっ、何それ怖い」
『お父さんも意気消沈して、毎日『つかさくんとまさるくんのらぶらぶちゅっ♪ちゅっ♪ものがたり』とかいうタイトルの官能小説書

いているんだよ？』
「ちょっ、キモッ」

ちなみに『まさる』とは俺の親父の名前だ。

『あとね？翼お兄ちゃんなんか私が寝ているときに、布団の中で私の耳元で『はぁ…！はぁ…！司君っ！司君っ！司くぅーーーん！』とか言いながらオ●ニーし出すんだよ？もぅ、ホント迷惑してるんだからっ！！！』
「もうそれただのセクハラ親父じゃねぇかっ、お前もそんな馬鹿兄貴訴えろよっ！そんな変質者共が集う家なんかますます帰りたくねぇわっ！」

ちなみに『翼』は俺の一つ年上の兄貴だ。あ、あのクソ兄貴っ……！俺をオカズにして夜な夜なオ●ニー何かしてやがったのか……！？ちょっ、ホントきもいんですけどっ！？キモイという一言では片付けられねぇなっ！キチ●イだっ！ミラクル☆キチ●イっ！何か魔法少女のアニメっぽいタイトルになったがなっ！

『むぅーーー……！お兄ちゃん帰ってきてよっ！家族でまともなの私とお兄ちゃんしかいないんだからぁ！私に何かあってからじゃ遅いんだよっ！？』
「な、何だよそれ……どういう意味だよ？」
『うぅーーー……とにかくっ、お兄ちゃんが帰って来ないなら私がそっちに行くっ！』
「えっ……ちょっ、おまっ、最初言ってた事と微妙に違うくね！？」

ガラッ……
その時、浴槽の扉が開く音がした。
ダダダダダダダダダダ……

そして、何かが走る音……えっ？ちょっ、まさか……

「司さんっ！大変なことに気付きましたっ！私、着る服がありませんっ！」

身体にタオルを纏った双葉が大きな声でそう言いながら俺の目の前に現れた。

「ちょっ、おまっ！何でそんな格好で上がってきてんのっ！？」

タオルを纏っているとは言え、その下は……いかんっいかんっ！妄想するなっ！俺っ！妄想するなら金をくれっ！

「ですから私が元々着ていたトナカイの服以外に着る服が無いんですよぉ……その服も今は雪でべちょべちょですし……うぅ、どうしましょう……」

双葉はウルウルした子犬のような瞳で俺を見つめてくる……や、ヤメローそんな顔で俺を見つめるんじゃありませんっ！俺のテントがやばいことになりますよっ！？

『……お兄ちゃん？今の声……女の人、だよね……？』

うっ、や、やばいっ！今の声、電話越しで聞こえてたっ！

「ち、違う……今の声は……そうっ、オカマだよオカマっ、オカマの声だよ！（汗）」

『……お兄ちゃんって、そういう性的嗜好持ってたんだ』

ぐぁあああああああああーーーーーーーーー！！！！！！！！！そ、それは無いっ！だが、それを否定すれば女が近くにいるということを答えているようなものだっ！ひ、否定したいけど否定できねぇー！

『……嘘だよね？』

「ち、ちがうっ！違うぞ栞っ！俺は……俺はだなぁ……！筋肉隆々なオカマが大好きなんだっ……！筋肉フェチってやつだっ！あぁ！ギャランドゥも好きだぞっ！あのもっさもさした毛がいいよなっ！アレを愛撫してやるとあいつら『はふっ、あふぅ……（／／／）』とか言いながら感じやがるんだっ！フォー！筋肉サイコー！ギャランドゥサイコー！（泣）」

『お兄ちゃんキモイ……』

ぐっ、ぐぐぐっ、ぐっ……！絶えろっ……！絶えるんだジロー……！ここを乗り切れば、ここさえ乗り切れば……！

「司さんっ、早く私に服を下さいっ！このままじゃ風邪引いちゃいますっ！タオル一枚なんてすっぽんぽんと同じですっ！」

だぁあああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！てめぇは黙ってろっ！！！あと無駄に動き回るなっ！そのタオル落ちたらシャレにならんぞっ！？ちょっちポロリでサービス♪じゃ

済まないぞっ！？

『今の高い声……どう考えても女の人しか考えられないんだけど……』

「や、奴は本格派なんだっ！声帯まで変えているんだっ！正真正銘のオカマ何だよっ！」

「うぅ……司さん、さっきから私の方を向きながらオカマオカマって連呼してますけど……私はオカマじゃないですよぉ～～～正真正銘のハタチの女ですよぉ～～～！！！！！」

『……言ってるけど』

「違うッ……！奴はなっ！自分が男なのに女だと思い込んでソレを糧に自分が男であると見出しているロマンチックでトロピカルな奴なんだよ……！」

『もうお兄ちゃんが何を言っているのか意味不明だよ……とにかく、明後日のイブの日にそっち行くからね』

「だめだっ、だめっ、だめっ、だめなのですぅーーーーー！！！！！！」

『行　く　か　ら　ね　？』

「……ハイ」

ツーツー……妹からの電話が切れた。そして……どうしよう。絶望にも似た俺の心はまさにロンリーな気持ちでいっぱいだった。

「司さんっ、服貸してくださいっ！」

「……タンスに入れてある俺のYシャツ着ろ」

「下着はどうすればいいんですか……？そのっ、司さんのボクサーパンツ……を、うぅ（／／／）」

「ちょっ、おまっ！？何勝手に人の下着出してんのっ！？やーめーてーよー！そういうのっ！絵的にやばいからっ！下着まで面倒見切れるかっ！とにかくっ、俺の下着は着るなよっ！？いいなっ！？」

「うぅ……鬼畜です」
「……なんとでも言え。それかお前が元々身に着けてた下着着ればいいだろ……？じゃ、俺風呂入ってくるわ」
「あっ……その、あの……司さん、湯船の湯……全部流しましたから……またお湯張ってくださいね？」
「……あ？何で」
「うぅ、その……司さんが……私の浸かった後の残り湯……の、飲むかと思って（／／／）」
「誰がんなもん飲むかっ！！！」

12月23日（1）

ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「……ふぁ」

……朝か。すんげぇ眠い……低血圧で朝は苦手な上に今日は寝不足だ……ダブルで最悪だ……

ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「スー……スー……」

俺が寝不足の理由の大半はすぐ隣で天使のような吐息で今だ寝ている女のせいだ。いや、隣とはいっても布団は別々なのでそんなに青少年のようにドキドキする要素には入らない……と思う。

ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「んだよ……その格好」

しかしながら、双葉の寝相はすこぶる悪い。その上奴は下着の上に俺の貸したYシャツ一枚というラフな格好で寝ているわけで……色々なシークレットプレイスがチラリズムっちゃうわけで……寝れねぇよ！俺のブァナナもなっ！

ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「うへ、うへへへ……やっだぁ、司しゃん……そこは入れるとこじゃなくて出すところでしゅよぉ……むにゃむにゃ」

「コイツはどんな夢を見ているんだ……」

いかん、また俺のブァナナちゃんが双葉の寝言で反応してしまった、不覚。
ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「あー……だりぃ」

俺はだるい身体を起こし、何とか立ち上がった。あーフラフラする。
そして、玄関へと歩き出した。
ぴんぽんぴんぽんぴんぽんぴんぽーーーーーん

「さて……と」

「ぴんぽんぴんぽんうるさいんじゃこのクソババァがテメェのア●ル犯して俺の臭いブァナナ喰わせるぞゴラァ！！！」

俺は勢いよく玄関の扉を開き、大声で叫んだ。今日という今日は許さねぇぞあの大家の鬼畜ババァ……あのアマはいつもまだ俺が寝ている早い時間帯にこうやって何度もチャイムを連打して俺が外に出ると、そのままダッシュで逃げるといういわゆる『ピンポンダッシュ』をしやがるんだ。クソッ、何て嫌味なババァだ……そして、その挑発に乗る俺もガキか。だから今日は俺が先手をうってやった。フッフッフッ……見える、見えるぞ……いきなり俺が大声で飛び出してきてビビリまくってションベンをダダ漏らす魔血子の姿が……こんなことで優越感に浸る俺もちょっと情けない感じだがちょっとした仕返しだ。その後の俺は半殺しになるかもしれないが。

「ひっ……！」
「……あ、やっべ。妹ちゃんの方だったか……」
しかし俺の予想は的外れに終わった。俺が勢いよく玄関を開けると目の前にいた人物は魔血子では無かった。そこにいたのは鬼流魔血子の妹である魔鬼子（まきこ）で俺に驚いたのか尻餅をついて涙目になっていた。ライトブルーのロングヘアーに白い肌、丁度いい感じの胸に引き締まったボディ……うむ、一言言いたい。な　ん　で　そ　ん　な　だ　し。おかしい、名前負け……というより何で名前がそんなすごい事になっているんだろう。姉のほうは性格がアレなので（まぁ、容姿は美人の部類には入るが）あれで万事おっけーだが、妹はそんなイカツイ名前付ける程、豪快な性格ではないだろう。俺の知っている限りでは姉とは真逆でおしとやかで清楚で可愛らしい感じの子なのに。もし俺がこの子の親なら……優梨子（ゆりこ）って名付けるね。優梨子……いぃ！実に良い響きだっ！よしっ、今度からこの娘の事を『優梨子』って呼ぶぞこらぁ！

「ごめん、優梨子ちゃん。大丈夫か？」
「は、ハイ……ちょっと、お尻打っただけです……って、優梨子って誰です？（汗）」
「優梨子ちゃんは優梨子ちゃんだよ」ニッコリ
「は、はぁ……？私の名前は魔鬼……」
「あぁ！やめてくれっ……！頼むっ、今だけは俺だけの優梨子でいてくれっ……！そんな名前聞いてしまったら奴の呪いがっ……！気が狂いそうだっ！」
「？……は、はい？（汗）」
魔鬼…じゃなくて、優梨子ちゃんは優しげな表情で『え？何この人』みたいな顔で俺を見つめてくる。優梨子ちゃん、お願いだ分かって

くれ……君みたいな子にあのようなえげつない名前は似合わないのだから。

「それで、珍しいね。優梨子ちゃんが俺の部屋に来るなんて。何か用？」

「えっと、司さん……お腹空いてます？良かったら食べませんかコレ……」

優梨子ちゃんは俺の目の前にタッパーを出した。そのタッパーの中には唐揚、卵焼き、ウインナー等の色取り取りのオカズが入っていた。

「こ、これ……もしかして俺に？」

「はい、良かったら食べてください」

う、うぉおおおおおおおーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！ようやく俺にも春が来たっ！！！！！！う、うぅ……魔鬼、優梨子ちゃんの手作り弁当が食べられるなんて……ぼくぁ、感激したっ！！！神様ありがとうっ！！！これから僕は前向きに生きていきますっ！！！

「よ、喜んで頂きますっ！！！」

「はい、どうぞ。ウフフ、そんなに嬉しそうな顔してくれて私まで嬉しくなっちゃいます。お姉ちゃんが聞いたらもっと喜ぶかなぁ……」

「え……今、何て？お姉ちゃんが悦ぶ、じゃなくて喜ぶ……？」

「ハイ♪それ、お姉ちゃんの手作りのお弁当なんですよ♪」

「え……」

「おーい、起きろコラ」

俺は魔鬼、じゃなくて優梨子ちゃんと別れた後、部屋に戻り今だぐっすり涎を垂れ流しながら冬眠しておられる幼女のほっぺをぺちぺちと叩いた。

「うぅ～……司しゃん……いきなりア●ル嫌ですよぉ……最初はちゃんとした場所でして欲しいですぅ……ん……あ、あれ……？司さん……？」

「ようやく起きたかコラ。今の寝言にツッコミたいが、とりあえずお前腹減ってるか？」

「お腹……ですか？」

双葉が不思議そうな顔で自分のお腹を撫でると……

グルルルル……

「あっ……（／／／）」

「威嚇する野良犬の鳴き声みたいな腹の音だな。そっか、腹減ってるか。じゃあ、この飯を食え」

俺は双葉の目の前に先ほど優梨子ちゃんがくれたタッパーの弁当を出した。

「あぅううう～～～～～……つ、司さんっ！わ、わたしその……決して大食いではないですよっ！？こ、これはその……アメリカンが足りないのですっ、だ、だから……義務であって、義務教育の一環でありますっ！（／／／）」

「あーハイハイ、わかったわかった。おいちゃん充分、女の子のデリカシーを理解できるフルーティな年頃だから。だから落ち着け、テンパって後半何言ってるのかわかんねぇから。とりあえず、食えよソレ」
「は、ハイ……コレ、司さんが作ったんですか？」
「違うね、だが安心しろよ。髪の毛とか寄生虫とか毒とか毒とか毒とか毒とか……入ってないと思うから」
「はい、イタダキマ……って、髪の毛！？寄生虫！？毒ぅ？！な、何ですかそれぇ！？」
「アナタノオッパイガスキダカラー」
「誤魔化さないでくださいっ、何ですかコレぇ！？（泣）」
「いやいやいやいや……毒見とかそんなんじゃないから」
「毒見ぃ！？私、毒見役で食べさせられるんですかっ！？」
「だいじょぉーぶ。運が良ければ下痢とかで済むって、な？」
「否定しているようでもう毒見ってことを認めているじゃないですかぁー！？い、嫌ですっ！食べたくないですっ！」
「いいから食べなさいっ、お母さん食べ物を残すなんて許しませんよっ、そんな子に育てた覚えはありませんっ！全部食べちゃいなさいっ！」
「あぅー！はふはふっ……！」

俺は無理矢理、双葉の口を開き、とりあえず被害の大きそうな卵焼きを双葉の口に放り込んだ。

「もぐもぐっ……うぅ」
「……どうだ？味は？」
「うぅ……！こ、コレは……お、おいしいでしっ！この濃厚でクリーミーでフワフワな卵……こんな卵焼き今まで食べた事ないでしっ！」
「お前、キャラ変わってね？」

「うぅーは、箸が……！箸が止まらないでしっ！うまいでしっ！」
双葉は野生の獣の如く、次々と弁当を食していく……グ～……
「よし、しゅうりょ～。お前の毒見は終わった。俺に食わせろ」
「うぅ、司さんはいつも勝手でしっ！ダメでしっ！これは私がもらったでしっ！司さんには渡さないでしっ！がるるる……」
「なにぃ！？テメェ、居候の分際でご主人様に逆らうってかっ！？上等じゃねぇか！強引に奪って食ってやるっ！」

1時間後、我が家のトイレは渋滞となった……

12月23日（2）

「な、なんですかぁー！？こ、これはぁ？！」

正午、双葉が信じられないといった形相で俺に向けて声を荒げた。

「何って……昼飯だよ、昼飯。ジャパニーズランチだよ」

「う、嘘ですっ！わ、私っ、こ、コッペパンなんて……お昼ごはんで食べるの小学校の給食以来ですよっ！？これは何かのギャグですかっ！？ギャグなんですねっ！？そう言って下さい！！！」

「てめー！今、遠まわしにコッペパン舐めやがったな！？コッペパンはなぁ……コッペパンは偉大なんだぞコラァ！！！焼きそばとかコロッケとかフィレカツとか……挟まっているのを想像して食うとすげぇうめぇんだぞコラァ！！！あっ、やっべ、涎出てきた」

「どんだけ侘しい昼食なんですかぁー！？せめて、コッペパンだけじゃなくてオカズになるものを下さいっ！」

「仕方ないだろ、実際金ねぇし。モグモグ……あー、うめっ、うっめ！やっべ！このすき焼きパン！肉汁とか糸コンとかの甘みとパンが絶妙にマッチしてて最高にうまいっ！！！おいっ、双葉！お前もこれ試してみろ！意外といけるぞ！」

「うぅ……切ねぇです、切なすぎますぅ……モグモグ」

……無心、無心。こーゆーのは考えて食うと萎えるんだコレが。だから無心で食えばきっと豪華なランチを楽しめ……

ーーー（1分後）ーーー

「モグモグ……あー、飽きたわコレ」ポイッ

「司さん！私新しい味発見しましたよっ！塩がたっぷりかかった焼

き鮭を挟むとですね……！って早っ！飽きるの早すぎですよ司さん！？どんだけ根性無いんですかっ！？これだから今時の若者はですねぇ……！」
「うるせぇ！バッカじゃねぇ！？コッペパン単体で食うとか馬鹿のすることだよ！ぶぁか！バーカ！」
「司さんが言い出したことですよっ！？そ、それより聞いて下さい司さん！私新しい味発見しましたよっ！塩がたっぷりかかった焼き鮭を挟むとですね……！パクッ……はぅ～～～おうひぃですぅ～～～♪」
「……お前って結構可哀想な奴だったのな」
「な、なんですかぁー！その……哀れな子羊を見届けるような目はぁー！ひ、ひどいっ！ひどすぎますっ！司さん！……うぅ、いいですっ！死んでやるっ、死んでやるですぅー！」
「というわけで俺はバイトに行ってくる。留守番ヨロシクな」
「引き止めもされず普通に流されたっ！？うぅー……私って結局のところいぢられキャラなんですね……シクシク」

双葉は部屋で何かブツブツ言いながら泣いていたが俺は気にせず、部屋を出た。

俺のケーキ屋のアルバイトは昼過ぎから始まる。何でも店長の話によると午前中はケーキの仕込みで忙しいらしい。まぁ、所詮ケーキを売るだけの店員の俺には分からんがね。

「ありがとーございましたぁー！」

手作りのケーキ屋ということでクリスマスシーズンのこの時期は客の出入りが多い。今日も結構、ケーキさばいているなこりゃ。

「せんぱーいっ、このチョコケーキちょっと摘んでいいですか！？」

俺が必死でケーキを客にさばいていると横から元気な女の子の声が聞こえてきた。彼女の名前は桃色苺（ももいろいちご）、俺より後に入ってきた新入りの女子高生のバイト君だ。名前のとおり桃色のショートヘアーでスタイルは女子平均といったところ。つまりは巨乳でも貧乳でも無い、普乳だ。ギャルゲーで言うところのモブキャラに属する……って何を言ってるんだ俺は。

「いや、だめだろ。それモロ売り物だし」

「そんなぁ～～～～……せんぱぁい～～～～……私、モロ出ししますからぁ～～～～……一口だけっ、ねっ？一口？」

「えぇ？うへへぇ、し、しかたねぇなぁ……って、ダメだダメだダメだぁー！何、ちょっとうまい事言っちゃってんの君！？一瞬、揺らぎかけた俺もやばいけどっ！！！」

「ちぇっ、先輩のどけちぃー」

……と、このように彼女はまだケーキ屋の売り子の仕事にまだ慣れていないようでちょっと先輩の俺もこまっちんぐってわけだ。……もう、彼女今日でこのバイト入ってから一週間経つんだけどな……うん、売り子の融通がよく分からないとか……そんなんだよね？きっと、うん。じゃないと泣くよ？俺？

「いいから、君は仕事をしなさい……ほらっ、今君の目の前にいかにも裏の仕事に関与してそうな怖いオジサンが……って、うひぃ！すいませんっ、ちょっ、ほんとうにごめんなさい！ごめんなさい！だから……その、人を射殺するような目で見つめるの止めてくれませ

んか……？うっ、ほ、ほらっ！苺ちゃん！早く接客して！ほら早く！僕が殺される前にっ！」

苺ちゃんの前に客、いやお客様（おそらくヤのつく方）が立っていた。うわぁ……やべぇよ、あの人めっさ見てるよーめっさこっちにらんでるよーよよよよよ～～～ん様（泣）

「アッハハハー、そのパンチパーマいつの時代の人だー♪全然似合わねー♪」

苺ちゃんはヤのつくお客様に指を指してゲラゲラ爆笑していた……なっーうっ！！！

「ぎゃぁあああーーーーー！！！！！な、何言ってるのでございますか苺ちゃぁ～～～ん！？き、君は名前の通り甘酸っぱくて優しげなお言葉でお客様を気持ちよくさせてフォオオオオオオオオ（↑どうやらテンパッているご様子）」

「あははははーせんぱーい、焦りすぎー。ほらっ、この人何かくれるみたいですよ♪」

ち、ちがっ……そのスーツの懐から何を出そうとしているのですかぁーお客さまぁー！？チ●カ！？ナ●フ！？ぎゃぁあああああああーーーーーーーーーーーーオワターーーーーーｏｒｚーーーー

「……ねぇちゃん、この金でそこのチョコケーキくれや。釣りはいらんさかいに」（ヤのつくお客様）

「はいっ♪」

……へ？

「し、死ぬかと思ったわ……」

ヤのつくお客様がケーキをお買い上げし帰った後、俺はその場で脱力した……け、ケーキ屋のバイトってこんな命の危険を伴う仕事だったっけ……？

「先輩は大げさなんですよー……ハイ♪コーン茶でも飲んでください♪温まりますよ♪」

「あぁ……サンキュ」

ムッ……ほのかなコーンの香りがする。コレはうまい茶だな。

「それより先輩ー。ここのケーキ屋の服って可愛らしいですよねー」

苺ちゃんはサンタクロースの格好だった。店長の趣味だろうが……うむっ、素晴らしいっ！これぞ王道だろうっ！どこぞの幼女はトナカイの着ぐるみとか全然男心を分かっていないようなアホ丸出しの格好をしていたが。

「ほらっ、先輩サービスサービスぅ♪」

苺ちゃんはサンタのスカートを一瞬上げ下げした……くっ、俺の研ぎ澄まされた動体視力で見えた！ピンク地の水玉模様だっ！！！

「ＷＯＷ！げへへ！役得役得！……ってコラァー！！！このクソガキがぁー！いたいけな大人をからかうんじゃありませんっ！でも、

ありがとうっ！！！おいちゃん感激したっ！！！」

「えへへー♪先輩のえっちー」

……とまぁ、こんなゆるゆる～な感じのケーキ屋のバイトをやってるわけです、ハイ。

12月23日（3）

夕刻を示す朱色の光が街を覆いだした頃、苺ちゃんはバイトが終わり帰ったので店先のレジは俺一人だった。客足が少し落ち着いていたのでぼ～っとしていると店の奥から頭をボリボリ掻きながらタバコをくわえた男がやって来た。

「ふっー……人生うまい事いかないもんだねぇ」

苦虫を噛み潰したような表情で俺の目の前に現れた男はケーキ屋の店長、篠崎右助（しのさきうすけ）。４１歳で未だに人生のパートナーがいない、いわば俺の心の先輩（？）だ。悪い意味で、だが。

「店長……どうしたんすか？」

「いや、何。また、振られちまったんだよ」

店長はやれやれといった様子で自分の肩に手をやった。

「どうしてかねぇ……」

「またナンパっすか……そりゃそうっすよ。いきなり女性に『オ●ニーしてください』は無いっすよ……」

「ばっきゃろう！今日はその台詞で告ってねぇよっ！俺も考えたよ……そりゃいきなり外野プレイは早すぎるかなって」

「……それで、何て告ったんすか」

「『せっくるしてください』って」

「いや、悪化してんじゃねぇっすか（汗）ていうかそれはもはや告白じゃねぇし、ただのド変態野郎じゃないっすか」

顔はそこそこハンサムなのにそんな事ばかり言ってるからいつまで

経っても人生のパートナーを見つけられねぇんだよ……と思ったが、自分もまだ見つけられていないので口には出さなかった。

「うるせぇぞ司。俺ぁ、な？抱きてぇんだよ、女を。考えてもみろ、世の中にどれだけ女が溢れかえっていると思っている。それなのに、独身？童貞？はっ！かっこわりぃ……」

「はぁ……まぁ、確かにかっこわりぃっすけど」

「おう！誰がブサメンだコラァ！！！」

「んなこと言ってないっすよ！告るの失敗したからって俺に当たるの止めて下さいよ！？」

「チッ……歳をとるにつれてオ●ニーテクはドンドン磨きがかかるのに一向に男に磨きはかからない……俺、もう４１だぞ？そろそろ真剣に女の味を知っとかないとやばいかなって思ってます、ハイ」

「女の味って……あと何で敬語なんすか」

「もう俺はもう決めた、２０代３０代のアマには手をださねぇ。あぁ、アラフォーのクソババァもナッシングだな……どうせなら年下、そうだな……小学生あたりで手を打っとくか。中学生のガキになると急に大人ぶって生意気になるからな」

てめぇだってアラフォーじゃねぇかオッサン……

「マジロリじゃないっすか（汗）それは犯罪っすよ店長」

「いいんだよ、純粋な小学生の女が。身体は……んー、あれだけど？まぁ、いいじゃん。その辺は見逃します」

「あれってなんすか、あれって。ていうか、店長何か怖いっすよ」

「いいんだよ、ドラマでもよくあるだろ？最初は親子みたいな微笑ましい関係が続いてドンドン……こう、なんつーか？お触りタイム？みたいな？」

「うっわ……俺の中の記憶に残る感動的な親子のドラマが汚されて気分……つーか、お触りタイムってなんだよ！？んなハレンチイベ

ントねぇよ！アンタは小学生に何を求めているんだ！？」
「せっくるだよっ！せっくるっ！！！わりぃかコラ！！！うほ！うほ！うっほうほ！せっくる！せっくる！」
「往来でせっくる連呼するなよっ！マジポリさんに捕まれよロリコン野郎！！！」
「おうっ、誰がロリコンだコラァ！『聖なる性使者ロリータコンプレックス』って呼べっ！！！つーか、俺を崇めろっ！！！コラ！！！」
「何ちょっとカッコいい感じに仕上げてんだよっ！！！きめぇんだよ！！！クソジジィ！！！」
……こんな感じで俺と店長の軽口から始まり、次第に喧嘩になるのは日常茶飯事だ。
「ままぁ、あのおじちゃんたちなにしてるのぉ？」
「しっ！見ちゃいけません！」

「フッー……で？司、お前はもう女できたのか？」
ひとしきり店長と言い合った後、もう疲れたのか店長は俺にそんな事を聞いてきた。
「……できてねぇよ、わりぃかコラ」
「ぷっ、だっせーw」
殺してぇ……

「……つーか、店長。あんた、ケーキの準備はいいのか」
「ケーキ？んなもん、朝のうちに済ませたわボケ、スネ毛。おっ、そうだ、ケーキで思い出したぞコラ。こないだなぁ、試してみたんだよ、ケーキオ●ニーってやつをよ」

またエロ談話かよ……もうこんなクソ店長無視して仕事に取り掛かるとしよう……

「すみません、この苺のショートケーキとチーズケーキとショコラひとつずつ下さい」

前を向くと女子高生の客がいた。

「はい、苺のショートケーキとチーズケーキとショコラの三点ですね？三点でお会計８００円となります」

後ろで店長がブツブツ何か言ってるがムシムシムシキング……

「おいっ、聞いてるのか司ぁ！？いいか……最初の内は『ケーキでオ●ニー？ありえねーw』とか思ってたんだけどよ、俺様サイズの穴あけてやってみるとだなぁ……これが意外と気持ちいいんだ」
「……」
「『はぁはぁ……うっ、何コレ？ありえねー、き、きもちいいぞぅ！』そう、俺のビッグマグナムをクリームがまるで聖母のように優しく包み込んでくれたんだ……」

これはアレか？ツッコミ待ちか？俺がツッコマないと喋るのをやめないダッ●ワイフか？あっ、ワイフじゃねぇよ！やっべ、心の中でノリツッコミしちまった。だが、奴にはツッコマんぞ……無心無心。

「……」
「『うっ、うおっ、うおぉおお！？出る！出ちゃう！俺のアレがすいとられちゃいますぅううう〜〜〜〜〜……ザ●メン！ビックビク！』」

ねぇ、ちょっとオジサン？ホント黙って……？しかし、客の前でそれは言えない。

「そんな感じで俺は無事、賢者に昇華したんだが……そうだな、ちょうどそのとき使ったケーキがそのショートケーキそっくりだったな」
「……」
「……」

「……おいコラ」
「あー？何ですか？童貞君」

店長は鼻糞をほじほじしながら流し目で俺を見てきた。何そのちょっとムカつく顔。

「てめぇ、客の前で、しかも女子高生の前で何トチ狂ったことほざいてんだよ！！！すっげぇ、変な空気になったじゃねぇか！！！」
「いいじゃねぇか、売れたんだし。それにあの娘、ウブなやっちゃなぁ。最後に店から出て行くときに真っ赤になって俯いて……ひひっ、俺のオ●ニーで汚れた手で作ったケーキを食うんだな……何か

興奮するぜ」
「マジで死ねよロリコンさん……」
こんなロリコンがケーキを作れるなんて……信じられんがうらやましい……くなんかないんだからねっ！？
「っと、そうだ店長。ひとつ頼みがあるんだが」
「んぁ？なんだい童貞君？」
「あぁ、給料を前金で欲しいんだロリコンさん」
「理由を話せよ童貞君」
「おカネ無くてアパトおいだされそうになてるヨ」
「何で喋り方がエセ中国人なんだよ」
「たのむっ、何でもするから！童貞でもなんでもお前に捧げるからっ、店長！この通りだっ！」
「そんなもん俺に捧げるなよ……あー、いいよ。やるよ、前金。持ってけドロボー」
店長は懐から茶封筒を出し、俺に手渡した。何でそんなところに入れているのか疑問だが。
「ま、マジかっ！？サンキュー！ロリ……ロリコンさん」
「おい、今何でそのまま言った」
絶対このロリコン店長の事だから即断られると思ったが、何にせよコレで何とか生活していける……俺はとりあえず店長にちょっぴり感謝して、茶封筒の中身を開いた……が。
『肩揉み券１０万円分』
「……おい、これは何かのギャグか？全然笑えねぇんですけど」

「おっし、司。今日から俺の肩をモミモミしろよ、１０万円分なー」
「しかも俺がすんのかよっ！ふざけんなっ！早く金寄越せやロリコンジジィ！！！」
「なにぃ！？俺の神のような肩を触れられるだけで光栄だろうがっ！！！いいからありがたく俺に感謝を込めて慈悲深い気持ちで泣きながら肩を揉めコラァ！！！」
「殺すっ、てめぇは殺す！殺して肥溜めに沈めてやるわボケェ！！！」

俺とクソ店長は本日2度目の掴み合いを繰り広げた。常連のお客様から何故か微笑ましく見守られているが、とにかく俺は目の前のクソの顔面に取り合えず一発キッツいのお見舞いするのに徹した。

「じゅるるるるる……どれもこれもおいしそうですぅ……」

……が、そんな掴み合いをしている最中にここで聞こえるわけのない声が俺の耳に入ってきた。そして、ケーキを並べているショーケースの前に視線をやると……

「……おい、何故貴様がここにいる」

昨日と同じくトナカイの着ぐるみを着た銀の長髪のちょっと痛い感

じの幼女、つまりは双葉が指をしゃぶり、物欲しそうな目でショーケースの中に並べてあるケーキを見つめていた。

「……？はっ！司さん！何故ここに！？」

「こっちが聞いてんだよ、何でお前がここにいる？確か俺はお前に留守番を任せておいたはずだが」

「え、えっとですね……その、あれからお腹が空いて……（／／／）つい、ふら～っと街に出たらですね……美味しそうな香りがして、その……辿って行くとここに辿り着いたんです……」

……ケーキってそんな遠隔に香りを放つ物体だったっけ？コイツの嗅覚はどうなってやがるんだ。

「おい、司。こちらの幼女は？」

店長は何故か執事のような素振り（掌を上に向け、双葉の方に手を向ける）で俺に紹介を求めてきた。

「よ、幼女……」

双葉は顔を真っ赤にさせ、俯き加減でプルプル震えていた。

「あぁ、そちらの幼女は榎本双葉。ハラヘコポコリン星からやって来た大食い幼女だ」

「わ、私は大食い幼女じゃないですぅ！！！（／／／）」

「フッー……なぁ、司君よ」

店長に双葉の事を紹介すると店長は俺の両肩に優しく手を置き、俺を見つめてきた。……何だ、その我が息子を見つめるような哀愁に満ちた瞳は……き、気持ち悪ぃ（汗）

「な、何だよ……」
「……近親相姦って禁忌（タブー）だよな？」
「いきなり何を言ってるんだアンタは……」
「俺は……恋してしまったんだ」
「はぁ？誰に？ちょっ、まさか……俺かっ！？やめてよそーゆーの！？俺、ソッチ系に目覚めていないんだからさぁ！？うわぁ……マジ、ドン引きだわぁー……」
「ばっきゃろう！何で今の流れで俺がお前に恋する展開になるんだよっ、違うだろ！？そこにいる彼女だよっ、彼女！」
「そこにいる彼女って……もしかして双葉の事か？」
「……？」

俺が双葉の方にチラッと顔を向けると、双葉は不思議そうな顔で俺と店長のやりとりを眺めていた。

「そうだよっ、フタ●リちゃんだよ！あぁ、マジ俺の中のソウルハートにチャッカマンだぜ……」
「双葉な、いい年こいたオッサンがソウルハートとか言うなよ……でも、いいのか店長？あんなナリして実はあいつハタチなんだってよ。アンタ幼女専だろ？」
「いいのー身体が未成熟ならなんだっていいんですぅー……そうだ、ところでお前とこの子の関係ってなんだ？兄妹か？従兄弟か？はとこか？はたまた遠い親戚か？」
「アンタは何が何でも俺と双葉を血縁者の関係にしたいみたいだな……あっ、それでさっきの近親相姦なんたらかんたらに繋がるわけか……だが残念ながらアンタの願い空しくアイツと俺は全くの赤の他人だ」
「じゃあ、何でお前と双葉ちゃんは知り合いなんだよ」

……この店長に双葉が居候であることは言わない方がいいな。言ったら面倒臭そうな展開になるの目に見えてるし。友達ってことにしておくか。

「あぁ、双葉とは友達なんすよ」
「なっ、なにぃ！？ヤッたのか！？ヤッターマンなのか！？」
「どうして友達と分かった瞬間、エロ関係に走る……やってねぇよ。只の友達だよ、友達」
「なにぃ～！？あー！分かった！お前の言う『友達』つーのは『セッ●スフレンド』のことだなぁ！？きぃー！うーたんくやちぃー！」
「あー、もぅ面倒くせぇなぁ！！！アンタ、マジで面倒くせぇよ！！！そんなに気になるんだったら直接、双葉に聞くなり告るなりしろよっ！あと自分のことうーたんとか言うなよ！！！」
「そ、そんなの……は、恥ずかちぃし（／／／）」ツンツン

店長は両手の人差し指同士でツンツン突きながら唇を尖らせモジモジする……何だ？この気持ち悪ぃ生物は？（汗）

「それが平気で女の前で『せっくる』連呼するアンタのタマかよ……今更恥ずかしがるも何もないだろ」
「つ、司さん！」

店長とアフォなやりとりをしているといきなり俺を呼ぶ甲高い声が聞こえてきた。

「は、はぃぃ！？」
「何でアンタが反応するんだよ。どうした双葉？」
「は、はい……そのお願いがあるんですけど……そのっ、遠慮しますからぁ！聞いてください！（／／／）」

双葉は俯き加減でそんな事を口にした。

「ん？何だ？そんな言い方せんでも……それじゃあ、まるで俺がケチ野郎みたいだろ。いいから言えよ？何だ？」

「えっと、その……ケーキが食べたいです……」

「いや、そんな名場面っぽい感じで言われても。何が食いたいんだ？」

「……全部（／／／）」

「全然遠慮してねぇじゃねぇか！！！」

ぎゅう～～～

俺は両手を駆使して双葉の頬を抓った。

「いはいいはいいはいでふぅ～～～やめてくらはいぃいい～～～つかさふぁんん～～～（泣）」

涙目で俺を上目使いで見つめる双葉……くぅ、や、ヤメロー！お、俺はそんな小動物のような瞳に屈しないぞぉー！？

「司君！女の子になんてことをしているんだっ！やめたまへ！」

すると店長が俺と双葉の間に入って止めた。

「うぅ、痛いですぅ……」

「大丈夫ですかお嬢さん？おぉ、可愛そうに……女の子の顔に痕が残ったらどうするんだ」

店長が痛がる双葉の頭をなでなでしていた……なんだこのロリコン？キャラ変わってね？

「そういえばお嬢さん、さっき私めが手作りしたケイクを全部食べたいと仰っていたようですが……もしよろしければ、当店自慢のケイクをご賞味いただけませんか？」ニッコリ

店長は双葉ににっこり微笑みスマイルを向けた。ケイクって……だから何なんだこのロリコン？普段とキャラが違いすぎて吐き気と眩暈と妙なイラつきが湧いてきた……あー、何だろう？めっさ気分悪いんですけど。

「ほ、本当ですかっ、も、もちろん頂きまふっあうっ、痛いですふぅ……」

このガキ、舌噛みやがった……けっ、ザマーミロ。……あ？あれ？何で俺こんなイラついてんの？

「もちろんです、ケイクの御代はそこの彼につけておきますから」ニッコリ

「おいコラふざけんなっ！！！」

「えへへぇ～～～♪ケーキっ、ケーキ♪」

双葉は終始、子供のようにはしゃいでいた。一方俺は何故か今日のバイトの終わりまで胸の中でモヤモヤする妙なイラつきが治まらなかった……

12月23日（4）

「うっわ、またいるよ……」

ケーキ屋のバイト終了後、双葉と一緒にアパートへ帰ると遠目から俺の部屋の前で大家の魔血子が邪鬼のような面で立っているのが見えた。あの……一箇所だけ空間が捻じ曲がっているんですけど。オーラで人を殺せますよ？オバサン？（汗）

「うぅ、しかも手には金棒を持っていますよぅ……」

双葉が泣きそうな声で震えながらそう言った。や、ヤメロー！泣くなっ！泣きたいのは俺の方なんだっ！！！

「凶器がパワーアップしてやがるな……下手すりゃ命の危険も……」

「司さぁん！！！何とかしてくださいぃいいいい～～～～～（泣）」

「な、何とかつったって……金ねぇし。素で謝るしかねぇだろ……」

結局あれから店長に前金もらえなかったし……手元に残ったのは肩揉み券１０万円分（しかも店長手書きの）だけ。まさかコレが今月の給料とかふざけたこと抜かすんじゃないだろうなあのクソ店長……くっそ、今度会ったら絶対アイツの鼻毛抜いちゃるＹＯ！！！

「す、素で謝って許してもらえるのでしょうか……？」

「ほぼ百パー無理だね、無理だよ、むーりぃー！けっ」

「じゃ、じゃあどうするんですかぁー！？というか何でそんな態度がふてぶてしいんですかぁ！？真面目に考えてくださいよぉ！！！うっー！うー！」ジタバタジタバタ

双葉はついには雪の上で横になり子供のように手足をバタつかせ始めた。コイツは本当にハタチか？

「落ちケツ、まだいくらか手はあるかもしれない、まずこれを見ろ」

俺は手元に残った店長から貰った肩揉み券１０万円分を双葉に見せた。

「肩揉み券……？えっと、それがどうかしたんですか？」

「奴にやるんだよ、コレで許してくださいお姉様々って」

「子供のおじいちゃんへのプレゼントじゃあるまいし無理ですよぉ！！！しかも何ですかそれぇー！？手書きじゃないですかぁ！？馬鹿にしているの丸出しですよぉー！！！」

「それにちょっとしたオプションも加えるんだよ。『お、おねがいですぅ～～～お姉様のお靴を私の汚らしい舌で舐め舐めして綺麗にしますからぁ～～～ペロンペロン！ちゅるるっ！』ってな感じでよろしくな双葉」

「そ、それ私がするんですかぁー！？そんなプライドを全部かなぐり捨てた人間みたいな行動したくないですよぅ！！！」

「お前にハナからプライドなんて存在しねぇんだよっ！！！俺に家に居候している時点でなっ！！！」

「司さんひどいですっ！横暴ですっ！鬼畜ですっ！マザコンですっ！」

「誰がマザコンだっ！！！ちょっと確信スレスレのこと言われてビックリしたじゃねぇか！！！」

「え……つ、司さん？」

「やっ！見るなっそんな目で見ちゃやだっ！これは大人の事情なんだよっ！仕方ねぇんだよっ！あっ、やめて！そんな純真無垢な目で見るのやめてぇー！」

くっそ、分かってるよ……こんなショボイ作戦が成功するわけないってコトくらい。しかし、どうしたものか……今度は土下座プレイじゃ絶対無理だろうな。

「くそぅ！そうだっ、てめぇ双葉ぁ！お前も何かアイデア出せよっ！一応お前も俺の居候もといペットみたいなもんだろっ！？」
「ペットって何ですかぁー！？私は人間ですっ！まごうことなきヒューマニズムですっ！」
「うるさいっ、奴隷じゃないだけありがたいと思えっ！あとヒューマニズムは微妙に違うからなっ！それより早くアイデア出せっ！」
「むぅ～……」

双葉は頬をプクーッと膨らませしばらく俺を睨んでいたが、諦めたのかじっと考え始めた。

数分後……

「拳骨せんべいを渡すのはどうでしょう！？きっと喜んでくれるはずですっ！」
「お前も結局、媚売りプレイかよっ！しかも何だその食い物のチョイス！？拳骨せんべい！？お前はアレか！奴に喧嘩でも売るつもりかっ！そんなん渡した瞬間、大魔王がご光臨するぞコラァ！！！」
「え？あの大家さんって歯が弱い方なんですか？」
「それNGーーーーーーーー！！！！！言っちゃだめぇ！ホントダメだからそれっ！奴の前で年寄りを匂わせる発言は確実に寿命を減らすよ！？特に俺のなっ！」

「ならひ●こまんじゅうならどうでしょう！？柔らかいし、めちゃくちゃおいしいですっ！私、月に一回は食べてますしっ！」
「だからお前のそのチョイスは何っ！？いや、うまいけどっ！お前はアレか！？九州大好きっ子か！？」

だいたい、媚売りプレイには問題点がある。それは……

「うっ～～～何がいけないんですかぁ！じゃあ、ず●だ餅でなじょ（仙台弁で『どうだ』の意）！？」
「なじょって……いや、あのな。いいか？よく聞け双葉……俺達は金がない、よってそんなもん買えない、以上」
「うっ、そうでした……」ガクッ

双葉は落ち込んだのか下を向いた。くぅ、媚売りプレイは破棄……となると、かくなる上は……

「よし、『誘拐作戦』だ」
「え？」

双葉は顔を上げ、呆然と俺を見つめてくる。うむ、お兄さんその犯罪者を見るような軽蔑の眼差し大好きだよ、なんせドMだし。ごめん、嘘です。ハートがアウチです、デリケートなんです僕。

「すまん、言葉が悪かったな。正確には『人質作戦』だ」
「あまり変わっていないような気が……」
「悪鬼、魔血子には一つ年下の妹がいます。その名も魔鬼子ちゃん、名前と顔が一致しない可愛らしい女性です。俺は嘆きました、何でそんなエゲツナイ名前なのか、と。そこで俺は改名しました、優梨子と」
「何でそんな説明口調なんですか……？そして、人の名前勝手に改

名してますし……」
「その優梨子ちゃんは姉とは間逆の存在、獣の群れにハムスター1匹と言いますか、とにかく優しくて魅力的な女性でして……頼んだらオッパイ揉ませてくれそうな雰囲気を漂わせている女性なのです」
「頼んだんですか……？（汗）」
「そんな彼女を人質とし、悪鬼魔血子を倒す！じゃなくて懐柔するという作戦です」
「……何か人として最低な事しようとしているような気がするんですけど（汗）」
「イインダヨー！とにかく、今日の寝床を確保するにはコレしかないっ！」
「あの……絶対、うまくいかないような気がするんですけど……」
なぬっ！？俺の完璧な作戦がうまくいかないだと……？馬鹿なっ！？
「なにぃ～！？これのどこがうまくいかねーつーんだっ！？あぁ！？」
「えっと、うまく言えないんですけど……まず、魔鬼…」
「優　梨　子　っ　！」
「え、えっと……まず、司さんに対する優梨子さんの信頼ガタ落ちです」
「え……」
「その、たとえうまくいったとしてもですね？魔血子さんがそのまま黙っていると思えないです。流血沙汰になること必須です。それと、ダブルで司さんに対する優梨子さんの精神的攻撃もありえます。無視、睨まれる、誹謗中傷等々……司さんの精神面を攻撃すること必須です」
「……お前、結構可愛い顔してリアルにきっついこと言うね」
これは結構くる……やばい、すっげぇ胸痛ぇ……ただでさえロンリ

ーなのにこんな……俺は……俺は……そして俺が俯くと……

「……あっ、ご、ごめんなさい司さんっ！わ、私その……ひぅ、こ、こんな……つもりじゃないのにっ……！ご、ごめ、んなさ……ひっく、ごめんなさ……」

双葉はポロポロと瞳から涙を流して何度も謝った。マジ泣きだった。俺は……そんな双葉に……

「……悪い、そうだよな。今のは俺が悪かった、ごめん」

俺は双葉の頭を撫でていた。そうだ……そうだよな、自分から信頼を失うような行動とってどうすんだ俺は……そんなことしたら……もう俺はこのアパートにいられなくなる。それだけは絶対嫌だ……それはすなわち実家に帰るのと同じ意味を持つからだ。

「うぅ～……」

双葉は俺の身体（正確にはダッフルコート）に身を寄せしばらくの間泣いた。

「お客様？ご注文はお決まりでしょうか？」

「いえ……あの、また後で注文しますハイ、ぷひひ」

「？はぁ……」

俺が曖昧な返事をするとガ●トの従業員のお姉さんは『え？何コイ

ツ？キモッ』みたいな顔をしてこの場を後にした。うーん、しまったなぁ、おいちゃん緊張してつい変な声出しちゃったよ。生足が綺麗なお姉さんだったのになぁ……今ので大分好感度が下がったような気がするけど。うん、この歳にもなってギャルゲー感覚の感想述べちゃったよ。あいたたたた～～～♪

「うぅー……司さん、お腹すきました……」

ぐぅ～
ぐぅ～
双葉がそう言うと、インターネットの検索サイトみたいな腹の音が鳴った。モチのロン、俺と双葉によるものだった。

「俺もだよ……仕方ねぇだろ？もう、これしかなかったんだ……」

あの後俺と双葉は一旦、悪鬼がいるアパートから戦線離脱してとりあえず街を歩き回って街の中にあるファミレスであるガ●トに入った。作戦と呼べるかどうか分からんが、ファミレスに入ってとりあえず時間を潰して真夜中になったらアパートに帰ることにした。ファミレスは２４時間営業なので、いつまでもこうしてだら～っと居座る事ができる。店の中は暖房が効いてて暖かいしな。しかし、それにしても……

「腹減ったな……」
「お腹空きました……」

さっきから俺達はこんな台詞ばっかり言っている。そうだ、金。マネーががないんだよチックショー！そんなことで俺達の空腹を満たすかどうかわからんが唯一、口に出来るものは……

「ウォーターだ、ウォーターを飲め……ゴキュンゴキュン」
「うぅ、切ない。切な過ぎますよぉ……ここはサハラ砂漠ですかぁ……ゴックゴク」
「ぷっはー……すっげぇ味気ねぇ……あっ、ウォーター無くなった。すいませぇーん！店員さぁーん！おひやもう一杯くださぁーい！」

このように俺達の体力は限界に近づいていた……それにさっきから１０分置きに店員さんが注文を聞いてくるんだけど……一銭もマネーが無い俺らには誤魔化す事しかできなくて。それにさっきから周囲の店員さんの奇異な目が俺達に突き刺さる……どうしよう。すっげ怪しまれてるよ俺達。水だけって、水だけって！

「……そういえば双葉、お前店長からもらったケーキはどうした？」
「うぅ……そんなのとっくに私の身体に吸収されていますよぉ……」

あ　り　え　ね　ー　。確か店に置いてあったケーキの種類は２０種類は余裕で超えていた。店長もアホだが確か１種類につき５個ずつ貰っていたのにそれを全部食ったのかコイツ？なのに何故お腹が空くんだ？そのカロリーはどこに行っちゃったの？ねぇ？意味わかんない。

「そうか……今頃、ケーキはお前の身体の中でウ●コとして処理されている最中なんだな……」
「ウ●コとか言わないでくださいよぅ……」

あぁ、もう……何かおいちゃん疲れたよ……パトラッシュ……そして俺はゆっくり瞳を閉じ……

「お客様ぁー！ご注文は何ですかー♪」

元気な女の子の声が聞こえてきた。……ん？何かどこかで聞いたことがあるような声だな……俺は気になったので顔を上げて女の子の顔を確認すると……

「……え？」

「……あー♪司先輩だー♪こんばんわっす♪」

ファミレスの制服を身に纏ったケーキ屋のバイト仲間の苺ちゃんがいた。

12月23日（5）

「ふー……ふー……へー、苺さんって、ふー、ふっー……司さんのケーキ屋のバイト仲間の方なんですかー……ふー、ふっー、ふー！ふーーー！」

双葉は暖かいココアが入ったマグカップを持ち、コレでもかっ！というくらい口でココアをふき冷ましていた。どうやらこのロリもどきはヘビィな猫舌のようだ。

「あっ、あっつっーーー！うぅ！顔にココアがっ！あ、あついですぅ！！！」

思いっきり口でココアをふくものだからココアが跳ねて双葉の顔にかかり、双葉は熱がっていた……訂正、どうやらこのロリもどきはヘビィな頭の弱い子のようだ。

「おしいっ！そこでホットミルクが顔にかかったらおじ様達に好感度＋5だったねっ！双葉ちん！」

双葉の隣に座っているファミレスの制服姿の苺ちゃんは双葉に濡れタオル（よくファミレスとかで客に配るアレのことね）を渡し、イミフな台詞を口にする。何がおしいのだろう。おじ様て。

「うぅ、苺さんありがとうございます……うぅ〜〜〜」フキフキ、チーン

双葉は情けない声を出しながら苺ちゃんに貰った濡れタオルを駆使して顔全体をフッキフキしていた。おい、鼻までチーンするな、テ

ィッシュじゃねぇんだぞ。これがハタチの女か？あぁん？君は小学生からやり直しなさいっ！

「ところで……苺ちゃん。いいのか？こんな所で油売ってて？バイト中だろ？ほら、店長さんがすごい眼で此方をガン見してるんですけど？だから君はとりあえず仕事に戻りなさい、ほらっ、しっ、しっ」

あれから俺達は偶然ファミレスで働いている苺ちゃんに会い、双葉と苺ちゃんは気が合ったのか互いに下の名前で呼び合うほど仲が良くなった。まぁ、歳が近いし性格も天真爛漫という意味で似通っているしな。

「あ～先輩、私に対してそんな冷たい態度とっていいんですかー？ココアとフライドポテトのお代どうしよっかな～？」

「ゆっくりしていってね！」

「えっへっへ～もっちろんです♪先輩♪」

「司さん……」

双葉は何か言いたげな無垢な瞳で俺をジッと見つめる……言うな、それ以上何も言うな……長い物には巻かれよ、これが現代の荒廃した社会を生きていく上で賢い生き方なんだよっ……！年功序列？いぇー！んなもんクソくらえっ！……チッキショウ！悔しいですっ！苦しいですっ！立場とかっ！悲しいですっ！性格とかっ！お財布とかっ！寒いです！色んな意味で！（泣）

「つ、司さんが尻フェチ……（／／／）」

「そだよ～…司先輩って尻フェチらしくて毎日さりげなく愛撫されてるんだ～♪さわさわ～って」

脳内にいるもう一人の俺（？）が一人で身悶えていると俺を無視した双葉と苺ちゃんの会話が行われていた。え？俺が尻フェチ？何でいつの間にそんな話になったの？お嬢さん方？

「えっ、何言ってるの君達？俺は尻フェチじゃないから、正しくは太も…げふんげふん！と、とにかく！してないから、してないからね！そんないい年こいたオヤジみたいなセクハラ。あとそれは店長の日課（セクハラ）だから！」

「司さんっ……やっぱり……！」

双葉は何故か不安そうな顔で俺を見つめる……オィ。

「やっぱり……なんだよっ！？やめろよそーゆー誤解を生む発言！何もしてねぇよ！何も無いから！君と俺との関係は主人と居候なのっ！それ以外の繋がりは一切無いからっ！」

「へー、司先輩と双葉ちんは繋がっているわけですね♪」

「あっ、えっ？いやそうだけど！？微妙に何か違う感じになったよっ！？それ単体で言うのやめてねっ！？すっげぇ誤解生むからっ！！ほらっ、そこのＰＴＡの会員っぽいご婦人達、何事かと此方を常にチラ見してるからっ！？おいちゃん、おば様達の強烈的な視線は弱いのぉー！」

「はいっ、司さんと私は繋がっているんですっ！」

「お前もやめろよっ！？分かってんの！？お前がそーやって無遠慮な台詞を高らかに発言する事で男の俺の立場がドンドン株が暴落するかの如く下がるつーことをよ！？あー、ハイハイ！そこのガングロＤＱＮ共！俺を軽蔑の眼差しで睨まないっ！くちゃっらくちゃっらガム噛まないっ！…あっ、てめぇ！今噛んでたガム、床にに吐きやがったな！？こらぁ！こっちこいやー！……あっ、すんません、ゴメンなさい、やっぱいいです。だから……その、イカツイ彼氏さんを連れてこないで？ね？（汗）」

ガングロＤＱＮ共は口をモゴモゴさせながら何やらヒソヒソ話していた……これだから今時のＤＱＮ共は……まったく！親の顔が見たいねっ！おいちゃんも人の事言えねぇけどなっ！

「へー……双葉ちんは司さんの従兄妹さんなんだ～」

とりあえず苺ちゃんには本当の事は伏せておき、俺と双葉が従兄妹の関係であることを告げた。だって、言えないじゃない……道端でエロ看板持って突っ立っていたロリモドキを仕方なく保護したなんて。そんな事、告げてみろ……俺は間違いなく、ロ　リ　コ　ンと言う名の不名誉な称号を贈られることになるだろう……それだけは嫌だっ！それは俺が社会的に抹殺される事を意味する！

「最初、司先輩と双葉ちんを見たとき危うく店の電話に手が行きそうになりましたからね～…まぁ、とりあえず声を掛けてみて安心しましたよん♪」

……うんホント、本当の事隠しておいて良かったよ。おいちゃん、苺ちゃんの冷静な対処に感謝するよ。

「司さんっ、ポテトが自然発火でなくなりましたっ！どうしましょう！？これはアレですね！もう一皿頼むしかないですねっ！」

双葉は興奮しながら俺に空になった皿を見せ付けてきた。

「んだよ自然発火って！お前が食ったから無くなったんだよ！嘘をつくならもうちょいマシな嘘つけよっ！え？ということは？俺、一口も食ってねぇ！オイコラ！てめぇふざけんなっ！吐け！今すぐ吐け！吐けぇえええええええええーーーー！！！！！！ドリームフードの王様！ポーティートゥー！！！」

俺は理不尽に唯一の晩飯を奪われた事による腹いせに双葉の両頬を掴み、思いっきり横に伸ばした。

「ふぁ、ふぃたふぃでふぅ〜〜〜、ふぁ、ふぁふぇってくらふぁいいいいい〜〜〜〜〜」

涙目で必死に抵抗しているようだが知ったことかっ！クソッ、クソ！クソォ！！！まだ俺、ココアしか飲んでないのにっ！空腹で死にそうだっ！

「えー……司先輩ってゲロフェチだったんだ……もしかしてス●トロプレイも嗜んで……」

「違うよっ！？それは壮大なる勘違いだよ苺ちゃん！？俺は人の吐いた汚物を飲んだり食ったり、人のアレの穴から出した黄褐色の遠くから見たらカレーみたいな固形でたまに水っぽい感じのアレを飲んだり食べたりとかしてないからっ！……うげー！自分で言ってて何か気持ち悪くなってきたよっ！言わせないでよ！こんな汚い話！」

「つ、司さん……あの、私（／／／）」

「司先輩……（／／／）」

「えっ、あっ、はぁー！？何で赤くなってんの君達！？やめてよそーゆー変な空気！？求めてない！求めてないよ！俺、君達にそんな汚いブツは求めてないよ！？そんなのいらないから誰か俺にマネーを下さいよろしくお願いしますっ！」

切な願いだ……ホントお金大事。今となって改めてそう思う。誰か、誰かっ！俺にマネーをプリーズ！

「ホントに司先輩はお金持って無いんですねー……あ、そうだっ、なら先輩、クリスマスシーズン限定のアルバイトやってみませんか？日給制なんで働いたら働いた分、お金ガッポガッポ稼げますよ♪」

「えっ！？何！？マジか！？マジマギー司〇！？クリスマス限定の仕事ってどんな仕事！？」

「この街の子供達にプレゼントを配る仕事です♪」

「へー……今時そんな慈善事業みたいな子供達の夢を叶える仕事があるんだ。感心するなぁ……」

「お子さんに夢を叶えるお仕事……何だか素敵な仕事ですねっ！エへへ（／／／）」

「んー……そういうのではないんだけどね。事前に親がお金を払って、その家の子供に親が払ったお金を下回るプレゼントを渡すんだよー」

「一瞬にして子供の夢をぶち壊した！？」

「郵便受けにプレゼント入れとけばいいし、楽なバイトだよー……去年、私が配りに行った時にとある子供の親に会って『子供が最近、サンタさんのプレゼントプレゼントってうるさいのよねぇ……はぁ、これでちょっとは落ち着いてくれるかしら……早くサンタさんは卒業して欲しいわねぇ』とか言ってましたし」

「うっわ……何かリアルに切実な親の本音を聞いたよ……やめて、おいちゃんそんな子供を騙すような心が痛む仕事はしたくないです……苺ちゃん、他にはないの？」

「そうですねー……私はやったこと無いんですけど、聖夜の一夜で数十万ほど稼げるお仕事がありますけど……聞きます？」

「あ、何か嫌な予感。やめときます」

「えーっと、ハメルだけで……」

「言わなくていいからっ！？おいちゃん、そーゆー怪しいお仕事は

ナンセンス！ＮＧ！ナッシング！」
「もー……先輩、わがままですよぉ……そんなんだからいつまで経ってもマザコンなんですよぉ」
「マザコンは関係ないよねっ！？」
「司さんっ……やっぱり……！」
「やっぱりじゃねぇよっ！！！」

苺ちゃんはさすがにバイトの時間帯だったのでようやくバイトに戻っていた。店長らしきイケメン男にどやされていたようだが……まぁ、仕方ないよね。あのイケメン店長、終始俺に向けてゴートゥーヘルのサインを送っていたからね。えっと、一応客なんですけど俺。文無しだけど。

「苺さんって色んなバイトをしてるんですねー、女子高生なのに偉いですっ、エッヘン」

双葉はココア（お代わり）をすすりながらまるで自分の事のようにまな板の胸を張って言う。

「そこで何でお前が威張るのか分からんが、そうだな……高校生でバイトの掛け持ちには驚いたが……まぁ、今時の女子高生はあんな感じなんじゃないのか？」
「……何だか司さん、台詞がオッサン臭いです」
「うるちゃーい！悪かったなアラサーで……ふぁ、っと、もう１２時前か……」

ふむ、この時間帯ならあのクソババァはもう冬眠（？）しているかな。そろそろ、眠くなってきたし我が王国に帰るとするか……

「よし、双葉。おいちゃんそろそろ本格的に眠くなってきたから帰るぞ」

「……え、あ、あの。大丈夫なんですか……？」

双葉は俺に不安そうな顔を向ける。

「この時間なら大丈夫だろ。このアホみたいに寒い外でずーっとボケーっと突っ立っていると思うか？いくら奴が鬼のような化け物でもこの寒さじゃ凍えちまうよ」

部屋の前で凍ったクソババァの置物ができていたらそれはそれで笑えるが、まぁそれはないだろ。

「で、でも……私なんか嫌な予感がヒシヒシとするんですけど……？」

双葉はまだ怖がっている……が、知るかっ、あの部屋は俺の王国だっ！何者にも触れさせん！例えそれがあの大家のクソババァであったとしても、だっ！……ごめん、おいちゃん今、嘘言った。無理です、即効逃げます。

「じゃあ、お前はいつまでもそこにいろ。俺は帰るからな」スタスタ

「あ、あぁー！ま、待ってくださいよぉ！私も帰りますー！」

「……不気味だ」

現在の時刻、２３：５５。
双葉とアパートに帰るとアパートは先ほどのヒ〇カのような邪悪なオーラを感じなかった。しかし、だ。何だ？まぁ時間帯もあるだろうが静か過ぎるアパートに只ならぬ不気味さを感じた。

「うぅ……」

双葉は泣きそうな顔で震えていた。

「……行くぞ、双葉」
「うぅ、はい……」

俺達はたどたどしい足取りでアパートのオンボロ階段を上っていく……一歩、一歩、まるで絞首台を上るがごとく歩を進める……あれ？何でだ？どうして俺こんな嫌な汗かいてるの？

「……見たところ異常は無いな」

二階に上がると部屋の前には予想通りクソババァはいなかった。ふぅ……とりあえず、一安心と言ったところか。俺は胸を撫で下ろし、双葉の様子を見る。双葉も俺と同じ心境だったのかホッとした表情を浮かべていた。

「よ、よかったですぅ……私、危うくミンチにされてお鍋で食べられるかと思いました……」
「お前はどんな想像をしてたの？まぁ、魔血子は魔女のような奴だがさすがに俺達みたいな肉もろくについてないガリガリガ〇クソン

は食わないだろ」
「ぽ、ぽっちゃりしている人なら食べる方なんですか……？」
双葉はまたガクガク震えていた。んなわけないだろ、まぁ別に言わなくてもいいか。それより、今は早く部屋に入ろう。俺は部屋のドアノブを回し……
「……あら？」
「……つ、司さん？ど、どうしたんですか……？」
「……開いとる」
……何故？俺は確かにバイトに行くとき鍵をしたはずだが。
「あっ……」
双葉ははっとした表情を浮かべていた。……そういえばコイツ俺の後に外に出たよな。ケーキの匂いがしますですぅ～みたいな理由で。……まさか。
「え、えへへ……」
「……」
ポカッ
俺は無言で軽く双葉の頭を小突いた。
「ひぃーん！許してくださいぃー！だってだってぇー、私鍵持ってなかったですものー！」
てんぱっているのか双葉は両手をバタバタさせて、涙目になっていた。……何か変な語尾になっているが。

「……別にそんなに怒ってないから落ち着け。つーか、別に部屋に入られても盗られるような金目のもんは無いからな」
「そ、そうなんですか……？で、でもぉ……そのぅ、司さんのベットの下に怪しげなグッズやご本がありましたけど……（／／／）」
「てめぇは人の留守中に何家探ししてんだぁー！？ふざけんなっ！コラァー！！！」
「ひぃーん！痛いですー！そんなに怒ってないって言ったじゃないですかぁー！？」
「それとこれとは別だっ！チッキショー！そんな汚物を見るような目で俺を見るなぁー！俺だってなぁ！いい歳こいても溜まるもんは溜まるんだよぉー！悪いかっ！？コノヤローー！（泣）」
「何言ってるかわかんないですよぉー！ひぃーん！ごめんなさいぃいいいいーーーーー！！！！！！！（泣）」

とりあえず俺のプライドをぶち壊してくれたロリモドキと数分ほど（一方的に）拳で語り合った。

「うぉおおおおおおおお何じゃこりゃぁあああああああああーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！」

部屋に踏み込むと部屋の中は見事にもぬけの殻だった！

「無いっ、俺の愛用していたパソコンたんも！際どい角度でチラッと縞々パンヌーが見えるフェ●トたんフィギュアも！俺の嫁候補ＮＯ．１のこ●みたんドアップマウスパッドも！毎日欠かさず御用達

の俺専オ●グッズも！アレな姉様素人ＤＶＤも！全部っ！全部無いのぉーーーーーーーーー！！！！！！！！！！（泣）」

「その中に生活必需品が一つもないんですね……（汗）」

双葉は引き気味の顔で俺を見ていたが……今の俺にはどうでもよし子さんだっ！何で……！？何でさ！？いくら泥棒が入ったからってこんな壮大な泥棒をする奴がいるのかっ！？嘘だ……夢だ、これは夢だ……夢だといってくれ……シェリー……う、うぉおおおろろろろろ～～～～～ん（泣）

バターーーンッ！

「やっかましいっ！下まで響いてんだよっ！てめぇのアホみたいな声がよー！」

部屋に誰か入ってきた……誰だ？……この声は……

「ひっ！つ、司さんっ……！」

あ……？双葉は突然入ってきた不審者に驚きの声を上げた。何でそんな泣きそうな声になってんの……？……だめだ、まともに思考が働かない……誰か、誰か……俺を慰めておくれ……できれば美人のお姉さんで、あと膝枕しながら。

「ふんっ……まぁいい……クッ、クッ、クッ……ようやく帰ってきたようだねぇ……オタニート」ポキポキ

涙で視界がよく見えない……あぁ、何だこれは。骨の軋む音……ダブルで悪夢だ……ようやくまともに思考が働き出したのと同時に地獄の淵に叩き落されるなんて……あぁ、これは悪夢だ……誰か、誰でもいい……この俺を、この悪夢から解放してくれ……

12月24日（1）

クリスマスイブ。
本番は明日のクリスマスなのだが、毎年どうも街は今日のイブの方が活気に満ち溢れているような気がする。早朝にもかかわらず街の所々の店はクリスマスの準備に勤しんでいた。ある豆腐屋のオッサンは何を思ったのかサンタの格好をして豆腐をさばいたり、あるカマバーのおばちゃん（？）は自分の店の前でスネ毛な生足丸出しのサンタの格好で意味ありげな溜息をつきながらタバコを吸っていたり、ある道端にいるどうみても一ヶ月くらい風呂に入ってなさそうな臭そうなオッサンは何をトチ狂ったのか『ワシを飼って下さい（↑サンタプレイもアルヨ！壱万円より）』と書かれた看板を持って、あきらかにやる気のなさそうな顔して鼻糞をほじくっていたり、あるバッカップルは早朝にもかかわらず何を血迷ったのか公衆の面前で堂々と半裸状態になってちゅぱちゅぱしたり……ともかくまぁ街は異様なテンションに包まれていた。恋人のいない三十路，ｓ童貞の俺はというと、そんなイブの日でも普段と変わらなかった……
……いや、変わってはいるな。悪い意味で。アッー！もぅ！どうすればいいんだぁー！俺はイライラをぶつける様に某ピエロが不気味な笑みを浮かべている絵がプリントされた紙コップの中に残った氷を我武者羅に噛み砕いていた。そして俺の向かい側にいるロリモドキ（Ｌｖ．５）に目をやった。

「スー……スー……えへ、エへへ、司ひゃん……むにゃむにゃ」
「人が一睡もできないくらい悩みに悩んで苦しみに苦しんでいるのに君と来たらまぁ……おふぉふぉふぉふぉ、ぬっふん」

ごめん、今俺何かよく分からないキャラになった。それにしても気持ち良さそうに涎を垂れ流しながらおねんぬしちゃってまぁ……

あぁ、もうかぁいいなぁこのロリモドキは。これはあれだ……もうあれだ……うん、あれだ……あれしかない……イ　タ　ズ　ラ　す　る　し　か　な　い　。言っておくが、奴がかぁいいからとかそんな短絡的な理由じゃないぞ。

「むにゃあ……司しゃん……司しゃん……むにゅう……」

「……」

さっきからコイツは俺の名前ばっか言っているが一体どんな夢を見ているんだ？しかし、こんな寝言を言われたら俺のイタズラ心が半減する……わけないし、イタズラをするじぇー……まぁ、気弱な男だったら即効ぶん殴っているけどな。……何だね君ぃ、さっきからじろじろ見て……俺の顔になんかついているか？あーん？こらぁ？

「スー……スー……ん、んん…ん～～……」ぷにぷに

俺はまず目の前にいるロリモドキのホッペをストローで軽くぷにぷにした。双葉は寝ながらもストローの感触を感じたのか眉を動かしてわずかに抵抗を見せた。ふんっ、お前はこのくらいの感触で感じるのか。君の身体は感じやすいんだね、プひひ。うん、俺の思考チョーキモイー！フゥー！次だっ！次っ！ギアセカンド！

「ん、んにゃ……ふむぅ、ん、んにぃ……」クニクニ

今度はポテトを双葉の鼻の穴に入れて、動かしてやる。寝ながらも自分の鼻の穴に異物の感触を感じたのか双葉はさっきのストロープレイよりも大きな反応を見せた。いやいやいやぁーんな感じで身体をクネクネさせている……うーむ、いきなりやりすぎコー●ーっちゃったかな？だがしかし、やめるわけないし、イタズラを続けるじ

ぇー

「ん、むにぃ、ひゃ、にゃう……むっ、にゃ、ひゃう……」クニクニ、サスサス

俺は更に左手に持った鼻の穴に突っ込んだポテトを激しく動かしながら今度は右手に持った一際長いポテトで奴の耳穴をくすぐった。いちいち面白いリアクションをする奴だ。うん、これは蝶☆楽しいっ！あれだ、ガキの頃、近所の悪ガキとつるんで女の子のリ●ちゃん人形を取り上げて、股を開いてガン見したり、仮想ダッ●ワイ●ごっこをしたりしていた時とおなじような気分だなこれはっ！……何だね君達、その顔はぁ？君達だっておいちゃんと同じような事やったことあるだろう？やめたまへ！その軽蔑の眼差しはっ！心が痛む！主に俺のなっ！ふふん、まぁいい。とにかく次で最高のフィニッシュを決めようじゃないか……では、いくぞっ！

「ぶっかけっ！」ジャバー！

ははっ、ははっ！やったぜ兄貴っ！奴の顔面にド●ルドの紙コップの中に入っていた氷水をぶっかけてやったぜっ！あれ！？おいちゃんちょっとやり過ぎた！？でも後悔はしていないっ！むしろ何だか清々しい気分になったねっ！

「ひゃうっ！つ、つめたっ！？な、何ですかぁー！？こ、これはぁー！？」

さすがに鈍感ちんの双葉でも水が顔に掛かった瞬間、冷たさでガバァーと起き上がった。

「よぅ、オハヨウ双葉。清々しいイブの早朝はどうだい？」

「……あっ、司さんおはようございます。イブですか……エへへ。って何誤魔化しているんですかぁー!?な、何で私の顔は水で濡れ濡れになっているんですかぁー!?あぁー!服にも掛かってますっ!これ一枚しかないのにぃ……うぅ……（泣）へっくち!」プルプル

双葉は子犬のようにプルプル震えていた。……うーむ、今更だが何だか罪悪感が湧いてきた。

「えーっと、なんつーかノリで?やっちまったって感じ?アハハ!ドンマイ●ル!」

「なっ、何ですかそれぇー!?ひどいっ!ひどすぎるっ!それに寒い、寒すぎですっ!へっくち!」

「俺が暖めてやろうか?」

「なっ、何ですかその右手に持っている怪しげな紙コップはぁー!?い、嫌ですっ!結構ですっ!」

「大丈夫、これホットコーヒーだから」

「何が大丈夫なんですかぁー!?うぅ、司さんはこんなことばっかりしているからいつまで経ってもマザコンなんですよぉ……へっくち!」

「セイヤッ!」バシャー

「あつっ、あついですぅーーーーー!!!!!（泣）」

俺は禁句ワードを吐きやがった双葉の手の甲に既に温めになったコーヒーをぶっかけた。そんなに熱いか?ちょっとリアクションが大きすぎなんですけどどうしたらいいですかこの子?とまぁ、それは置いておいてとりあえず、ここまでの経緯を説明しとくか。

遡ること5時間前ーーー

「はぁー！？はぁー！？はぁあああああああああーーーーーーーーー！？す、捨てたぁ！？捨てたのれすかぁー！？俺の人生の恋人達をぉ！？ワッツ！？ナッツ！？ウエ●ツ！？なぜなのぞなもしっ！？フォオオオオオオオオオーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！あひぃいいいいいいいいーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！まさに鬼っ、鬼っ、鬼っ……！まさに鬼畜の所業っ……！ぐぐぐっ、ぐぅ～～～……何て女だっ……！悪魔悪魔悪魔悪魔っ、狂人狂人狂人狂人っ……！何故……何故そんな……何故っ！？そんな顔をしているっ……！分かっているのか……？お前の過ち……っ！くぅ～～～……ワシは、ワシは闇の王だぞっ……！？生意気なガキっ……！今、ここでっ！今すぐ殺してやりたいっ！今すぐにでも……がぁ～～～！キキキッ……」

「うるせぇんだよてめぇはよぉー！途中から何か違うキャラになってんだろうがっ！」

バキッ

「がぁー！？」

いってぇ！何だっ！？……はっ！今、一瞬意識とんだっ！？そ、それより……！ぐぉおおおお……俺の、俺の恋人達がぁ……！ううっ、ううううう……！チッキショウ……もうダミダ……俺の恋人達が捨てられ、それにこの状況……家賃の金は無い……うぅ、人生ゲームおーばーひーとだ……うぉおおおお！！！！！もうっ！もうおいちゃん生きていく自信を失ったよっ！

「殺せぇ！もういっそのこと殺せぇ！俺のチ●ポを切り取って塩と胡椒で炒めてたーんと食えぇえええええええーーーーーーーー

ー！！！！！！！！！！」
「何言ってんだい。やだよ、アンタみたいな臭いブァナナなんて食いたかぁないね、ペッ」
魔血子は地面に唾を吐いた。何て女だ……俺の人生最後の願いさえ聞いてくれないのか……魔女だ、この女はモノホンの魔女だ……
「あ、あの……司さんも、お姉さんも落ち着いて下さい……」
俺と魔血子が睨み合っていると間に双葉が止めに入った……
「ん……？アンタは確か……うちのアパートの前で倒れていた……」
「おいロリモドキ……お前は関係ない、横から口出しするな……おぉい！クソババァ！殺せ！早く殺せぇ！俺の乳首を切り取ってコリコリした食感をたーんと堪能しろぉおおおおおおおおーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！」
「やかましいっ、ワケの分からないこと言ってんじゃあないよっ！」
ギリギリギリギリ
「ぎぁあああああああーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！」
魔血子のアイアンクローが俺の脳天に炸裂するっ！やめてやめてやめてやめて痛い痛い痛い痛い割れちゃう割れちゃう割れちゃう割れちゃうのぉーーーーーー！！！！！！アッー
「……」バタッ
「ふぅー……ったく。この馬鹿は……」シュボッ
「あの……司さん、動かないですけど……（汗）」
「大丈夫だよ、その男は死ぬぐらいの痛いのすきすきーお●ぎとピー●なドM野郎なんだよ。……さて、うるさい馬鹿も寝たし、フゥ

！……」
「あ、あの……ここの部屋の物を全部捨てたって本当なんですか……？」
「あぁ、嘘だよ。そこで寝ている男の生活必需品とか服は実家に送ったんだ。……まぁ、オタクグッズは全部売って金にしたけどね、ほらっ」ポイッ
「わっ……こ、これ？い、いいんですかっ！？」
「その金はアンタが持っておく方がいいだろ、司に渡すとロクなもんに使わないだろうからね。それで1日2日はもつだろ……フゥー……」
「こ、こんな大金頂けませんっ！これは司さんのお金ですっ！それに、そのっ……こんな赤の他人の私にお金を渡すなんて……うぅ」
「おやおや……そうなのかい？アンタと司は只の赤の他人同士じゃないと思ったけど……もしかして、そのはした金を持ち逃げする気かい？クク……」にやにや
「そ、そんなのするわけないですっ！つ、司さんは……そのっ、あのぅ……わ、私の命の恩人です……感謝することはあっても……そんな、恩を仇で返すようなこと絶対にしないですっ！わ、わふっ！？」
「あぁーん！もうかぁいいわねぇ！オタニートには勿体無いくらい！はぁ～ん……」スリスリ
「やっ……あうぅ～～～（／／／）」
「……でも、ごめんねぇ。そこの馬鹿が私との約束を違えたせいでこの部屋から追い出すような真似して……もう、いっそのことあたしの嫁になるぅ？歓迎するわよぉ～～～ウフフフフ……（／／／）」
「……ふぁう！いっ……け、結構ですっ！」ササッ
「あらそう？残念、ウフフフフ……とまぁ、冗談は置いておいて、そこの馬鹿が起きたら伝えておいてくれる？そうねぇ……」

「『長い間楽しかったわよ……主にアタシが（笑）』か……うん、ふざけるなぁあああああああああドちくしょぉおおおおおおおおおーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」ドンッ、ドン！

俺は行き場の無い怒りを机に向けた！チッキショウ！チッキショウ！こんなことなら最後にあのクソババァの目の前でてめぇの妹の裸を想像して夜な夜な抜いていたことを暴露してやりゃあ良かったっ！その後、半殺しになるのは目に見えているがなっ！

「つ、司さん落ち着いてっ……！ほ、ほらぁ！こんなにお金たくさんくれたんですよぉ！？喜びましょうよぅ！エへへ（汗）」

「俺の嫁達を犠牲にした結果なっ！５０００円が大金？ふざけるなっ！何が大金だっ！これじゃあ、う●い棒５００本しか買えねぇじゃねぇかコラァ！！！」

「それを基準にするのはどうかと思いますけど……（汗）」

「うっ、うっ、これでついに夢のマイホームを失った……明日からどうやっていいですかぁー？（泣）」

「マイホームって呼べるほどのそんな立派なものでは無いと思うんですけど……」

「うるせぇー！文無しのテメェーが言える台詞じゃねぇだろこのすっとこおっぱいとっとこハ●太郎！」ギュム

俺はロリモドキの白き両頬を両手を駆使してびよんびよん伸ばした……よく伸びる。これが我が社の新素材か。

「いふぁいでふぅ～～～～～～つかふぁふぁん、やめふぇくらはい

いいい～～～～～～（泣）」

涙目で何やら俺に抗議している。日本語を喋りなさい。

『目が、目がぁぁー！！』

「うおっ！？」ビクッ

ひたすら双葉の頬をびよんびよんいぢっているといきなり俺の携帯のメールの着信音が鳴った。心臓に悪いわっ！

「い、今の人の唸り声は何ですかっ！？」

「偉大なるム●カ様の断末魔だ、っと誰だ？こんな早朝にメール……？」

俺は受信メールを確認した。携帯のディスプレイに映し出されていた文字は……

『０９／１２／２４　０６：００　妹　件名：キタ――――（゜∀゜）――――！！　本文：駅前のベンチで待ってるから』

ポチッ

「……はっ！無意識で削除してしまったっ……！」

反射的に削除をしてしまったっ……！Ｏｈ……やっちまったぜ。だが、やっちまったもんは仕方ないよね？というわけでムシムシムシキ●グー

『目が、目がぁぁぁー！！』

「え……？」

またメール……？誰だろう……？そして再び受信メールを確認すると……

『０９／１２／２４　０６：０１　妹　件名：キタ──────（。∀。）──────！！　本文：待ってるから』

「ひぃいいいいいいいーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」ガタンッ

「ひっ、な、何ですか司さんっ……い、いきなり大声出さないで下さいよぉー！？」

１２月２４日、クリスマスイブの早朝。
早くも俺達のクリスマスの幕開けは波乱の警鐘が鳴り始めたっ……！

１２月２４日（２）

午前７：００。
普段より一際賑やかな街中を俺と双葉は歩いている。目指すは妹という名の鬼がいる駅前、俺の心はビックビクでドピュッドピュッーな感じだった。うん、つまりはビビッているのだよ君ぃ。

「いいか、絶対余計な事は言うなよ」

俺は隣でアホ面をして呑気にゆっくり歩いている双葉にそう警告した。

「はいっ、双葉は余計なことは言わないですっ」

双葉は笑顔で高らかに俺にそう告げた。うん、正直すっげぇ不安。このガキ本当に事の重大さを分かってんのかね？よっし、おいちゃんテストしてやるぞぅ！

「俺とお前の関係は？」
「御主人様とペットですっ」
「目の前に俺のシスターがいる、最初にかける言葉は？」
「不束者ですがよろしくお願いしますっ」
「お前のスリーサイズは？」
「はいっ、上から６（ピー）、５（ピー）、６（ピー）ですっ！」

ダメダメだった。ごらんのありさまだよ！

「うっそ、お前……超ドひんぬーじゃん、幼稚園児じゃん」
「……あっ」

俺がそう言うと双葉は自分が何を言ったのか気付いたのか頬を真っ赤に染める。うむ、しかしおいちゃん正直そこまでとは思わなかったよ。うん、今思ったがこれふっつうにセクハラだな。

「あぁあぅぅぅぅぅっ、つ、つか、司しゃん！そ、それはセクハラれすぅーーーーー！あぁあああ……あぁああ～～～～あぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！（／／／）」ぽこぽこぽこぽこ

双葉はあまりの恥ずかしさにテンパリつつも俺の腹辺りにぽこぽこと猫ぱんちをお見舞いする。ふはははははぁーーーーー！全然痛くも痒くもないぞロリモドキー！ふはははははぁー…ハハ、はぁ。

「わーったわーった……今のはおいちゃんが悪かったよ。デリカシーなかった、うんごめんちゃい」

「うるぅぅぅぅぅ～～～～～！！！！！言葉に全然誠意がこもってないれすぅーーーーー！！！！！！うー！うー！うーーーーー！」

双葉は俺の謝罪に納得できていないのか俺のダッフルコートに掴みかかり、うーうー唸りだす。お前はあれか、二次元のマジキチ幼女か。

「分かった、俺が悪かった。お詫びにここで脱ぐから」カチャカチャ

「あ、それはいいです」

俺がGパンのベルトを外そうとしたところで双葉に素で返されてしまった。何で下半身からなんだとかつまらんツッコミは無しだぞ。

それよりお前なぁ……俺の身体はアレだ、色んなもんが生えていて立派な男の勲章（バズーカー）ももれなくドッチングだぞこらぁ……自分で言っ

てて何か悲しくなってきたぞこらぁ……

「……ともかくだ、今ので一つ分かった事がある」

「うー……何ですか」

双葉はさっきのセクハラ発言をまだ根に持っていたのか上目遣いで俺を睨んでくる。……難しい事言えばさっきの出来事忘れてくれるカナー？てか忘れてくれないとおいちゃん社会的に危ない立場になるのカナー？

「お前は口が軽い！」ツンツン！ツンツン！

「うぅ～……ひ、額を指先で突かないで下さいよぉ～～～」

「これはあれだ。お前は分からないだろうがここのツボを突くとさらにひんぬーになるんだ」ツンツン！ツンツン！

「ひぅ！や、やめてくださいよぉー！！！」バタバタ

双葉は俺の手を振り払い、真っ赤な顔で胸を両腕で隠し、俺を睨んでくる。うん、こーゆーぎゃらりぃがたくさんいる中でそーゆー反応するの止めてくれるカナー？んー？あれー？向こうに青い人が１匹、２匹、３匹……こっちの方に近づいてくるよぉー？

「……とりあえず駅前行くぞ」グイッ

「あぅ～～～手を引っ張らないで下さいよぉ」

俺は双葉の手をとると、早歩きでこの場を後にした。

午前７：１５　駅前。
俺と双葉は駅前付近に着くと、遠くから妹の様子を覗っていた。だって、いきなり出たら怖いもん。

「……ちゃっかり来てやがるな」
「えっと、どの方が司さんの妹さんなんですか？」
「ほら、あれだよ。今まで人を何人も喰い殺していそうな醜悪な面して牙をギンギンに剥き出して『ウジュォルルル！』『ブェエエエエ！』とかワケの分からん奇声を何度も放ち、涎を垂れ流している怪物（モンスター）がそうだよ」
「うぅ～～～そんな化物みたいな人どこにもいないですよぉ」

確かに俺の台詞は大げさかもしれないが、どう見ても不機嫌そうな顔で座っている……うっわー、あれは絶対怒ってるよぉー……僕もうお家に帰りたいよぉー……あ、もうお家無かった、シクシク。

「ちっ、鈍い奴だな。ほら、あのベンチに座っているツインテールがそうだよ」

……いや、さっき醜悪とかモンスターとか言ったけど、容姿だけ見るなら普通に可愛いと思う。別に家族だから贔屓目で言っているわけじゃないぞ？薄茶髪のツインテール、端整でどこかまだ幼さが残る顔、透き通るよぉな白い肌、ある程度出るとこも出ているし、おいちゃんも出るとこ出るし。しまった、何か今の変態チックだった。……いや、ホント妹で欲情しているわけじゃないよ？……高校の頃まではちょっと、ね。……な、なんだ！その目はぁ！し、仕方ないじゃん！あの時は今より色んなものが溜まっていたんだよぅ！

「普通に可愛らしい方じゃないですか」
「あぁ、お前はブサイクだけどな」

俺はとりあえず大魔王に会う前に双葉をいぢめることにした。何？大のアラサーの男がやる事じゃないって？あぁ！悪かったな青臭いガキで！俺は身体は大人で心は純粋無垢なガキなんだよチックショー！

「あぅ！」

双葉は突然の俺の悪口に愕然とする。

「やーい、ブサイクーブサイクー」

もち、こんな事は嘘だが。むしろ逆だが。何故だろう？コイツをいぢると楽しいのは何故だろう？俺はドSなのか？いやドSは魔血子だけで十分だ。（ちなみにドMはてんちょーだ）だから、俺はノーマルだ。Nだ、Nのはずなんだ。アブノーマルのノーマルじゃないぞ。

「ブッサイクッ！ブッサイクッ！」

「うぅ……」

双葉は涙目になる……やべ、言い過ぎたか。しかし、何故か止まらない。チキンランでもなまじブレーキを踏むより突っ走った方が助かる公算が高いとか聞いたことあるし。うん、自分でも何言ってるかワケワカメちゃんになってきたよ。

「うぅ、わっ、私は不細工じゃないですっ！！！で、出るとこも出てますしっ、そ、それに！アメリカンとメキシカンの違いも分かりますっ！」

双葉は半ばヤケクソ気味で真っ赤な顔して叫ぶ。ん？メキシカンっ
て何？カクテルの事か？

「へぇ、じゃあ美人ってか。お前は自分で美人って言いたいんだな
！？自信過剰女！」
「ち、違っ……」
「へぇーへぇーへぇーへぇーそうれすかーへぇーへぇーへぇーへぇ
ー出るとこ出てますかーへぇーへぇーへぇーへぇー」

俺は双葉の全身を嘗め回すように見る……

「うぅ……」
「ぷっ」
「あ、あう、あうぅううあああああああああ～～～～～～～～～
～～（／／／）」ぽこぽこぽこぽこ

俺が少し吹いたのが双葉の羞恥の引き金となったのか、本日二度目
の猫ぱんちが俺の腹を炸裂する。フハハハハァー！しかぁしっ！
貴様の弱小な攻撃なんぞで我の装甲は破れんわぁーーーー！フハ
ハハハーーーー……は？あり？ありり？ちょっ……ちょっ、
いたっ！さっきよりいたっ！すこぶるいたっ！

「ちょっ、タンマ！タンマ！タンマ！ウル●ラマンのカラータイマ
ー！ちょっ、いたっ！ごめん！お、おいちゃんが悪かった！おふざ
けが過ぎた！お前はかぁいい！スーパーハイパーウルトラめがっさ
かぁいいって！ちょっ！ごめん！マジですみませぇんっ！」ぽこぽ
こぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこぽこ
「うぁあああああああーーーーーーーーー！！！！！！！！
！！（／／／）」ぽこぽこぽこぽこぽこ

しかし俺が何度も謝っても双葉は聞く耳を持たない。双葉は半ば半狂乱でひたすら俺の身体に猫ぱんちを振り下ろすのみ。俺はたまらず後退するが、それと同時に双葉が前から攻めてくるっ！は、激しいっ！激しいぞ双葉ぁ！アッー

「ちょっ、それ以上やったらこける！こける！こけちゃうのぉーーーー！」

「あぅうううううううーーーーーーーーー！！！！！！！！！！（／／／）」

や、やばいっ！バランスが……！俺は双葉の猫ぱんちの猛打に耐え切れずそのまま背中からアスファルトの地面に倒れてしまった。ぐぉおお……すんげぇ痛ぇ……

「あーーーーー！あーーーーー！」

「お、おいっ……ちょっ、おまっ」

双葉は仰向けで倒れた俺の腹の上にまたがり、奇声を上げる。や、やばい……双葉ちん壊れちまったＹＯ！

「ちょ、この体勢はやばいって！双葉サン！？」

「うーーーーー！うーーーーー！」

ひぃいいいいーーーーー！目が据わってらしゃるぅうううーーーーー！だ、誰か！た、助けておくれやすぅーーーーー！

「……お兄ちゃん？……何やってんの？」

心の中で魂のＳＯＳ（？）を求めていると、よく知った……妹の声が聞こえてきた。あぁ……双葉と馬鹿騒ぎしている間にお呼びじゃない人連れてきちゃった……俺はこの後、予想される展開に絶望を感じながら目を閉じた。

12月24日（3）

妹ちんに見つかっちった俺と双葉はあれから駅前のイタリア料理店にいた。イタリア料理店とは言っても、自分でいうのもアレだが小汚らしい感じがプンプンする俺やちょっちヤバ目のコスプレ幼女が入るのを躊躇いそうな高級感丸出しの店内ではなく、リーマンさんやらＯＬさんやらがワイワイキャッキャッウフフのフするような爽やかでフルーティな感じの店だった。

「で、兄さん？これはどういうことかしら？」ザクザクッ

俺の向かい合う席で妹さんはそれはもう普段俺の前では見せた事の無いようなステキングないかにも出来すぎた妹と称されるほどのとびっきりの笑顔を兄である俺に向けた。おまけに俺の呼び方が『お兄ちゃん』から『兄さん』にレベルアップ。うん、ところで妹ちん？何でその、さっきからしきりに目の前にあるピッツァをフォークでザクザク刺しているんだい？

「んー！つ、司ひゃん！こ、このスパゲティべらぼうにおいしぃですぅ！」ズルッズルルルゥー

俺の隣で口の周りにとっつぁんもびっくらこんな血痕……じゃなくてミートソースを付着させた双葉ちんが盛大な音を鳴らしながら幸せそうな顔してスパゲティーを食していた。うん、君はそろそろ空気を読んだ方がいいねロリーオブジョイトイ。

「……むしゃむしゃ」

妹様の言いようの無い圧力に当てられた俺はとりあえず妹様に目を

合わせぬようサラダを頬張っていた。む……このドレッシングうめぇ。

「兄さん？私の質問に答えて欲しいのですけれど？それとさっきからサラダばっかりまるで親の敵のようにむしゃむしゃむしゃむしゃ……アホですか？ウ●ディですか？お腹が空いているのならこちらのピッツァを召し上がればよろしいのにクズ野郎」ザクッザクッ

妹様は笑顔な顔して思わず鳥肌の立ちそうな言葉遣いで俺にピッツァを食すよう薦める。うん、そのピッツァ君のせいでほとんど解体しているじゃない？何かね、怨念を感じるんだよそのピッツァから。あと、早くも化けの皮が外れてきたのか台詞の節々にちょっとどころか大分素が出ているよ？

「……」

さてさて……ここでの俺の対応は……

?.とりあえず、『ごめんなさい』と素で謝る。

?.兄らしく強気で攻め……言い包める。

?.逃げる。

とりあえず?.乙。

「……何かホントすみません」

「あれ？何で謝るのかしら兄さん？ただ私はどういうことか聞いているだけなのに。何かやましい事でもあるのかしら？」

……何だこれ。罠か？フラグ管理ミスった？おっかしぃな……誠意を込めて謝ったのに。というか、妹ちんを攻略対象に入れたらまず

いよな。あと何で三十路手前の俺の脳は未だにエロゲー脳なんだ。
昔、ときメモやりすぎたからか？

「……やましいことはない」
「なら教えてくれます？その隣にいる幼女は誰ですか腐れウンコチンカス下衆野郎？」

妹様は双葉に笑顔を向け、聞いてくる。おいおい、もうエセ敬語の意味を失くすほどの暴言がポロっと出ちゃったよ。

「むっ！幼女！？」

ロリモドキは妹様の口から出た『幼女』に反応し、スパゲティを食う手を止め、妹様を少し睨む。ハハハ……おいおいロリロリさん、君は何を言うつもりだい？くれぐれも俺の寿命を縮めるような発言は控えておくれよ？

「私は幼女じゃないですぅー！お酒も飲めるしタバコも飲める立派なハタチの女ですぅー！そ、それにっ、胸も……」

そう言って双葉は自分の胸を見て、さらに視線を妹様のお胸に移す。
……あ、少し涙目になった。

「……フッ」
「あー！あー！あーーー！いっ、今笑いましたねぇ！？うっ、うぅ！悔しいですぅ！司さん！何とか言ってやってください！」
「おとといきやがれこのデカパイマン●ス野郎っ、キェー！」

バシャー
……何か双葉に乗せられてノリでやってしまい、思いっきり顔にお

ひやをぶっかけられた。あとで双葉はシメておこう。

「まぁ、デカパイでマン●スだなんて。そんな下品でチンカスでクズでアホで最低でエロ助で切腹した方がマシな言葉遣いをしてはいけませんわよ？兄さん？」

妹様は俺に氏ねと仰られる。

「……悪かった。なぁ……そろそろ腹を割って話し合わないか？」

「どうぞご自由に、これをお使い下さい」

「切腹って意味じゃねぇーよっ！ていうか何でカッターナイフ何か持ってんの！？それふっつうに銃刀法にひっかかってんじゃね！？こぇえよっ！何する気！？」

「大丈夫です、兄さん専用ですから。これを存分にオナヌーに使用してください」

「何その俺専用ダッ●ワイ●的なノリ。やめてよ、そんなん俺専用とかないから。オナヌーとかしないから、できないから。危ない人みたいじゃん」

「まぁ……（／／／）」

「照れるなよっ！？お前そんな清楚なお嬢キャラじゃねぇーだろ！？あぁ、クソッ！早くその気持ち悪ぃ言葉遣いやめろよっ！」

「ふぅ……やめたっ、もう私疲れたし」チュー

俺が敬語をやめるよう言うと、栞は目の前にあるアイスコーヒーをストローで吸う。そして、また少し不機嫌そうな顔して俺をジッと

睨む……ぐっ、だが兄ちゃんは負けんぞぅ！屈しないぞぅ！

「じゃあ、改めて聞くけどその子は誰？」

「あ、あぁ、遠い親戚だよ。田舎からやって来て困ってるっていうことで俺の家に居候させてやっているんだ」

「司さん、私田舎者じゃ……むぐあぐ、んーっ」

俺は咄嗟に余計な事を言おうとした双葉の口を手で押さえた。よし、完璧男君だ……とりあえず遠い親戚ってことにしときゃあ、万事無事収まる。え？それで居候？じゃあ仕方ないねーアハハのハーってな感じで！ガハハハハ！グッドだ～……おっと、思わずラ●ス化しちまった。

「嘘、うちの親戚はその子みたいなちっちゃな子はいません」

そう言いながら栞はテーブルに系図らしきものがワープロで書かれた紙を出した。

「ばっ、ちょっ、おまっ……これ全部お前が調べたのかぁ！？」

「そうだよ、お兄ちゃん。私に嘘なんかつけると思ったら大間違いなんだから」

ばっかじゃねっ！？ばっかじゃねっ！？おかしいよぉー！何だこのキ●ガイ娘！？ふっつう前もってそんなん調べるかぁ！？こ、こえぇ……何か怖いよこの娘……俺は身震いした。ラ●ス化して浮かれてる場合じゃないよぅー

「誰この厳瓦宗継（ごんがわらむねつぐ）さんって……こんな征夷大将軍みたいな名前の親戚の人見たことも聞いたこともねぇよ」

「あぁ、その人はお祖母ちゃんの兄妹の一番上の娘さんのご主人の

曾お祖父さんの弟さんだよ」
「頭に入ってらっしゃるっ！」

こいつぁ……クレイジーポンチだぜ。や、やばいっ……どうする俺！？ほ、他に言い訳は言いわけ！？うっわー！くだらんギャグ編み出してしまった！ヤヴァイ！どうするっ！？

「で！？お兄ちゃん！？もう一度聞くけどその子は誰なの！？」
「か、隠し子だよっ！親父の隠し子！別の水商売風の女と出来ちゃった♪ってな感じなんだよっ！」

う、ううっ……クソ！我ながら苦すぃー言い訳だが！ますます疑われるかもだが！思いついたら口にしないと俺の命が危ないっ！

「……嘘でしょ？それ本当にお母さんに言っても良いの？」

……お袋が家で包丁を持って奇声を上げながら狂乱し、それを兄貴や親父が必死に止める風景を思い浮かべる……無理だっ！何の罪も無い親父の命が危ないっ！家庭崩壊だ……だめっ！それはだめっ！絶対ダメなのぉー！

「ぐぐぐ、ぐ……」

万策尽きたっ……！もう良い言い訳が思いつかないっ……！俺が諦めの境地を悟っていると双葉が目を合わせてニッコリ笑ってきた……あ？何のつもりだい？ロリっ子ロリちゃん……

「（司さんっ、ここは私にお任せ下さいっ）」
「（あ……？何？まだスパゲティがほすぃー？まだ食い足りねぇのかよ。お前はあれだな、もう食いしんぼう万歳だな）」

「（ち、違いますよぉ！まるで私が年がら年中暴食しているみたいな言い方は止めてくださいっ！と、とにかく私に任せてくださいっ！）」

双葉は栞が見えない位置で自分の胸の前で小さくガッツポーズをして栞の方に向いた。何だかよく分からんが、とりあえず静観しておこう。

「あ、貴方は妹さんですねっ！は、初めまして！」

「は、はぁ……初めまして」

双葉は小さく御辞儀して何か自己紹介の前フリみたいな台詞を言う。それに対して栞は急に振られたからか、戸惑い気味で返事した。うん、今更この会話は無いと思うんだっふんだ。

「わ、私はハタチの榎本双葉と申しますっ！不束者ですが末永くよろしくお願いしますっ！」

「え、私の一つ年下なんだ。てっきり……その、幼稚園……」

「ち、違いますよぅ！ハタチー！私はハタチの幼女なんですぅー！」

何かさっきから双葉の台詞がおかしいと思うのは俺の気のせいか？それに栞の双葉を幼稚園…げふんげふん。それは言いすぎだと思います、はい。俺も最初は中学生と間違えましたが、はい。

「ふーん、私は溝淵栞。そこのニートっぽい顔してる男の妹なの、よろしくね」

「あの、俺っちニートじゃねぇんですけど」

「それで榎本さん……」

「私の事は『双葉ちん』って呼んでもらっていいですよ♪」

「じゃあ、『双葉ちゃん』って呼ぶね。あ、私の事は『栞』って読

んでもいいよ」
「はいっ、栞さんっ♪」
「よろしくね、双葉ちゃん」

うん何だろう、この自然に流れるようなムッシング。もう二人の世界に入っちゃってるって感じ？ここからは百合展開でお送りします……んなわけあるかっ！

「うん、じゃあ双葉ちゃん。一つ聞きたいんだけど、双葉ちゃんとお兄ちゃんの関係って何なの？」

うっ、や、やばいっ！うっかり気を抜いていたっ！

「はいっ、私は司さんに買われーーー」

あ、あぁあああああああーーーーーーーーーー！言っちゃらめぇーーーーーーーーーー！

「ハーイ、そこのお嬢さん方。オジサンとちょっとイケナイお遊びしないかーい？」

俺が双葉の口を押さえようとしていると軽いチャラ男っぽい感じの声が聞こえた。そして、その声の発信源の方に顔を向けるとそこにいたのは……

「店長……何やってんすかこんな所で」

白のタキシード姿に蝶ネクタイを身に着け、花束を持った店長が突っ立っていた。すっげぇ場違いな馬鹿いる。こんな所で朝から何やってんのこの人？

「ぬぅ……！？今、おぞましきケダモノの声が聞こえたぞっ……！？ま　さ　か　っ　！？」

店長は高飛車な馬鹿息子っぽい動きでゆっくり俺の方に向く……きめぇ。

「……鼻毛ぶっこ抜き！」ブチッ！

俺はとりあえず緩慢な動きがムカついたので店長の鼻毛を思いっきり抜いてやった。

「ぐぉー！？つ、司ぁ！？何しやがるっ！？」

「うるせぇよ、あんたこんな朝っぱらから何してんだよ。店は？ケーキ作りはどうした？」

「あぁ……？ケーキ？んなもんさっき終わったわボケ、鼻毛。おーいて……」

店長はよっぽど痛かったのかまだ鼻の穴を押さえていた。双葉と栞は呆然と店長を見つめていた。何だかよく分からんが今のお陰で双葉が余計な事を言うのを押さえられた。

「ナイスだ店長」

「何がナイスだよ、はっ、俺はナイスガイだがな」

「黙れロリコン」

「ね、ねぇ……お兄ちゃん。その人……誰？」

栞は戸惑った表情で店長に指を差す。そりゃ、いきなり食いもん屋でタキシード着て花束持ったキ●ガイ見たらそんな顔になるわな。

「知らない」

とりあえず赤の他人のフリをすることにした。だってこんなロリコンと知り合いって思われちゃうのやだもんメタもん。

「おい……司ぁ、そりゃあないだろ？俺とお前はベストフレンズだろ？互いの尻の穴をぺろぺろ舐め合うくらいベストなフレンズだろう？」

「おい、やめろてめぇー勝手に俺を貶めるような事実無根な関係を作るなっ！うぉー！ちょっ、双葉！栞！違うっ！違うぞぉー！？誤解だっ！やめろ！そんな目で見るなぁー！いやぁあああヤメローやめてくれぇーーーー！」

「俺はこんな展開もアリだと思うぞ。俺×司ってな感じでな。ちなみに俺が攻めでお前が受けだ」

「全然アリじゃねぇよ！あとそーゆーの細かくガイドしなくていいから！くっ、それより店長はこんなところで何しているんだよ！」

とりあえず、ドン引き気味の双葉と栞の気をそらせるため強引に別の話題に移らせることにした。

「あん？決まってんだろ？ナンパだよ、ナンパ」

「……まだ諦めていなかったのか」

「ふんっ、諦めるわけあるかすっとこおっぱい……とりあえずせっくる前提のナンパは失敗する事がようやく分かった」

「今頃それを気付いたのか……」

「だから今度はせっくるしてくれる女を捜していた……そして、よ

うやく見つけたんだよ」
「……おい、全然前と変わってねぇぞ」
「ちげぇよ、俺は今までせっくるしてくれって攻め気でいったんだが、今度は受け気でいくんだ。全然違うぞぽんぽこりん」
「全然言っている意味分からねぇし、違いが見出せないんだが」
「だからっ、この娘達が俺を快楽の道へ先導してくれるんだよっ！」
ギュッ、ギュッ
「え…？」
「ふぇ？」

店長は栞と双葉の手をギュッと握る。

「何言ってんすかアンタ。あと、何人の妹の手ぇ握ってんすか？あと……そこのロリもそれは犯罪だ」
「私はハタチの女ですぅ！」

双葉は涙目で訴える。こいつはさっきからハタチハタチってうるせぇな。あのなぁ……ハタチハタチって浮かれていられるのも今のうちだぞ？おいちゃんなんかなぁ……おいちゃんなんか……うぅ、ぐすっ。

「触診だよ」モミモミ
「そろそろブチ切れてもいいですか？」

とりあえず店長を俺の拳で制裁した。

「つーわけでお前ら俺を祝えっ！」

何だかんだで何故か双葉と栞と店長は喋っているうちに仲が良くなった。つーか双葉は一度顔を見ているので知っているはずなのだが……何だろうこの疎外感。俺だけ何か仲間ハズレ？

「てんちょーさんっ、祝うって何のお祝いですか？」

双葉は何故か瞳をキラキラさせてワクワクした表情で店長に問う。何でそんな嬉しそうなんすか双葉さん。

「俺を崇めるお祝い」

「氏ね」

俺は一言言ってやった。

「そう言えば今日ってイブだよね？双葉ちゃんと店長さんは何かパーティーしないの？」

「パーティー……ですか？」

「パンティ……か。所で君達の今日穿いているパンティーは何だ？」

「氏ね、ついでに死ね」

「今日が実質クリスマスみたいなものでしょ？何か予定無いの？あっ、お兄ちゃんは言わなくていいよ。どうせ今年もロンリークリスマスでしょ？」

「……」

妹よ……お兄ちゃんはすこぶる悲しいぞ。当たっているから何も言えないけどねっ！

「あの……いいですか？」

双葉はおずおずと手を上げた。

「ん？どうしたの双葉ちゃん？」

「えっと……明日の２５日なんですけど、私の誕生日なんです……
…」

12月24日（4）

クリスマスイブの昼前。
俺と双葉と栞の三人は繁華街にあるデパートに来ていた。ロリコン店長は『幼女を物色してくる』とかリアルに犯罪ちっくな台詞を言い残し、街中に消えていった。明日の三面記事の隅っこの方にやけに侘しい感じで顔写真が載らないことを祈っておくとしよう。とまぁ、そんな変質者の話はどうでもよくて俺達三人がこの繁華街に来た理由は先の双葉の誕生日なのですぅ発言によるものだ。妹様の妹様による妹様のためのドギツイ視線によって俺は屈服せざるを得なかった。つまりは『甲斐性なし』的な視線を俺にず～～～～～っと向けてくるのだ。さすがの鈍感ちんの俺でもこの視線の意味することは理解できる、ぐすん。

「双葉ちゃんこれなんてどうかな？似合ってると思うけど」
「わぁ……そうですねぇ、この紺色のフリルスカート、ぷりちーですっ」

俺は女物の洋服を色々物色している双葉と栞の傍らでぼけ～っと突っ立っていた。こーゆーときって何か男って肩身が狭くなるよな。何かさっきから年配の女性の熱い視線を感じるし……何で？もしかして、おばちゃま好かれ体質なのか俺？全然嬉しくない。

「ふぁ……」

つーかだるい。服を物色し始めてかれこれ2時間経つ。女の買い物はいつも決まって長いし、待たされる男は溜まったもんじゃない。これが恋人同士ならイチャラブフラグ立ちまくり俺のきゅうりも立ちまくりすてぃだが、これはそんなエロゲーちっくなイベントでは

ない。今の俺は妹様（アマゾネス）と珍獣（ロリモドキ）の使い走りに過ぎない。何か無性に腹立ってきたので思い切って触手イベントでも起こしてやろうかと思ったが死亡フラグに直行しそうなので断念した。何だ触手イベントって、何だフラグって。あー、やだやだ。これだから歳をとるのはやだねぇ……これはあれだ、オナヌーし終えた後の妙に寂しさが倍増したあの時の気持ちと似ているな。

「あの……司さん」

俺が脳内ロンリーコミュニケーションをしていると、俺のダッフルコートの袖を軽く引っ張る感触を感じたのでひとまず現実に向き合うと、双葉が上目使いで俺を見ていた。……違和感、それは双葉の服装は前の痛々しいトナカイのコスプレっぽいものでなく、上は黄色のヒトデ模様がぎっしり半分入った緑地のパーカーに下は紺色のフリルスカートという何ともコメントし辛い格好だった。

「……お前、何その格好」

「あのっ、そのぉ……」

双葉は何故か身体をモジモジさせ、両手の人差し指でツンツンしていた。何その乙女ちっくな反応。とりあえず、前の格好よりは痛さは数段下がったが……うーん。

「とりあえずだな……そのヒトデがひしめき合ったパーカーはどうかと思うぞ」

「あぅ！ち、違いますよぅ！これはヒトデじゃないですっ……！これはス……」

「おっと！その先は言うなっ、分かったぞ……！」

「は、はい？」

双葉は戸惑った表情で何か言いかけたが、ふふん。おいちゃん分かっちゃったぞん。その特徴的な形状……そして、フードファイター双葉！この二つのヒントから予想されるその不思議な模様はずばりっ！

「もみじ饅頭だろう！」

「全然違いますよぅ！この模様はスターです！キラキラスターですよぉ！！！」

「なにぃ、キラキラスターだと！？錦野さんか！？星条旗かっ！？アメリカンかっ！？貴様はアメリカンなのか！？この洋モノかぶれがっ！！！」

「言っている意味が分かりませんよぉ！……ひゃふ、むにぃ～～～！」ギョム

俺は毎度おなじみ、ほっぺをギョムった。よく伸びーるびるびる、びびるびるびるびびる大●。

「……」

「ムッ」ギョムギョム（↑ギョムプレイ実行中）

もがいている双葉の背後から何者かのオーラを感じた俺は双葉から目を離し、そこに目を向けると睨みをきかせた目で俺をジッと見つめる妹様が突っ立っていた。ふふん、君ぃ、その目はも、し、か、し、て、嫉妬……しているのかい？やれやれ……俺も罪作りな男になったものだ。……ごめん、言ってて何か空しくなりました。つーか、妹だし。ありえないし、嬉しくもない。

「……」

妹様は引き続き俺にドギツイ視線を送ってくる。……毒電波でも送

っているのだろうか？いやだん、ハゲになる毒電波でも送られていたらどうしよう。おいちゃん、ただでさえこのところうす～くなっているような気がするのに……クソッ！この魔女めっ！アマゾネスめっ！俺の毛根は永遠に不滅だっ！俺は仕返しとばかりにか●は●波もといハゲハゲ破のジェスチャーをした。ふふん、これでお前も違うところがハゲチマイナ！主に下の方ね。

「……何やってんの？」

妹はしばらく俺を見つめた後、耐え切れなくなったのかついに俺に声を掛けてきた。ぬぅ、ハゲハゲ破は奴には効果が無かったのか？くぅ、それとも属性の相性が悪かったのか？しかし、ハゲハゲ破は無属性の攻撃だ。どんなポ●モンにも平等に効果があるはずなんだが。

「おい、栞。お前の属性は何だ？」

「は、はぁ？何言ってるの？頭おかしいんじゃない？とにかくちょっと来て」グイッ

栞は俺の耳元まで顔を近づけてきた。なっ、そ、そこはぁ！

「お、おい……！やめろっ、俺は耳が弱いんだぁ！あひぃ！だめぇ！そこはだめなのぉー」

「お兄ちゃん、気持ち悪い声出さないでちゃんと私の話を聞いて」

素で返されてしまった。

「……はい、すみません」
「ふーっ、いい？お兄ちゃん？さっき双葉ちゃんがお兄ちゃんに何て言おうとしたか分かる？」
「……は？」
意味が分からない。双葉はさっき俺に何かを言おうとしていたのか？そんな素振り見せたっけ？
「……はぁ、その顔は全然気付いていないんだね。じゃあ、問題。双葉ちゃんはお兄ちゃんにある事を聞こうとしていました。そのある事とは一体なんなのでしょーかっ？」
……は？まったくもって意味が分からない。世界不思議発見か？
「おいおい、栞。俺の高校の頃の現国の成績知ってっか？１０段階評価で１だぞ１。はっ、どうだびびったか」
「今はお勉強タイムじゃないよっ、って本当に酷いね。お兄ちゃんの日本語読解力能力はサル並み……いや、ゾウリムシ以下かも」
「おい、俺の知能は単細胞以下ってかコラ」
「あー、もうっ！話逸れた！お兄ちゃんの知能がゴミムシ以下かどうかは置いといて、とにかく早く私の質問に答えてっ！」
ゴミムシって……ママン、いつから俺の妹は言葉の暴力を覚えたのでしょう？昔はかぁいらしかったのに……えっと、とにかく何だっけ？双葉が何か言おうとしてたんだよな……俺はふと双葉の方に顔を向ける。
「あぅう……」サスサス

双葉は未だに俺にギョムられた両頬を掌でさすっていた。ふむ、いつもと違う服装で駆け寄ってくるエロゲーのヒロインを見たことがあるな。その駆け寄ってきたヒロインの女の子が頬を染めてモジモジしながら主人公に言った台詞は確か……

「分かった？」

「……『……この服、似合ってるかなぁ？（／／／）』か？」

「……合ってるけど、何故か台詞に不純な感じがしたんだけど……」

「気のせいだ」

「そう、だったら双葉ちゃんに何て言うべきか分かってるよねお兄ちゃん？」

「あぁ、とりあえずボロクソに貶したらいいんだよな」

「違うよっ！ここまで分かってどうしてそんな考えに至るのか私にはお兄ちゃんの思考が理解できないよ！？」

「いや、とりあえずいぢっておいたほうが何つーか、ほら。第一印象って悪い方がギャップが後々の好感度を左右するっつーか、な？萌えるじゃん」

「本当に何言ってんの！？何言ってるのかさっぱり分かんないけど夢見すぎだよっ！とにかくっ！ほらっ！双葉ちゃんのところに行って！もう何言えばいいか分かるでしょ！？」

「あ……？結局なんて言えばいいんだ？」

「もぉー！何かサルにモノを教えているみたいだよっ！とにかく！『似合ってる』！その一言でいいのっ」

栞は俺の背中を押して双葉の方へ行かせようとする。ふーむ、『似合ってる』か。でも正直、双葉の格好はいつもと違うせいか違和感バリバリ君だ。つまりは『似合ってはいない』。……嘘を言ってもいいのか？

「『似合ってる』」

「っ！」
「栞、これでいいんだな？」
「……」
栞は黙ってゆっくり頷いた。……？そこでどうして俯くんだ？とにかく、そろそろ双葉の元へ戻ろう。迷子のアナウンスとかで呼ばれたら恥ずかしいしな。俺は栞から離れ、双葉の方へ歩いていった。

「……馬鹿」

「似合ってる」
「ふぇ？」
俺は頬をさすっている双葉に向けて栞の言われたとおりの台詞を言うと双葉は不思議そうなアホ面で俺を見つめてきた。ふむ、まだ『似合ってる』分が足りないようだな。
「似合ってる」
「ひぅ！い、いきなり何ですかぁ！？」
双葉はギョッとした顔で驚いていた。くそっ、何で伝わらないんだっ！

「うるせぇー！似合ってるって言ってんだよぉ！」

嘘だけど。

「な、何が？」

「それ」ピシッ

俺は双葉に指を指した。

「……いっ、こ、こんなところ似合っていても全然嬉しくないですっ！ひ、ひどいっ！司さんは私にはこのサイズが似合っている、そう言いたいんですねっ！？うぅ、死んでやるぅ！舌を噛んで死んでやるですー！」

双葉は胸元を両手で隠して真っ赤な顔して涙目で俺を睨んできた。

あるぇー？何か勘違いしていないかこのロリモドキ？

「待て、お前は何かを勘違いしている」

「うぅ、いいですよぅ。どうせ私は一生ひんぬーですからっ！一生ひんぬーのままひんぬーらしくひんぬーのようにつつましく生活をしてひんぬーのまま死にますよぅ……」

双葉は俺に背を向け体育座りでいじけていた。め、めんどくせぇ……

「服だよっ！」

「……え？」

「お前の着ているその服……似合ってるよ」

「……」

……緑地のキラキラスター模様のパーカーに紺色のフリルスカート。

正直、双葉には似合っていないような気がするが、本人がさっき嬉しそうにしていたからもういいだろう。栞がさっき言っていた事は嘘も方便、という事だろうか？……でも本当にそれでいいのか？

「……」
「双葉？おい、双葉？」
「あ……ぅ（／／／）」
「……お～い？双葉さんや～？お～い？双葉ちゃ～ん？」
双葉はその場で固まっていた。何なんだコイツ。……それにしても。

「……ちんまい」

ピキッ
俺がそう言うと何かが割れるような音がした。……？何だ？双葉の様子がおかしいぞ？何か震えている。

「う」
「う？」
「うわぁあああーーーーん！」ダッ
「お、おいっ……！？双葉！？」

双葉は泣きながら俺の元から走り去ってしまった。……15分後、デパート内に双葉を呼ぶ迷子のアナウンスが入ったのは言うまでもない。

後に栞からアドバイスを貰った。
『お兄ちゃんはもっと女心を知るべし』だと。……意味が分からん。

12月24日（5）

クリスマスイブの昼過ぎ。
俺は繁華街のデパートに双葉と栞を残し、ケーキ屋のバイトに勤しんでいた。街中は多くのバカップルで賑わっていた。おそらく聖夜のお勉強に向けてテンションアゲアゲなのだろう。かぁ～、やだねやだねやだねぇ！ったく、最近の若者はどうしてこう頭の中は桃色白書でピッーでアッーでウッーな感じなんだろうねぇ！あー、やだやだ！気持ち悪いっ！……なっ、なんだその目はぁ！べ、別に羨ましいから愚痴ってるわけじゃないんだからねっ！？

「司せんぱ～い？さっきから何、ブツブツ独り言言ってるんですか～？」

俺の隣のレジにいるサンタのコスプレ姿の苺ちゃんが不思議そうな顔で俺に尋ねてきた。うぬぅ！聞かれていたか！おいちゃん、チョーはずかちー！

「……ロンリーでボンビーな大人の愚痴さ、軽くスルーしてやって」
「あぁ～、なるほど。ロンリーでボンビーで童貞な三十路手前の大の男の非処女や非童貞に向けた魂の雄叫びって奴ですね～かっくいぃ！今の司先輩の気持ちは童貞最高にハイって奴だぁアアアアアアーーーーーー！ってな感じですよね！」
「……うん、何かごめん。あんまそれ引っ張らないでくれるかな？おいちゃん、何か色々空しくなってくるからさ……」
「うんうん、司ぁ、俺にも分かるぞその気持ち」

ふと野太い声が背後から聞こえたので振り向くと、タバコを咥えた店長が腕を組んで云々と頷いていた。

「俺もまた何人かのエセ幼女にアタックチャンスしたが見事に撃沈したよ、こりゃまた今年もゲイのセフレで我慢するしかなくなったヨン様」
「真昼間から聞きたくもない私事を暴露するなよ、反吐が出るわ」
「おかげで俺のア●ルせっくるのスキルは年々上昇の傾向にある……こんなみじめな俺を慰めてくれ苺ちゃん？」
「お断りします♪」
「はっは～、いっけねー、やっぱ美処女たんには初っ端からア●ル攻めはきっついかぁ～」
「アンタそれふっつうにセクハラだからな、少しは自重しろロリコン」
「うるせぇ、むっさくるしい男は黙ってろ。掘るぞゴルァ」

店長はマジでぱんぱんやっちゃうぞみたいな感じの鋭い目つきで俺を睨んできた。俺は店長とアッーな関係には陥りたくないので黙る事にした。

「あれぇ？てんちょ～、不倫が奥さんにばれて喧嘩でもみ合っている内に奥さんの鋭い爪で思いっきり引っ掻かれたようなその無数の傷跡どうしたんですか～？」

店長の顔には俺が朝会った時には無かった引っ掻き傷ができていた。

「今度は何をしでかしたんすか店長？大体想像つきますけど」
「いや何、１０人目のエセ幼女の生足に背後から自然に触れようとした時にな、できた傷なんだよ」
「思いっきり不自然極まりない動作だろうが、どうしてそんな展開に至ったんだよ」
「いや、『肩にゴミついてますよ』みたいなニュアンスで生足に応

用させてみた、みたいな？」
「よくポリさんに捕まらなかったな、あとそれは無理があるから、思いっきり不審人物だから」
「いいだろ、別に。すべすべな生足触ったり、ペロりんちょしたかったんだからよぉ、フゥー……」
「欲望に忠実なオッサンだな、テメーの脳内広辞苑には自重つー単語は存在しないのか？考えるなとは言わんがせめて年頃の女の子がいる前では隠せよ」
「苺ちゃんはんなことで俺を嫌わねぇよ、むしろ自分からくぱぁーとかやって受け入れてくれるさ。なぁ？苺ちゃん？」
「ハイ♪店長は大好きですよん♪受け入れないですけどね♪」
「おふっ、フラグたった！フラグたった！ク●ラがたった！俺のぼっちゃまもたった！」
「氏ねよ。って、思いっきり話逸れたじゃねぇか。で？その傷どうしたんだよ」
「あぁ、でな？エセ幼女の生足に触れようとした時、エセ幼女の足元にいた三毛ニャンコが俺に気付き、思いっきり俺の顔面をキシャァアアーとか叫びながら引っ掻きやがったんだ」
「飼い主を鬼畜の手から守ったんだな、賢い猫だ」
「ですね～」
「おいおいお前ら話はこれで終わりじゃねぇぞ、でな？俺、思いっきり猫に引っ掻かれている最中にな……ボッキボッキしたんだ」
「苺ちゃん、耳塞いでて」
「？」
「でな、あまりの痛さで俺のぼっちゃまは濡れ濡れになっちゃってよぉー、まぁ色々考えている内にもうニャンコでもいけるかな？いいかな？って思えてきたんだよ……だからな、その三毛ニャンコの飼い主のエセ幼女に『この三毛ニャンコとせっくるしたいです……』って某監督の名言っぽい感じでお願いしたらすぐさま飛んで逃げちまったよ。でも、その時に慌てたせいかエセ幼女の靴が脱げちまっ

て現場に残ったんで戦利品として持ってきた。もう俺が色々使っちまったけどダチ公のテメーにやるよ司。それでぼっちゃまを擦りながら聖夜の一時を楽しむんだな」
「言いたいことは山ほどあるがとりあえず仕事しやがれロリコン野郎！！！」

クリスマスイブの昼間から夕方は特にケーキ屋が忙しい時間帯だ。ケーキを買いに来る客だけでなく、事前にケーキを予約している客にも対応しなければならない。今日のシフトが俺と苺ちゃんの二人だけなので、レジ前は必然的に混雑する。店長は奥の厨房で追加のケーキ作ってるし、俺と苺ちゃんはレジで忙しいし……まさにこの日のケーキ屋はてんてこまいだな。

「ありがとうございましたぁ！いらっしゃいませぇ、次のお客様こちらのレジにどうぞー！」ざわ…ざわ…
「ありがとうございました♪ふー……司先輩、今日は本当に忙しいですねー」ざわ…ざわ…
「チーズケーキですね？少々お待ち下さいっ、……まったくだよ。猫の手も借りたいくらいだね、あっ、すみません！すぐ用意しますからぁ！そんなに睨まないでぇ！美人な若奥様！」ざわ…ざわ…
「……あれ？司先輩……あれ……」クイッ、クイ
苺ちゃんが俺の服の袖を引っ張ってきた。
「何っ！？こんなに忙しい時に！？」
「ほら、あれ、あれ見てください」

「え……？」
苺ちゃんが店先の方に指を指したので俺はその方向に顔を向けるとそこにいた人物は……

「いらっしゃいませぇ～！ここのケーキは甘くてとろっとろでおいしいですよぅ～～～あうぅ、想像したらおなかが空きました……」クー
「い、いらっしゃいませぇ……う、うぅ、どうしてこんな目に……私はただお兄ちゃんの様子を伺いに来ただけなのにぃ……（／／／）」モジモジ
「おらぁー！てめぇらここのケーキ喰わないとぶっ殺すからねぇ！？ほいっ！そこのモヤシ男！ここに入るんだねぇ！けっけっけっ！ギャハハハハハーーーーー！！！！！！」バシッバシッ
「お、おねぇちゃん……そんな押し売りみたいなことしないでよ恥ずかしいから……あ、すみませんモヤシ男さん姉がご迷惑をおかけして……え？買う？い、いいんですか？……あ、ありがとうございますっ、どうぞこちらですっ」ペコリン

どこか抜けたような声で客引きをしている内に腹が減ったのかその場でしゃがみ込んでじ～っと店の中の様子を窺うサンタ仕様の双葉。無理矢理やらされたのだろうか？顔を真っ赤にして小さな声で客引きをするサンタ仕様のマイシスター栞。
そして凶暴な面をして釘バットで客を脅して無理矢理店に入れようとするサンタ仕様の鬼畜ババァ、魔血子。
姉の暴走を止めようとしながらもちゃっかり客を獲得している（お

そらく人柄の問題）サンタ仕様の魔鬼…優梨子ちゃん。
俺はそんな４人のコスプレサンタ娘達がケーキ屋で客引きをしているという信じられない光景を目の当たりにした。

12月25日（1）

街灯が聖夜の街を照らし、一層賑やかになってきた頃。
ケーキを求める客足は徐々に減り、暇になってきたところでレジでぼけ～っとしていると店内にゾロゾロとコスプレサンタ娘達（一人変なオバサンが混じっているが）が入ってきた。

「はぁうー中は暖かいですねぇ」

双葉はストーブの前で手を擦り、ぬくぬくモードに入っていた。

「おら何か今の台詞でおっきしたぞ」ムクムク
「氏ねよロリコン」

今日は珍しく店長もレジに出ていた。といっても店の中でタバコを吹かしてエロ本を読んでいただけだけどな。何度かそのまま自家発電をおっぱじめようとしたのでぶん殴って気絶させたがな。店長が『おっ、そうか！ホイップクリームの代わりに俺のザ●メン使えばいいジャン』とかほざいた時は本気で亡き者にしてやろうかと思ったが地中の分解者にご迷惑をかけるかと思って止めたがな。

「はっ、なんだい。そこのイカ臭そうな顔してる男がこの店のケーキを作ってるのかい。何も知らないでここのケーキを喰う客に同情するよ、フゥー……」

サンタクロースの格好でタバコを吹かしているババァもとい魔血子が蔑むような視線を店長に送る。あぁ、何でこのクソババァがここに……エロイ体つきをしているが全然萌えない。サンタクロースというよりサンタブッコロースみたいな感じだった。その服の赤いの

はサンタを撲殺した時に付着した返り血ですか？思わずそう問いたくなるような異様なオーラを周囲にびんびんに放っていた。

「おい、司。何だそこの初対面なのに失礼なクソババァは？思わず萎えちゃったぞコルァ。ところで栞ちゃん、今日のパンヌーの色何柄？」

「兄の前で堂々とストレートなセクハラを働くなロリコン。あのババァは俺の住んでいたアパートの大家だよ」

「住んでいた？まるで今は住んでいないみたいな言い方だな。ところでそこのかぁい子ちゃん、おぱぬー揉ませてくれないか？」

「…えっ、え？あ？えぇ！？（／／／）」

店長は何かを揉みしだくかのような手つきで両手をワキワキさせていた……うん、とりあえずやっちゃうか。一応言っとくが、悦ばせるって意味じゃねぇぞ。

「あたしの妹にセクハラ働いてんじゃないよっ、イカ臭男！」ブンッ

「うおぅ！？」スカッ、パララッ

店長が優梨子ちゃんにセクハラを働くこうと近づいた瞬間、隣にいた魔血子が釘バットを店長の脳天に向けて振り下ろしたが、ワンテンポ遅れて気付いた店長は寸前のところで後ろに避けた。ギリギリで避けたせいか、店長の髪の毛は真ん中で一直線に綺麗にパラパラ抜けていった。何だその漫画みたいなおもしろギミック。

「ちょっ、おまっ、うぉおおなんじゃこりゃぁあああーーー！落ち武者の出来損ないみたいな髪形になっちまったじゃねぇかコラ！」

店長は手鏡を見ながら嘆いていた。とりあえず、俺は店長に指差し

ながらゲラゲラ笑っておいた。

「ちっ、避けるんじゃあないよ。てめぇの頭の表皮剥ぎ千切って、ドロッドロの脳味噌ブチ撒けてやるつもりだったのによ、かぁ～ぺっ！」

魔血子は落ち武者店長をドギツイ目で睨みながら唾を吐いた。店内で唾を吐かないで下さいオバサン。

「ねぇ？司君司君、あのオバサンあんな事言ってるヨ、おっちゃん怖い」ガクプルガクプル

「俺に触れるなチン●スマン」バシッ

「ひでぇ！」

「ところで……君達は何でこんなとこで客引きしてたの？」

昼から忙しくて彼奴等に構う事ができなかった俺は疑問をコスプレサンタ3人娘（＋α）にぶつけた。

「客引きだなんて……別にここ怪しいお店じゃないんだし、人聞きの悪い事言わないでお兄ちゃん」

双葉、栞、優梨子ちゃんはふっつうの良心的な客引きに見えるが、魔血子は風俗やキャバクラの客引きにしか見えないぞ。しかも悪徳の、一度掴んだ男は死ぬまで骨までしゃぶられ身体も精神もボロボロにされた挙句に最終的には奈落の底へ突き落とされそうだ。

「じゃあどうして」

「えっと……ですねぇ（みなさーんっ、手筈どーりにやりますよーっ）」（双葉）

「（ほ、本当にやるんですか……？『アレ』？）」（優梨子）

「（ここまできたらやるしかないですっ！背にハラミはかえられませんっ）」（双葉）
「（双葉さん……背に腹は、です……）」（優梨子）
「（けっ、この娘は脳内に食い物しかないんだね）」（魔血子）
「（ちっ、ちがいますぅーた、偶々間違えただけですっ、別にバウムクーヘンとかクロワッサンとか食べたいなとか全然これっぽっちも一ミクロンも思ってませんー！）」
「（ふん、まぁそんな正直な所がアンタのかぁいいところでもあるんだけどね）」（魔血子）
「（……ずるい）」（栞）
「（……？どうしたの？栞ちゃん？）」（優梨子）
「（な、何でもないです）」（栞）
「（こ、こほんっ、では……やりますよーっ、いっ、せー、のー、せっ！）」（双葉）

パンッ、パパパッ、パンッ、パンッ「「「「「メリークリスマース！！！！」」」」」

突然店内に爆竹のようなけたたましい音がした。さらには色取り取りの紙テープやら紙ふぶきやらが飛交いそこは華やかな空間を演出していた。

「ひぃ！？な、なんだぁ！？」

突然の音にびっくらこんした俺はコスプレサンタ3人娘（＋α）の方を見ると、全員、手にパーティ用のクラッカーを持っていた。なんとっ！苺ちゃんまでニヤニヤ顔で俺を眺めているでは無いかっ！そ、そうか……！これはもしかして、あれだ……嵌　め　ら　れ　た　。まだ女の子を色んな意味で嵌めた経験は無いけどとにかく、嵌　め　ら　れ　た　。

「えっへへへー、司さん！驚きました？やーい！やーい！びっくりしましたねぇ！やったですー！」ジタバタ

双葉はしてやったり的な笑みを浮かべ、その場ではしゃいでいた。一発しばきてぇ……だが奴らに出し抜かれた俺はその場で脱力した……こんなロリモドキに先手を取られるなんて……ガクッ。

「なんだい、辛気臭い顔しちゃってさ。せっかくクリスマスパーティー開いてやろうってのに元気出しなっ」ピシッ

魔血子はいきなり俺の背中に鞭打った！

「ぎゃぁー！な、何しやがるっ」

「見て分からないのかい、鞭だよ鞭。あんた大好物だろ？こーゆーの」ピシッパシッ

「……司さん」ジッー

「……お兄ちゃん」ジッー

「だ、大好物なわけあるかっ！お、お前らもそんな意味深な目で俺を見つめるなよっ！」

「司先輩はドMなトナカイさんですねっ、実際のサンタさんとトナカイの関係って女王様とその奴隷って感じですよね。ドSなサンタ

さんがドMなトナカイさんに鞭打って良い子にプレゼントを届けるってな具合に」
「苺ちゃんもそーゆー怪しげな解釈で俺とサンタさんを汚さないでくれるっ！？……うげぇー！苺ちゃんがそんな事言うから中年の白ヒゲの小太りのオッサンが真っ赤な顔でハァハァ言いながら擬人化したオスのトナカイ（こちらもまた何故かハァハァしている）のケツをひたすら鞭でしばくみたいな腐女子的な妄想しちゃったじゃないっ！うっわぁーこれ軽く自己嫌悪に陥るよ……ガクッ」
「うわぁ～司先輩ちょーきもいーあはははー」
「「ジーッ」」
「やっ、見ちゃダメ！笑っちゃやーよ！こんな薄汚い妄想で汚れちゃった大人なアタシを見ないでぇー（泣）」

苺ちゃんは俺に向かって指差しながら笑い、双葉と栞は俺にひたすら意味深な視線を送る……ぐぁー！お、俺という奴はなんちゅー妄想を……百合（レズ）ならまだしもウホッ的な妄想をするなんて……し、死にたい。

「あ、あの……司さん」
「ん……？な、何かな……優梨子ちゃん？え、遠慮しないで……さ、さぁ、君もこんな腐ったおいちゃんを存分に笑ってよ……ははっ、ははははは……」
「い、いえ……その、あの……サンタ（♂）×トナカイ（♂）の続きは……？（／／／）」ドキドキ
「ははっ、ははは……は？」

「おらぁーお前ら用意してやったぞ。たーんと食べろやぁ」
店の奥からでケーキを持った店長が出てきた。ケーキは見たところ普通の苺がのかっているケーキだ。うーん、特に怪しい所は無いが……
「おやぁ？どうした童貞君？俺のケイクをジロジロ見て。別に毒なんて入ってねーゾ」
「……そのクリームにてめぇのザー●ン入ってねぇだろうな？」
「そんな食べ物を粗末にするわけあるかい。でもあれだよな、とんこつラーメンってザー●ンの色に近いんじゃね？そうだっ、とんこつラーメンの汁をザー●ンに見立てて、とんこつ『もどき』ラーメンってのはどうだ司！？」
「やめろ、今度からとんこつラーメンが食えなくなるだろうが」
「まぁ、んな冗談は置いといて……とりあえず司、男のお前は決してこのケーキを口にするなよ」
「何でだよ……まぁ、甘いのあんま好きじゃないし、いいけど」
「て、てんちょーさんっ！こ、このケーキ……！食べてもいいですかっ！？」
「おいしそう……」
「おいしそうですね……」
「おいしそーですねー」
双葉は突然の店長特製ケーキの来襲に心を奪われたのか瞳をキラキラさせていた。また、他のサンタ娘及び苺ちゃんも双葉ほど表に感情を現さないものの、店長のケーキに釘付けだった。やっぱ女の子は甘いのに目が無いのかね……
「あぁ、いいともーじゃんじゃん食べちゃってくれよ。もちろん他の女の子達もよ」

「いただきまふっ！むしゃむしゃ！がつがつ！……っ！おいひー！すっごくおいひーでふ！」バクバク
「じゃあ私も……あっ、ホントだ。おいしい……」パクパク
「クリームがしつこい甘さでなくて甘さ控えめでおいしいですね……」パクパク
「うんっ、やっぱ店長の手作りケーキはおいしーなー♪ホモだけど」パクパク

店長のオーケーサインを皮切りに双葉、栞、優梨子ちゃん、苺ちゃんはケーキを食べ始めた。

「おい、苺ちゃん。訂正しろ、俺はホモじゃない。バイだ」
「お前の存在を訂正しろ」

皆、女の子達は幸せそうな顔でケーキを食していく……ほんと特に双葉は旨そうに食うなぁ。

「おい司。ちょっとこっちこい……」

店長は俺を奥の店の厨房に引っ張っていく……

「な、何だよ……」
「司、俺がタダでケイクを作ると思うか？」
「……そうだな、アンタは何か見返りを要求しそうだ。例えば、『身体で支払え』とか」
「おぉ！その手があったか！……まぁ冗談だが」

冗談に聞こえない……

「何だよ……回りくどい言い方はよせよ」

「あぁ……実はな、あのケーキに媚薬を入れた」
「そうそうストレートに……って、ブッーーーー！」
「おぉう、きったねぇな」
「今なんて……！？媚薬！？何やってんのアンタ！？犯罪だぞそれは！」
「何言ってんだ、今だ童貞のお前に捧げる俺からのささやかなプレゼントだ。いくらでもしっぽりがっぽりいっちゃえよユー」
「なっ……！（／／／）」

時刻は２４時００分ーーー
聖夜を終え、もう本当のクリスマスは目の前に差し掛かっていたーーー

12月25日（2）

「ふぁ……何だか身体が火照ってます、はぅ……（／／／）」

銀色の綺麗な髪、あどけなさ（というより童顔）が残った火照ったフェイス、白い肌の胸元がはだけており、床で足を崩しトロンととろける様な瞳で俺を見つめている……その様はまるで童貞オブザゴッドと呼び崇められた俺を快楽の世界へ誘っているよう。彼女の名は榎本双葉、ふふん、処女臭がプンプンするぜぇー！ぐふふ……待っていろヨン様……もうすぐ俺様のびんびんでばんばんなビッグマグナムドライでお前の寂しげな洞穴を埋めてやるぞっ☆当然、ザ☆俺の嫁。

「何……はぁ、ハァ……コレ？すごい……あ、熱いんだけど……ハァ（／／／）」

彼女もまた魅力的な吐息を逐一吐いてくれる。彼女の名は溝淵栞、今や現実（リアル）でもお目にかかるのが困難とされるであろう薄茶色のツインテールという髪型をしている彼女もまたその少し幼さが残る顔を歪ませて胸元をパタパタとはだけさせている。それは見えない何かを拒んでいるよう……今まで経験したことの無い体感なのであろう。その姿を見るだけで俺のアレがアレになってもうドピュッドピュ～な感じになっている。ふふん、実に陵辱しがいのある微ツンデレ反応（リアクション）じゃないか……当然、ザ☆俺の嫁。

「うぅ……っ、おかしいです……私の身体……うぅ、何ですかコレ……こんな、こんなぁ……あっ、う（／／／）」

またある彼女はシークレットプレイス（主に下のつくお腹）を押さ

えるような格好で上気を発した顔を見せてくれる。彼女の名は鬼流魔鬼…優梨子たん。少しアレな臭がどことなく漂う彼女だがその下のつくお腹（※彼女の名誉のためどうか察してあげてください）を押さえる彼女は今にも押し倒してピピィー（※彼女の名誉のためどうか察してあげてください）でパパァー（※彼女の名誉のためどうか察してあげてください）でウパァー（※彼女の名誉のためどうか察してあげてください）なことをしたいが山の如し。当然、ザ☆俺の嫁。

「ヒック……あ～、ヒック！（／／／）あぁ～ん？何、ジロジロアタシを見てんだいっ！チン●もぎ取って海に捨てるよっ！……ヒック！あ～、うぷっ、おぅえ、ゲロゲロ～～～」ダバダバダバ～～～

……何この酔いどれババァ？ちょっ、めっさ睨まれてるんですけど……って、だぁーーー！目の前でゲロ吐きやがったっ！ぐぉおおおおーーーーー！酒臭ぇーーーーー！何で！？

「……以上、イケメン店長、右助様の実況でお送りいたしました」

「おい、コラ薄毛様。どうすんだよ、コレ」

「おい、誰が薄毛だタコ。俺の毛髪は陰毛並みにもっさもさだぞコラァ」

「お前が陰毛とかもっさもさとか言うなセンタースストレートハゲ」

サンタ娘達に変化が現れたのは日付が変わり、数十分後のことであった。

頬を染め、萌色吐息を吐き、とろんとした瞳で見つめてくるサンタ

娘達……まさに閉店後のケーキ屋はあぼーんな怪しげな空気になっていた。しかし、例外もあった。

「……苺ちゃんは平気な顔してるね、ていうか君まだそのエロケーキ食ってんの？」

「モグモグ……どうしたんですかぁ司先輩？普通に美味しいですよ、コレ……もきゅもきゅ」

「……それ媚薬入ってるんだけど」

「へー、そうなんですかー……でも私には関係無いですね。私の舌はあらゆる毒素を取り除きますから」

「フィルター仕様！？」

ホントなんなんだろうこの娘……人間なの？

「ギャハハハハハ！雑草だっ！こんな所に雑草生えてんじゃないかぁ！ヒヒッ、引っこ抜け！引っこ抜け！うふぉほほほほほぉーーーー！」ブチッ、ブチブチ！

「あいだだだだ！や、やめっ！お、おい司ぁ！このキ●ガイババァを止めっ……ぐぉおおおおーーーー！千切れる千切れる千切れちゃうのぉーーーー！右助が薄毛になっちゃうのぉーーーー！」ブチッ、ブチブチ！

何故か双葉達と同様に媚薬入りのケーキを喰って酔いどれババァに変貌を遂げた魔血子は店長のサイドヘアーをブチブチ千切り、奇声を上げていた……あ～あ～、店長のヘアーがますます悲惨な事になってんな……巻き込まれたくないから少し離れよう……と俺が動こうとすると何者かが俺の腕を掴んでくる……振り向くと。

「ハァ、ハァ……（／／／）」

「うっ……優梨子、ちゃん」

俺の腕を掴んでいたのは優梨子ちゃんだった。優梨子ちゃんは赤く染まった顔をし、上目使いで俺を見つめていた。その瞳は何か言いたげな……切ない感情を纏っていた。ま、まさか……あんあんあふ〜〜〜んな展開をご希望しているんじゃないだろうな……！うっ、や、ヤメロー！反応するな俺のフランクフルト！

「……違うんです（／／／）」
「あの……？優梨子ちゃん？腕……そろそろ離してくれないかな？」
「違うんですぅうううーーーーー！！！！！！（／／／）」ギリギリ……
「ぎぁあああーーーーー！」

優梨子ちゃんは俺の右腕の関節をキメにかかってきたっ！な、何コレ！？何なのコレェ！？年寄りのおいちゃんの身体は労ってぇエエエエエ！

「ゆ、ゆり……こちゃん、お、落ち着いて……！ぎぁ、あっ、いたいっ、あふん！」ギリギリ……
「違う……違うんです……私は、私は……！こんなの！こんなのぉおお〜〜〜」ギリギリ、グッ！
「あふぁあああ！ちょっ！た、タンマ！タンマ！ふっ、ふっ！な、何が違うのぉ〜！？」ギリギリ……
「違う……私は！私はぁ！美少年×美少年な妄想して濡れちゃう体質なのにぃ！違うっ、私は……こんな……！は、ハレンチですーーーー！（／／／）」ギリギリ！
「ぎゃふぁあああーーーーー！は、ハレンチなのは君の思考ぉおおおおおおおーーーーーーーーーーー！」ギリギリ……

「ひ、酷い目に合った……」

俺はようやく優梨子ちゃんの長い間接地獄から解放され、その場で仰向けの大の字で倒れた……くぅうう、まさか優梨子ちゃんがあんなグ●イシー一族もビックラコンな柔術を習得していたなんて……！こ、これ軽く俺の右腕イッチマッタんじゃねぇのか……？び、ビクともしないんですけどぉー！？

「あばばばばば！げひっ！げひげひっ！ワカメぇ！ワカメ萌えぇ～！ワカメ萌えぇ～！ワカメテラ萌えぇ～！ブェエエエエエエーーーーー！」ブチッ、ブチブチッ！

「ギャァアアアアアーーーーーー！やめて！やめて！お願いぃ！俺のワカメはらめぇーーーーーー！あっやっ、あうぅーーーーーん！」ゴロゴロ

「あはははは！てんちょぉー笑って！ハイ、チーズ♪きゃははははははーーーーー♪海老反り店長激写だぁーーーーー！」カシャ！カシャ！

……何だアレ。

店長と魔血子の一方的な髪毟り合戦はまだ続いていた。店長の頭髪は見るも無惨な砂漠化が進行しており、ついでに下の毛も毟られていた……店長の背中に天使の羽とわっかでも装着してやればリアルテンテン君みたいな体裁になるだろう。イメチェンどころの話ではない、下手すればブサババァに無理矢理犯されるよりキツイものがあるかもな……苺ちゃんは何か傍でデジカメで連写してるし……まさか今頃になって媚薬の効果にあてられたんじゃないだろうな？もう店内はワケワカメな状態になっていた。

「司さん……（／／／）」
「お兄ちゃん……（／／／）」
俺の耳に二人の声が響く。嫌な予感を抱きつつも声のする方に首だけをぎこちなく動かすと紅潮した顔でどこか切なそうな瞳で俺を見つめる下着姿の双葉と栞が佇んでいた。

12月25日（3）

俺は童貞だ。
ホーケーでもミーハーでもパーピーでもムーミンでもない。
ナチュラルオブザチェリーメェ～ンだ。
とある悪魔女帝（※女友達）から『アンタの脇の下から何か童貞臭がするのよね』って言われた事があるくらいにぴっかぴっかちゅーでかぁいらしいう●い棒を下半身に装備している。……ゴメン、かぁいらしいとか自分調子乗りすぎました。とまぁ、とにかくそんな童貞神の俺はクリスマスの幕開けの夜にピンチらポン！な状況に陥っている……

「司さん……（／／／）」
「お兄ちゃん……（／／／）」

何故か下着姿の双葉と栞が仰向けで倒れている俺に卑猥な目つきで見下ろしていた……えっ、何この状況。俺もしかして童貞喪失の危機？優梨子ちゃんにキメられた右腕は動かねぇから身体動かせねぇし……こんな状態で現実妹（リアルシスター）と幼女擬態（ロリモドキ）に筆卸されたら俺はもぅ……！って、だぁー！何考えてんだ俺は！？ダメダメ、ダメぇー！近親相姦&ロリ相姦（※正確には違うのです）は人間的にアウチでオワターなのぉー！店長と同類になっちゃうのぉー！……む？いや待て待てこの状況は俺が相姦される側なんじゃねぇか？それもなかなか……ウヒッ、ってちっがーーーーーう！ぐぁー！どうして俺はこんな童貞喪失のピンチな状況に陥っている時に脳内でピンクな妄想しかできないのですかぁー！？いや、だからこそかっ！だったらヤリ●ン王に俺はなるっ！いやいや！なっちゃだめだろ！コラ！俺のコラ！バカチン！

「ハァハァ……」

よーし、落ち着けもう一人の俺、いや引っ込めもう一人の心がドス汚い俺、聖なる力を帯びたもう一人の俺出て来い！さぁーこい！ほらキター！……すまん、お願いだからその……何だ、痛いとか言わないでくれ、うん、おいちゃん必死で混乱しているだけなんだよ……うん、そういうことにしといて。……とまぁ、とりあえず冷静になってもう一度周囲の状況を確認しよう。人は誰しも心にゆとりを持たんといかんしな、うん。ゆとり最高だよ。よく分かんねーけどゆとり世代サイコー

「お兄ちゃん……何だか私、身体火照ってるの……（／／／）」

何だそのけしからん台詞は……俺のシスターでありながらまったく、今のでまたおいちゃんのジェットピストルが反応してしまっただろうが……今ならイケルヨ！夢のネブァーランドへ！……イヤ、待て。だから出てくるなよもう一人のあぼーんな俺。栞はフリル付きの天使のよぉな白のブラ、ショーツを身に着けている。ふむ、いかにも可愛らしい女性が身につける柄の下着だな。兄の俺からすると未だにちょっと言動や行動に幼さが残っているような気もするがキ●ガイ家族の中では一番まともな部類に入るのが栞だ。……あぁ、しかし長い間俺が実家から離れている間に少し大人になったんだな……オパヌーもそんな立派に育っちゃって……今、ちょっともふもふしたいとか思った俺は最低ですか、そうですね、ガクッ。

「司さん……私、身体……変ですぅ。はぅ……（／／／）」

双葉、お前の身体が変なのは元からですよ、成長的な意味で。しかし、何だ……俺はロリは対象外なのに。スーパーで安売りをスルーするほどの対象外な存在なのに。

おかしいっ！なにかがおかしいっ！

何がおかしいって……？それは……

ドキドキするんだ……なんだっ！

？この気持ちっ！？

あれか……つい最近やり込んでいたラ●プラスで大人な振る舞いをする三人の女性達の尻を追いかけて好感度を必死に上げていたが結局、俺の努力は無様に塵々になり同時に男としてのプライドも粉々になり絶望の淵に立たされた時、俺の目の前に双葉が現れた……一筋の光ーーーそう、『ロリ』様の偉大さに気付いたからか……って、この理論じゃ俺が真性のロリコンになったつーことじゃねぇか！ありえねぇ！ありえねぇっす！マジぱねぇす！（※何度も言いますが双葉さんはロリではないです。ロリ『もどき』です）

それとも……なんだ、あれか……下着のパワーは世界一ィィイイイ！って奴か？

双葉も栞同様、フリル付きの……あー、何でそんな大人っぽい……黒のブラ、ショーツなんぞ……うぉおお……黒が俺を性の誘惑をぉぉお……！きっさまー！何でロリのくせにぃ！そんなの履いてんだぁー！？あぁん！おいちゃんボッキボッキしたよっ！しまいにはアレな液もさきっちょから出てきそうだよ！チックショー！キィー！くやちぃ！こんなロリに興奮するなんて！くきぃー！（※ですから……双葉さんはロリ…）どうする……もう色んな意味で我慢できーん！しかぁし！動けーん！何だこの特殊プレイはぁ！？ドキドキするぞコラァ！っていうかもう一人の汚い俺全開に出ちゃってるし！ぐぉおおおーーーーー！誰か俺を助けてくれぇーーーーー！

ここで『俺ロンど～でもいいですよ～豆知識』
店長のエロケーキ＝媚薬入りのケーキ←実は只のアルコールのチョピット高いお酒入りのケーキ。本気で媚薬を入れるためにてんちょーは某国の工作員から大量の媚薬を獲得しようと企んでいたが、取引場所に向かうといきなり発砲されて危うく命を落としかけたので断念無念また来週。

「司さん……（／／／）」ピト……
「お兄ちゃん……（／／／）」ピト……
「うっ……！」

俺が脳内でロンリーコミュニケーションをしていると二人はいつの間にか俺の傍にしゃがみ込み、俺の服のはだけた腹に優しく手を当てた……な、何だ……？ふ、二人とも……な、何をする気なんだ。

「ポンポンさわさわ～～～～♪」サワサワ……
「……は？」

双葉は俺の腹をサワサワ撫で撫でし始めた……な、何コレ。

「ポンポンサワサワ～～～～♪ポンポンサワサワ～～～～♪」サワサワサワサワ

「アッ、ちょっ……そこっ、気持ちィイ！じゃなくて！こしょばいんですけど？あのー……フタバサン？（汗）」
「きゃははは！ポンポンサワサワ～～～～♪ポンポンサワサワですぅ～～～～♪」サワサワサワサワ
……あれ？何かこの子キャラ変わってるというかキャラ崩壊してない？
「うふふふふふ、おにいーちゃーん？（／／／）」フーッ……
「アッ、んんッ！だめぇ！耳穴はだめぇ！そこはおいちゃん弱いのぉー……って、し、栞！？な、何やってだお前……うっ！」
誰かにいきなり耳穴に生暖かい息を吹きかけられたので首だけをぎこちなく動かして見ると俺の真横で横になり、俺の耳を弄っている栞がいたっ！……うっ、それに……このやぁらかな感触……あぁん、これはもしかして白くてほわほわ～なマシュマロ……
「うふふふふふ、お兄ちゃんの耳たぶ……可愛い……レロ（／／／）」ぴちゃ、ぴちゅ……
「うっ、アッ、んぅ、おふぉ！し、栞ィ！お兄ちゃんの耳たぶを舐め舐めするのはやめっ……あっ、らめっ、どうにかなっちゃう！お兄ちゃん、どうにかなっちゃうのぉ……うっ、あんっ、うっふぉオオオオーーーーー！」
耳たぶに妹の舌の感触……俺は今、実の妹に耳たぶを舐め舐めペロンチョされている……！う、うぉおおお！何か変な声出しちゃったよっ！くそぉ！何だ！無駄にエロイぞコレェエエエ！？んぬっ、やばいっ！本当にどうにかなりそうだっ……！い、今思ったんだが……！普通こーゆーの逆だろこれぇ！？だけど、あぁ……気持ち、いい……です（／／／）……うぉおおおーーーーー！キメぇー！

今の俺最高にきめぇー！

「きゃはははははは！乳首クリクリぃ～♪乳首クリクリぃ～♪」クリクリ

「アッ、ちょっ、本当にだめっ……！双葉ぁ！俺のポッチを弄くるなぁ……！ひっ、何コレぇ！？何かくる！何かきちゃうよ！怖いッ！怖いよ！この感覚！いやっ！もうホントいやっ！こんなところで……！」ビクンビクン

「お兄ちゃんの……耳たぶおいし……（／／／）」はむはむ

「ちょっ、うー！あー！も、もうっ……！らめぇ！らめなのですぅー！許してぇー！おいちゃんが悪かったからぁ！…アッ、もっ、ぐぅ、へぁ！」ビクンビクン

俺は下半身のアレの爆発を必死に耐えているが双葉も栞も俺への性感帯（？）への攻撃を止めない……！うぉ、あぉ！ひぃいいい！も、もうっ……！

「アッ、ウッ、ひぅ、い、いやだっ！いやだぁあああああああああーーーーーーーーーー！イキタクナイ！イキタクナーーーーーイ！アッーーーーーー！」

クリスマスの夜。

俺は惨めで悲惨な思い出を残しました……もう、何も言えねぇ……

そして、あの後、俺の精も根も枯れ果てるまで弄られたあと双葉と栞はいきなりぶっ倒れスヤスヤとおねんねした。かくいう俺も店長も苺ちゃんも魔血子も昨日のバイトとパーティーの疲れで爆睡した

……そして俺はこの街にいる最後の朝を迎えることになる……

12月25日（4）

「「ロンッ！」」タンッ
「ぐぉおおおーーーーー！！！！！だ、ダブロンだとぉ！？俺のイーピンちんが放銃！？馬鹿にゃっ！？」
「悪いねぇロリコン、あたしの大四喜であんたはダブル役満振込みだ」
「てんちょーすみません～私も四暗刻単騎のイーピン待ちでダブル役満振込みです～」
「ぬぁあああ！ちょっ、嘘だろぉおおおお！？ダブロンでクアドラプル（※4重）役満振込み！？」
「あ……すいません、あの私もロンです……大三元」
「優梨子ちゃんも！？えっ、ちょっ、おまっ、嘘だろ！？ぎぇええええしかも役満ぅんんんーーーーー！？」
「ギャハハハ！トリロンでクインティプル（※5重）役満振込みって……ひぃいい、は、腹痛ぇ～！ど、どんな不幸男だよ！あ、アタシを笑い殺す気かいっ、ロリコン！」
「う、うるせっー！ありえねー！ありえねぇよこんなん！お、お前ら絶対イカサマしたろっ！？右助さんはこんなあからさまな不正は絶対認めんし屈しないぞぉおおおおーーーーーー！！！！！！！」
「おら！黙れハゲ！」ヒュッ
「ぐぁ！」バキッ

……一夜明けて朝。
俺は気だるい身体を起こして立ち上がり、レジの方へ行くと麻雀に

興じるロリコン店長と魔血子、それに苺ちゃんと優梨子ちゃんまでいた。朝っぱらから元気な連中だな……昨晩はあんだけハッスルしたのに。

「ぐぐぐっ、ぐっ……」

「クククッ……さぁ、これでアンタの点棒は余裕でとんだね。さて、罰ゲームだ。この中からどれか好きなのを選びな。？あたしの逆ヒモになる？あたしの犬になる？死ぬ、さぁ選べ」

何か悪魔な究極の選択肢出たっ！？やっぱり魔女だこのババァ！

「じゃあ、？で」

「……おい」

「司、お前の言いたいことはよく分かる……ワン。だが、何も言うな……キャゥウン……」

自らの首に首輪をはめ、寂しげな子犬のような瞳で俺を見つめる店長……語尾の鳴き声にどこか哀愁が漂う……

「何ごちゃごちゃ言ってんだいっ、お座りっ」ピシッ

「ギャブゥウウン！（／／／）」ゴロゴロ

魔血子は鞭で店長犬の尻を打つ。いきなり鞭で打たれた店長は痛みの衝動のせいか、店の床でのたうちまわっている……

「暴れるんじゃないよっ、犬ッ、犬ッ、犬ッ」ピシッパシッ

「キャゥン！キャフゥウウン！ハッ、ハッ！ハフッ！ウッ、ハッ、ハフゥン……（／／／）」ビクンビクンッ

暴れる店長犬に魔血子は容赦なく鞭を振り下ろす。最初は悲鳴を上

げていた店長犬だったが、その悲鳴は段々と卑猥な声に変化していく……何これ気持ち悪い。

「あはははーーー激写激写激写激写♪」カシャカシャカシャカシャ

苺ちゃんはその光景をデジカメで連写する……すっげぇ、楽しそうだ。うん、どうやらここにはまともなオツムを持っているヒューマンはいないようだ。

「……優梨子ちゃん」

「……はわわ」

「優梨子ちゃん？」

「……はっ！べべべべべ別に、司さんが犬仕様の店長さんの穴という穴をクンクン嗅いだりペロペロ舐めたりズッコンバッコンしたり二人で気持ちよく喘いだりしてるとか……！そ、そんな妄想は決してしてないです！ハイ！（／／／）」

優梨子ちゃんは頬を真っ赤に染め、そんなことをまくし立てるように言う。もうやだ、何なのこの人達。毒電波にでも侵されてるんじゃないのこの人達？僕もうおうち帰ってもいいー？俺はそんな異様な空間に嫌気が差し、新鮮な空気を吸おうと表に出ようとしたが……

「待ちなっ、オタニート！！！」ピシッ

「キャウゥウウン！！！（／／／）」ビクンッ

耳が劈くような魔血子の大声が俺の歩みを止めた。

「……だから俺はオタニートじゃねぇって何度も……」

「いいかい、……って悦んでんじゃあないよっ、駄犬ッ！」ピシッ

パシッ

「キャッフスゥッルーーーー！（／／／）」ビクンッビクンッ
「とりあえず、その鞭止めてやれよ……」
「アッ、はぁはぁ……いいんだ、司……俺が、悪かったんだ……あそこでイーピンが危険牌だと知りつつ、俺は打ったんだからな……自業自得さ。くぅ！あそこでイーピンがオッパイに見えたから……！でも後悔はしていない。それに、鞭も割と気持ちい…（／／／）」
「犬が人語を喋るんじゃあないよっ」ピシッ
「キャフゥウフフン！（／／／）」ビィクンッ

魔血子は再び、犬店長に鞭を振り下ろす。もうこの人達には何を言っても無駄かな。

「……オイ、魔血子。話ねぇんなら行くぞ？」
「行くんじゃないよッ、ほれ、これっ！」ピシッ
「ウォウッ！キャッフルゥーーーーー！（／／／）」ビクンッ

魔血子は俺に1枚のメモ用紙と5千円札を渡した。どうでもいいが、渡しながらプレイに興じるとは何とも器用なオッサンとオバハンだ。ホントどうでもいいことだが。

「……あ？何これ」
「アンタ今日の晩、この街を発つつもりだろ？最後のお別れ鍋パーティーでも開いてやっから、そこのメモに書いてある食材買ってきな」
「……何で知ってんの」
「アンタの顔を見てりゃあ分かるよ。そりゃアタシがした事がキッカケかもしれないけどさ、この先のアンタがどうなるか心配なんだよ……実家に帰ったら親父さんとお袋さんにちゃんと顔見せてちゃんとした仕事見つけなオタニート」
「……オタニートは余計だ」

余計なお世話だ、とは言えなかった。
目を見れば分かる、魔血子は本気で俺の心配をしてくれている……正直、年下の女にごもっともな事を言われるのは男としてのプライドがアォ！な感じだが俺がそれに対して文句を言える立場でもないし、するつもりなど毛頭無い。そうだ、俺は今日の晩この街を出て実家に帰るつもりだ。単に金が無いから、という理由ではない。その理由は今、魔血子が代弁してくれた通りだ。正直自分でもこれからやっていける自信はあまり無い。だが、魔血子の台詞で何か重い気持ちが少し軽くなったような気がする……今まで、住居者としての俺と大家としての魔血子の関係はすこぶる悪かったが、本当の意味で魔血子を嫌いになったことは1度も無い。むしろ、裏表無く、ズバッと自分の気持ちを伝える魔血子に対して俺は……

「なっ、何、ニヤニヤしてんだいっ！買い物にとっとこ行け太郎っ！」ピシッパシッピシッパシッ
「ぎぁー！いてぇ！わっ、わーったからその鞭はやめてぇ！にゃめてェエエエ！」

嫌いだっ！やっぱ嫌いだこのクソババァ！チッキショウ！今、ちょっと良い事思った俺が馬鹿だった！年増だしっ！ヤニくせぇしっ！すぐ暴力に走るしっ！おっぱいでっけぇし！くびれがちょっと美しいとか思ってみたり！ボンッキュボンッだしっ！あっ、でもでも、ちょっと優しいところがあったり無かったり！べ、別に……あ、あんたなんか……あんたなんかっ！あんたなんか大ッ嫌いなんだからぁーーーーーーーーー！そんな恋する乙女ちっくなことを思いつつ、俺はケーキ屋から外に出て行った。

「……」ニヤニヤ
「……何、ほくそ笑んでんだいっ馬鹿犬ッ！アンタの罰ゲームはま

だまだこれからだよっ！生ケツ出しなっ！絶頂フルコースはまだまだこれからだよっ！」ピシッ
「はぁう！（／／／）」ビクッ
「あははは、魔血子さん照れ隠ししてるー」
「ふふ、もう……お姉ちゃん、素直じゃないんだから……」

ケーキ屋から外に出ると雪が降り積もり、街の殆どは白一色に染まっていた。降り積もる、とは言っても昨夜がピークだったようで今はそんなに雪は降っていない。……だが、そこそこ積もっているので歩いていると足はズボッウボボボボッと雪に沈んでいき正直歩きづらい。息を吐くと思いっきり白いのが出ること出ること……外温が相当低い事を如実に表している……ふふっ、だが……今の俺はママ特製あったかポッカポカ手編みセーターを装備しているから無敵なんだぜッ！……ごめん、キモイとかマザコンとか思わないでちょーだい。本当にあったかポッカポカなんだからこれ……

「うーっ！がるるるるる……がるっー！」
「ふっー！ふっー…キシャァアアアー！」

ケーキ屋の近くを繁華街に向かって歩いているとかぁいらしい獣の声が聞こえてきた。その声の方に向くと双葉と栞が睨みあって珍獣ゴッコしていた……こんな寒い中二人して何やってんだあいつら……

「……お前ら何やってんの？」
「あっ、司さん！うぅ、聞いて下さい！司さん！」ギュ～
「お兄ちゃん！？ちょうどよかった！聞いてよ！お兄ちゃん！」ギ

ユー

「だぁあああ！？こらぁ！二人して俺のセーターを掴むなぁ！伸びる！本当にのび太君になっちゃうからぁ！やめてぇ！やっちょっだめっ！本当にらめぇ！これ、ママンが汗水たらして一生懸命編んでくれたお気に入りのバナナ柄がセンス的に終わってるセーターなんだからぁーーーーー！」

「うぅ～～～！良いから聞いて下さいよぅ！私の話を聞いてくれない司さんなんてただのマザロリオタコンですぅ！」ギリギリギリ……

「お兄ちゃん！私とお母さんのセーターのどっちが大事なの！セーター！？うー！お兄ちゃんなんて死んじゃぇ！それから私も死んでお兄ちゃんを永遠に私のモノにするぅー！！！」ギリギリギリ……

「ぎゃふぁあああ！ちょっ……ぐっ、シャレに……ぐぐぐぐっ……」ギリギリギリ……

双葉と栞は二人がかりで俺の首を締めてくる……うっ、ぁ……意識が……遠のいて……

「……っ、ぁ」ギリギリ……

「……お兄ちゃん？」ギリギリ……

「……司さん？」ギリギリ……

「……」ガクッ、バタン

「「あ……」」

マザコンＥＮＤ　『ママンの手編みセーターを掴んで……』

ヒント：君は選ぶものを間違えてしまった……ママン好きスキーなのか、妹好きスキーなのか……選択肢に戻ってもう一度やり直そ

う。でも現実(リアル)はセーブできないのですー……んなわけあるかいっ！
というわけで次回に続く。

12月25日（5）

「アー、ンー？……アッハーン？分かります？ね、君たち？これ軽く、殺人未遂ですよー？」
「あぅ……ごめんなさいです……うぅ、ちめたいです……」
「うぅ……ごめん、なさい……」

あれから無事、生還した俺は危うく俺を昇天オァー（？）させかけた双葉と栞を雪の上で正座させ説教に励んでいた。特に生足丸出しのミニスカサンタのチミ達にとって雪の上での正座プレイは辛かろうっ！辛かろうっ！いっひひひ！ひぃーはっはははははーーーーー！……あー、んーゴホン。

「うわぁ……」

何やら妹サンが意味ありげな目で俺を凝視する。
君のその俺を見つめる意味ありげな表情と何気ない台詞で俺は全てを悟ったよ。ふんっ、平気で実兄である俺を侮辱しおってアマちんが……今貴様の立場は♂の膝元でおち（自主☆／（＾ｏ＾）／☆奇声）んをペロペロしゃぶるメス豚共と同格ということを理解しておらんのだな。そんな悪い子にはおっちゃん、おちおきしちゃるでぇー！

「ふんっ、ふんっ、ふんふんでぃふぇんす！」バサッ、バサッ
「ちょっ……お兄ちゃんっ？！私の服ひっぱらないでよ！……って、そんな雪をかき集めてな、何を……ま、まさか……」
「……」にやぁ～
「……あっ、や……やめてっ……お、お願いお兄ちゃひゃうぅぅぅぅうぅーーーーー！ちめたいぃいいいーーーーー！」ジタバタ

ふはははははぁーーーーー！どうだぁ！？背中から入れられる大量の雪は地肌に響いてちめたかろうっ！ちめたかろうっ！兄を侮辱した罰だっ！さぁ苦しめっ！苦しめっ！そしてその表情を俺に向けるのだぁーん！……誰だ今やってること結構しょっぼいなとか思った奴。ちょっとおいちゃんの前にいらっしゃーいっ、若い女の子だけ。

「ほれほれっ、ちめたかろ～ちめたかろ～」グリグリ
「やっ、やぁ……服の上から背中をグリグリしないで……！つ、つめたいよー！ひぃいん！」ジタバタジタバタ
「こちょこちょ～～～」
「ひゃっ、あはははははーーーーー！やっ、やめっ……あはっ。ひぃいいあはははははは！！！！！！やめてぇ、あはははははは！！！！！！」ジッタバッタジッタバッタ

ますます妹いぢりにヒートアップした俺は脇の下をこちょこちょこちょりんこする。俺のゴッドフィンガァーの為せる技なのか、妹ちんは真っ赤な顔で涙目になって暴れる。ジッタバッタする～なよ～♪

「つ、司さん……それはやり過ぎでは……？というか普通にセクハラ……」
「なぬぃ……？貴様ぁ、只のペチャロリのくせに俺に意見するってのか？あーん？」
「わっ、私はロリでもペチャでも無いですっーーー！（／／／）」
「シャシャシャラーーップッププーーー！今の貴様らは俺に刃向

かえる立場じゃないのですぅー！やーいっ！ペチャロリ！ぺっタンロリータ！幼稚園に戻って人生やり直しなっさーーいっ！」
「きぃー！ひどいっ！ひどいですっ！司さん見損ないましたぁ！私の気にしてることをずばずばと言いやがりましたねー！？私、本っ気で怒りましたっ！そしてお腹すきましたっ！腹ペコちゃんですっ！ぷんぷんですっ！」

はっはっはっ、何本気で切れちゃってんだろうねこのロリ神は？貴様が切れたところで何が出来るというのか。俺に散々いぢりにいぢられて挙句の果てには泣いて許しを乞うという展開が見え見えではないか……はっはっはっ、そしてそこのディスプレイで眺めている君は何えっちぃイベントを期待しているんですかねぇ？……ごめんなさい、おいちゃんちょっと調子乗りすぎました。まぁ気を取り直して目の前にいるロリっちを調教……むっ！？背後から何やら殺気っ！？振り向くとそこには……！

「お、に、い、ちゃ～～～ん……？」プルプル……

スーパーサ●ヤ人しっおーりがいました。
うぉっ、うぅおおお、おぉ……まさかリアルで拝めるなんて……おいちゃんもしかしてラッキーボーイ？ん？いやこの場合、バッドボーイか？とぅばーっど！ん？ん？ん？あれ？これ……もしかしてもしかするともしかしなくても死亡フラグってやつ？なのかな？やっほほーい／（＾０＾）／（↑司さんの心境）
「「ばかぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」」バッキィイイイ

「……えーっと、白菜、長ネギ、椎茸、マロニーちゃん……」
「……」トコトコ
「それに豆腐に豚肉に、ってお兄ちゃんっ！さっさときびきび歩くっ！」バキッ
「ハッ、ハーイ！イエッサー！サー！シオーリー！」ビクッ

……あれから逆に調教されちった俺は魔血子に頼まれていた鍋パーティーの材料を買うために繁華街にあるスーパーに来ている。双葉と栞は俺に軽蔑の眼差しを向けながらも一緒にスーパーに買い物に来てくれたんだ。

「勘違いしないでよお兄ちゃん。別にお兄ちゃんが可哀想だとかそんなんで手伝うんじゃないから。お兄ちゃんがお使い行くと鍋パーティーが闇鍋パーティーになっちゃうかもしれないから……」
「君はえすぱぁーちゃんですか？はじめてのおつかいじゃないんだからそんな変なもん買わない……」
「助平のお兄ちゃんは黙ってて」
「そうだそうだー！すけとうだらの司さんは黙っててください－」
「……」

くそぉ……ロリモドキめぇ……調子に乗りおってぇ……！く、屈辱だ。いつかこの怨みをハラサンサムニダ。

「ほらっ、お兄ちゃん！次はお肉売り場にゴーだよ！」バキッ
「うぉ！し、尻を蹴るなぁ！栞ぃ！そんなピンポイントで尻の谷を蹴られると感じちまうじゃねぇかコラァ！」
「キモイキモイキモイッ！さっさといくっ！」バキッバキッ
「あっ、のぉおおおおーーーーー！」

言葉は乱暴ではあるもののさっきより蹴りは気持ちいぃじゃなくて弱くなっている気がする。ちょっとは許してくれたのか？まぁ、さっきの俺も悪いっていうかかなり俺が悪いとは思うんだが……まぁ、少し機嫌を取り戻してくれて良かった。兄として本当に妹の嫌がることはしたくないからな、手遅れな気もするが。……ん、何か背中に変な視線を感じるが……まぁいいか。

「……つまんないです」

「チーカマ様は世界一ぃいいいいーーーーー！！！！！」
「やめてよお兄ちゃん！何スーパーで恥ずかしいこと言ってんの！？」
「だってだってだってぇー！僕、チーカマ食べたいもん！お酒のあてにするんだもん！食べたいもん！食べたいもぉおおおおん！買って！買って！買って！買って！買ってぇ！買ってくれなきゃここで呻いちゃうんだもぉおおおおおん！」ジタバタ
「もっ、もぉー！だめったらダメ！お兄ちゃん子供！？本当に我慢してよもぅー……」
「あの……チーカマって、オカマさんですか？」
「ばっかもぉおおおおん！」
「ひっ、いっ、いきなり怒鳴らないでくださいよぉー！」
「チーカマはなぁ……！チーカマは偉大な食いモンなんだぞこらぁ！そして何よりチーカマの最大の魅力つーのはだなぁ……！一人で食うとやけにうまいっ！酒にめちゃ合う！一人で食い終わった後の一人暮らしの寂しさがチョー味わえる人類至高のおつまみんぐなん

だぞこらぁ！？さぁ！敬え！チーカマ様を崇めよ！キェー！」
「えっと……栞さん、この人は何を言ってるんですか？（汗）」
「双葉ちゃん、いちいちお兄ちゃんの言う事に付き合っちゃだめだよ。お兄ちゃん基本、頭の中は子供だから」

まったく、失礼なやつらだな。だが、チーカマは本当にうまいですぞ？そこにいる君も食ってみんしゃい。エル！オー！ブイ！イー！チーカマＬＯＶＥ！エル！オー！ブイ！イー！チーカマＬＯＶＥ！

「双葉、お前チーカマ馬鹿にしてるだろ。こんな話知ってるか？チーカマは豊乳になるのに効果てきめんだってことよ」
「っ！ほっ、ほんとですかっ！？」

双葉は俺の言葉を聞くと途端にキラキラした目で俺を見つめてくる。ふふん、ペッタンちゃんの君には豊乳は素敵ワードであることは俺が知っているからなっ！さて、イタズラ、イタズラズラー

「それに実は食べるだけじゃだめなんだ……豊乳になるにはチーカマ様を敬わなければならぬ」
「ち、チーカマ様……ですねっ！？そ、その方法って何ですかっ！？」
「あぁ……それはな、向こうのレジ前で『チーカマを制する者は世界を制するー！』って大声で１００回叫んだ後、旧プリ●ュアオープニングソングを大声で歌うんだ……さすればチーカマ様が豊乳の道へいざなうであろう……」
「わ、わかりましたっ！行って来ます！あ……そ、それとっありがとうございます！チーカマ伝道師さん！」タッタッタッ……
「うむ、そなたに永遠に幸あることを誓えん、キェー！」

そして俺のありがたき経典を聞いた双葉はそのままスーパーのレジ

前へ駆けて行った。実にかぁいくて面白い奴だ。

「お兄ちゃんのいじめっ子……」

「まぁいいじゃん、あいつ何だかんだ言ってもかぁいいし」

「……」ギュウ

「いてぇ！しっおーりサン！？何で俺の太もも抓るのぉおおおおおーーーーー！？」

「……何でもない」ギュウウウ

「ギャァアア！それ何でもあるっ！それ何でもあるからさぁあああああーーーー！」

『チーカマを制する者は世界を制するー！』

数十秒後、遠くから双葉さんのノリノリな声が聞こえてきたのは言うまでもない。

12月25日（6）

「司さんひどいですっひどいですっひどいですっーーー！（泣）」
ポカポカ

スーパーで鍋の材料を買い終えると、双葉が真っ赤な顔して泣きそうな声でそう言いながら俺にニャンニャンぱんちをお見舞いしてきた。

「ひどいのはチミのここだろ、こーこっ！」ツンツン

俺はそう言いながら双葉の頭を軽く小突いた。つまりはノータリィーンってことさ。

「い、言うに事欠いてなんてこと言うんですかぁ！ひどいっ！ひどすきますっ！司さん！」
「やかましいよロリ、だいたいなぁ……お前あれ本気で信じてたの？」

あれとはつまり、あれさ。あれ……あれ？えーっと、あるぇー何だったっけ？おいちゃん忘れちった、てへっ☆

「忘れないで下さいよぉー！チーカマのことですっ！司さんは私を騙しましたっ！今思えば人前であんな恥ずかしい台詞言っても全然、おっきくなりませんでしたっ！ひどいですっ！このチーカマペテン師！略してカマ師！」
「やめろ略すな。ったく、いつまでも終わった事をグダグダ言ってもしゃあねぇじゃねぇか。割り切れ、な？帰ってメシ食ってクソして風呂入って寝りゃあ今日の些末な出来事なんか綺麗さっぱりと忘

れるさ。人間割りきりが大事だにょ～ん」
「しゃあなくないですっ！ひ、人事だと思ってぇー！当事者のクセになんでそんな偉そうなんですかぁー！……うぅ、周りの方々達には私どんな目で見られていたのでしょうか……私もうあのスーパーには二度と行けないですっ……」
「そりゃあ、完全に痛女だろ。首領(ドン)ク〇ークもびっくらコンなドン引き羞恥プレイだよ。お前見たろ？あのおば様方の何とも言えない表情。僧侶みたいな人がお前の頭の上に小銭乗っけてたろ、ありゃあ完全に哀れみの念を抱かれてるよ。お前オワタな、色んな意味で」
「うわぁあああああーーーーーーん！思い出させないで下さいぃぃぃぃぃーーーーーー！（泣）」

双葉はそう喚きながらその場で頭を抱えて蹲った。ふふん、そうよぉこのような俺が双葉を弄る、双葉が俺に弄られるという弄り弄られる関係が俺と双葉の関係なのさぁー！今、いい歳こいて何キモイこと考えちゃってんの？とか思ったろ？別にいいのさ、とうに諦めてるし。何って？人生だよっ、ワスの人生っ！あぁーん？わりぃだスかコラァ！しまった、ちょっとおいちゃん興奮したからいな〇っぺ大将入っちまったじゃないだスか。

「お兄ちゃん悪ノリしすぎ」

今までの俺と双葉の会話の一部始終を聞きいてらしゃった妹様は俺をジト目で見つめる。なぁに、もう嫉妬かい？まいぷりちーしすたぁーちん？

「キモイ」パチン
「うがぁー！いってぇ！い、いきなり何しやがるっ！兄である俺様の神聖なる柔肌頬に『キモイ』の一言の数秒後にハイ、パチーン！キタッーきょうれつぅー♪なビンタを送るたぁー！……お前はあれかっ！？ゆとりかっ！？ＤＱＮかっ！？それともツンデレかっ！その行為はこの後に繋がる『ツン』から『デレ』へと励起する一種のデモンストレーションかぁ！クラァー！それとも何かっ！？お前は俺が『べらＭ（↑べらぼうにＭの略語、つまりはすごくアウチな行為に対してハァハァ悦ぶ属性の人のこと）』であることを知ってて打ってくれたのかぁ！よぅし、受けて立ってやろうじゃねぇかぁ！その挑戦！但し言っとくがなぁ……次からの攻撃は主に下半ｓ」
「うるさいし長いし、ほんとキモイよお兄ちゃん。調子に乗らなければまともな人なのに、調子に乗るとホントダメダメな人だよねお兄ちゃんって……やっぱり翼お兄ちゃんとお母さんとお父さんの血が色濃く残ってるよね……はぁー」
「……す、すみません」シュボーン…

何か栞に俺にとって地味に辛辣な事を言われてシュンとした俺は素直に謝った。な、何だろう……何故か分からんが今まで言われた暴言の中で一番胸に突き刺さったぞ……？馬鹿な、何を言われても悦びに昇華させる……というのは嘘でベニヤ板の心を持つ俺がこんなショックを受けるなんて……やっぱい、１０分くらい立ち直れなさそうって早いなオイッ！とかいうノリツッコミはなし。

「（うぅ～、お兄ちゃんあんなに双葉ちゃんと楽しそうに喋ってデレデレしちゃってぇ……！どうせ私は正ヒロインに隠れる日陰な妹ですよぉーだっ！）」ギュ～
「あだっ、あだだだっ！栞ぃ！俺の乳首を抓るなぁ！……アッ」ビクンッ

「ファミチキおいしいですー」はむはむ
「だよねー、この油がギトギトしてなくて食べやすいのがいいよね、双葉ちゃん」まむまむ
「……」
俺はロリ様もとい双葉様と妹様に失礼な事をした御礼としてファミチキを奢らされた。……ま、安くついたからいいけれどな。
「ファミチキウマー」はみゅはみゅ
「鳥さんウマー」まみゅまみゅ
「……太るぞお前ら」ボソッ
バッチコーイ！（×2）
「……」ジンジン
「ウマー」
「馬ー」
……打たれた。親にも打たれた事ないのにぃ！……マザなんたらかんたらコンとかではないのであしからず。
「……さて、買うもん買ったしそろそろケーキ屋に戻るか」

路上に雪が残る街中を3人で歩いている途中、俺は双葉と栞にそう言った。時刻は夕方の5：00……そろそろ仕度しねぇと……皆に、世話になった奴に挨拶しねぇとな……いきなりでびっくりするかもしれないが魔血子、魔鬼じゃなくて優梨子ちゃん、苺ちゃん、店長……栞は一緒に実家に帰るから別として……それに、今俺の横に居るコイツ……双葉も。……その後のことは、魔血子に任せたが、……いや、何考えてんだ俺は。……だめだ、決めただろ？俺は……

「……え、あ……」

俺の言葉を聞いた双葉は何処か寂しげな表情を見せる。……まだ遊び足りないのか、しかし……ん？服の袖を引っ張られる感触がした。そこに目を向けると……

「お兄ーちゃん、双葉ちゃん」

「お、お……？」

「あ……」

栞は俺の右手と双葉の左手を動かし握手させる。そして、栞は栞で俺の反対側の左手と自分の右手で握手する。……何だこの夕日に向かって歩き出す父子家庭で二人の子持ちっぽい演出を匂わせる構図は？

「……双葉ちゃん、お兄ちゃん……帰ろ？」

「……お、おう、だな……双葉もいい……か？」

「……ハイッ、エヘヘ……」

双葉は何故か嬉しそうな表情で微笑み、俺の手をギュッと握る。……栞も何だか少し嬉しそうなんだが、何だ？意味が分からない……

ま、いいか。そして俺達は茜色に染まる雪の街をケーキ屋に向かって歩いて行った。

この時、俺はまだ気付いていなかった。
この栞の行動と双葉の態度が何を意味するのかをーーー……

12月25日（7）

「おい、チェリーボーイ司」
「何だ、アブノーマル薄毛」

あれから双葉と栞と一緒にケーキ屋に帰り、さっそく店の奥の居間で皆で鍋の準備をしていると一休さん仕様の店長が俺を少し睨みつけながら俺を呼んだ。

「これは何だ？あれか？一種の俺への当て付けか何かか？」

店長は大方殆どの具材が入った鍋を指してそう言う。ちなみに鍋のスープは優梨子ちゃんの愛情が詰まった特製の鶏がらスープだ。

「なんだい、あたしの妹の料理にケチつけるってのかい？おぉ？ん？オルァ、クソハゲ？ちょっと表出るかい？ハァー……」グイッ

魔血子は店長の胸倉を掴み上げ、タバコの副流煙を店長の顔面に吹きつけた。もうやってることがそこいらのコンビニでウンコ座りでたむろっているチンピラと大差ねぇじゃねぇか。

「おうおう！ちょっ、まっ……ち、違げぇよぅ！別に俺ぁ優梨子ちゃんの味に文句あるわけじゃねぇよぅ！」
「あー？」

店長はちょっと泣きそうな情けない声で必死に弁解し始める。どうでもいいけど、優梨子ちゃんの味って何か響きがエロイな。

「何でこんな鍋の具材がワカメとかひじきとかトロロ昆布とか……

海藻系が多いんだってことだよぅ！ハゲの俺への哀れみかぁ！？同情かぁ！？おいっ！司っ！どうなんだこらぁ答えてみろおらぁあああああーーーーーー！！！！！！！」

店長は魔血子に胸倉を掴まれながらも俺の方に向き、必死に喚く。内心は魔血子のオーラにビックビクして今にも失禁しそうなくらいハムスターのようにぷるぷる怯えてんだろうが、それを誤魔化すために大声で喚いてんだろうな。だからと言って俺に当たるのは筋違いだ。

「知るかよ、鍋の具材は魔血子に頼まれて買ってきたんだから俺に文句言うなハゲ」

「な、なにぃ！？ち、ちみぃ！そ、そんな……苦し紛れな嘘をつくなんて男として恥ずかしくないのですか！？」

「どうして俺がそんなところで苦し紛れの嘘をつかないとならねぇんだよ。あと何でお前は敬語なんだ」

「おう、そうだよ。アタシが司に頼んだんだよ。つまり、それは何か？アタシの飯が食えないと？」ポキポキッ

「ひっ、ち、違いますぅ！」ビクンッ

何かオジサンとオバサンがじゃれ合っている内にメシ食お、メシメシー腹減ったー。

「おう、ハゲ。やっぱテメェ面貸せ、そして表出ろ。アタシがたっぷり可愛がってやるからよぉー」グイッ

「おっ、ちょっ、まっ……うぉおおおおおおおおらめぇえええええええーーーーーー！！！！！！！」ズルズル……

「「「「「いただきまーす」」」」」

ケーキ屋から魔物とケダモノが消え、少し平和になったところで食事タイムスタート。ムフフ……なんせ今日の晩メシは優梨子ちゃんの愛情がたっぷりねっぷりねっちょり詰まった鍋料理……興奮せずにはいられないぜっ！

「はふっはふっ、おっ、おいひしでふぅー！こ、このエビがプリップリッしてて……最高にうまいでふーーーーーー！！！！！！！」ハグハグ

何やら俺の隣から珍獣（ロリモドキ）の喧しい声が聞こえてくるが、ふふっ、そんなもんは雑音雑音……さぁ、さっそくまずはこの優梨子ちゃんが剥いたエビちんを味わお……

「せんぱーい？さっきから何でニヤニヤしてるんですかー？」

俺がエビちんを口に運ぼうとしたところ苺ちゃんが俺の顔を見ながら不思議そうな顔でそんな事を聞いてきた。ぬっ、しまった……俺こと純情少年ＴＵ☆ＫＡ☆ＳＡきゅんの表情は隠し切れないってことか。誰ですか今おめぇは少年じゃねぇだろバーローとかいったお子様は？うるせぇよ、今の俺は外見は大人でも心は清純なボォイなんだよブァー

「あ、あの……司さん？もしかして……お口に合わなかったでしょうか……？」ショボンヌ

同じく俺の表情から何か察したのか優梨子ちゃんは顔を伏せ、寂し

げな表情を浮かべる。優梨子ちゃん？まだ僕ちゃんは君の料理をお口で味わってないですヨン？といってもこのままではまずい。

「ち、違うよっ！うまそうだよっ、優梨子ちゃん！まだ口で味わってないから分かんないけど……！ほらっ、見てよ！今から優梨子ちゃんが剥いたこの優梨子ちゃんのエキスがたっぷり染みたプリップリのエビちんを俺の舌でねっぷり舐め舐めして……この舌でじっくり優梨子ちゃんを味わうからぁ！だからそんなに落ち込まな」

「お兄ちゃん？！何言ってんの！？」パッチコーン

「うがぁ！！！」

必死に弁解していると妹様からのドギツイビンタが飛んできた。いきなりのビンタに華麗なる一族の俺はひらりと華麗に避け……れるわけもなくそのまま頬にモロ直撃した。

「いきなり何しやがるっ！？やっぱりお前はあれかっ、ツンデレか！？なら早くデレを見せやがれチッキショォー！なら萌えてやらぁー！」

「ワケ分かんないこと言わないでよっ！それよりお兄ちゃん！何、口走ってんの！？それは普通にセクハラだよ！？」

「あ……？何って、お前……あ」

「……（／／／）」

ジンジン痛む頬を手で押さえながら優梨子ちゃんを見ると顔を伏せモジモジしていた。……よく表情は見えないけどあれは恥ずかしがっている。おそらく優梨子ちゃんのお顔は茹蛸のよぉに真っ赤なのだろう。

「泣く子も黙るまごうことなきセクハラですね～、せんぱーい」

「……ご、ごめん優梨子ちゃん。い、いただきマッサル……」

「……はい、どうぞ（／／／）」
「……もぉ、お兄ちゃんったら……」
……何か変な空気になっちった。ひょっとして俺っ？！俺のせいなのかコレ！？（汗）

「ハグハグ、お肉最高ですっ！ムシャムシャ、カニさんもウマーですぅ！」
「お前、さっきから肉とかエビとかカニとか高いもんばっか食ってんじゃねぇか。ほらっ、ワカメちゃんとかトロロ昆布さんとかひじきくんも食え」どばどばぁー
「あっ、あーーー！私の受け皿にグロくてえげつないものがいっぱいにぃ！うぅ！やめてくださぁい！司さん！これ以上私の受け皿をバイオハザード状態にするのはやめてくださぁい！」
「やかましいわ、それにお前あれだろ？主に下半身がツルッツルだろ？海藻ちゃん達をドンドン食って生やしなちゃいなさい」どばどばぁー
「わ、私はツルッツルじゃないですぅ！（／／／）って、あぁ！追加投入するのやめてくださぁい！」
「だからお兄ちゃん、それも普通にセクハラ……」

とまぁ、ちょっと変な空気になったところでそのまま尾を引くわけも無く皆で喋くりながら食事を楽しんでいますよえぇもちろん。そして外から帰ってきた魔血子と無数の傷がついてボロボロになった店長も参加し、ますます皆で囲む鍋対談（？）はヒートアップしていく。

「優梨子ちゃん、そこの豆腐取ってくれねぇか？」
「あ、ハイ。どうぞ、店長さん」
「おぉ、すまんね。……ヌフフ」
「あー、パクッ」
「……ってあぁ！な、何しやがるっ！クソババァ！せ、せっかく優梨子ちゃんが口をつけた箸で取った豆腐をぉお！？優梨子ちゃんとの間接ちゅーを楽しめたのに！クソババァ！何の怨みがあっ」
ドスッバキバッキボッキボキ
そのまま口を閉ざしときゃあ言いものを……店長は余計な事を言ったせいで魔血子に調教を受ける羽目となった。しかし、知り合ってあまり間もないのにまぁ随分と仲良くなったもんだ。見ている分は微笑ましいよ。悪酔いで暴れられるよりはよっぽどマシだ。
「モグモグ……そう言えば苺ちゃん、家に電話しなくてもいいの？ご両親は心配してるんじゃないか？」
俺はシャキシャキの白菜を頬張りながらふと疑問に思ったことを苺ちゃんに尋ねてみた。俺や栞はもとよりお袋や親父の了承を得てここに来てるし、魔血子や優梨子ちゃんはあのアパートの大家の部屋で二人暮らしだし、店長は当然独身だし、双葉は……どうなんだ？謎だが、まぁ俺と今日を含めて４日間過ごしているから大丈夫……なんだろう。しかし、残った苺ちゃんはどうなんだろう？多分、ご両親もいるのだろうから心配しているのではなかろうか？
「ふぇ？あぁ、大丈夫ですよー。私、高校生になって実家から上京してきたんでマンションで一人暮らしなんですよん」
「あぁ、そう……って、えぇー！？初耳だよそれっ！？」

「えっへん、太古のロマンですよねー先輩」

いやどの辺が太古なのか分からんが、すごいな……一人暮らしっつーのは思っている以上に金が掛かる。毎月の家賃はもちろんの事、電気代、ガス代、水道代、その他諸々……まぁ、しっかりとした職業に就いている人はそこそこやっていけるんだろうけど。しかし、苺ちゃんは高校生だ。バイトでまかなっていくしかないのか……あぁ、だからケーキ屋とファミレスの掛け持ちか……しかし、たかがバイトじゃしれてるだろう。良くてもギリギリの生活を強いられているんじゃないだろうか？よくご両親は許したな……とまぁ、他人の俺がこれ以上踏み込むのはちょっとよそう。

「……すごいよ苺ちゃん、偉い偉い」なでなで

素直に偉いなーと思った俺は自然と苺ちゃんの頭に手をやり撫で撫でしていた。べ、別に一人暮らしの自分が両親のお金を当てにしてたから情けなく感じたとかそういうことじゃないんだからねっ！？（／／／）

「……やっ、やだなぁ～先輩。別に私苦労なんかしてないですし、そ、それに……格安アパートで暮らしてますから豪遊ですよ、豪遊、あは、あはは……」

苺ちゃんは口ではそういうものの少しいつもの元気な様子とは違って見えた。……無理、してるんだろうな……俺とは大違いだ。俺はさらに頭を撫で撫でする。

「……せ、先輩（／／／）」

「……ん？」

撫で撫でし過ぎたからだろうか、苺ちゃんの頬は少し赤く染まっていた。でもちょっといつもと様子が違う苺ちゃんもかぁいいなぁ……だからおいちゃんもっと撫で撫でしちゃう！とまぁ、おふざけはほどほどにして……べ、別に下心なんか無いんだからねっ！？（／／／）

「……じゃあ、先輩が私を養ってくれますか？（／／／）」

「……え？」

苺ちゃんはちょっと上目使いで俺を見ながらそんなことを仰る。……うぇ、ちょっ、コレマジか……！？ど、どうしよう……苺ちゃん本気でそう思って……いやいや、苺ちゃんのことだから冗談……でもこの瞳はマジモンだっ！う、うわぁー俺、ちょっと調子乗りすぎたかなぁ！し、しかし……ここは大人として寛大な心を見せるところではないだろうかっ！？だ、だが、俺はもう……帰え……

「……ぷっ、あはははーーー！先輩！何、本気にしてるんですか！？真剣な顔して悩む先輩かぁいい♪」

「えっ、ちょっ、えぇえええーーーーー！？嘘っ、それやっぱり嘘なのぉ苺ちゃん！？」

「うーそでーすよーん♪あっ、でも一人暮らしっていうのはホントですよ？先輩、本気で考え始めるから私冷や冷やしましたよー」

「こ、こぉのぉ！またいたいけな大人をからかったなぁー！もう許さんとですよー！？今度は頭じゃなくておっぱいを撫で撫でしてやるー！こっちに来なさいキェー！

「きゃー♪先輩に犯されるぅー♪」

「お兄ちゃ～～～ん？」ゴゴゴゴ……

苺ちゃんの後を追いかけようとすると俺の目の前に背中にどす黒いオーラを携えた妹様が仁王立ちで俺の行く手をふさいでいた。

「……あっ、えっ、ちょっ、栞様？も、もぉ～冗談に決まってるじゃあ～りませんかぁ～へへっ、ここは一つ許してってあんぎゃぁあああああああああーーーーーーー！！！！！！！！」

「……先輩、向こうに帰っても頑張ってくださいね」

苺は司が栞に制裁を受けている最中、一人そんなことを呟いた。それは魔血子しか知りえぬはずの司の実家への帰還を示唆するものであった。

12月25日（8）

「うぅ、もう私のお腹はパンパンマンです……」

数時間後、鍋の具材は大方なくなり、皆は一息ついてのほほんタイムを堪能している。双葉は俺の隣でぐでぇ～っと横になってお腹を押さえている。

「なんれすかぁーなんれすかぁーチミのこの土手っ腹は？この腹は？お前は食いすぎだ馬鹿ちん。それと食った後に横になると牛になるぞーくん」サワサワ

「ひゃうっ！つ、司さんッ、私のお腹に触らないで下さいっ！（／／／）」

「これはあれだ、ここの腹を愛撫してやるとな、松子デラッ●スみたいなナイスバデェになるんだ」サワサワ

「ほ、本当ですかっ？！な、ならどーんと来いですっ！どーんっ！」

ヌフフ、言ったな？言っちゃったねチミ？

なら、おいちゃんの伝説のゴッドフィンガァーを存分に駆使してチミの真っ白でたっぷんたっぷんなその柔らかなお肉を揉んだり、摘んだり、へその緒舐めちゃったり……

「……お、に、い、様？」ギリギリ……

……するわけナイデチョー！？チミィ！い、いい加減にしたまへチミ達！そっ、そそそんなピンクであっはんばかぁんなプレイがご所望ならフー族にいきなちゃいっ！フー族にっ！べ、別に俺の肩に乗せた妹ちゃまの手が今にも肩肉を抉り取る勢いで力を込められたからとかそんな短絡的な理由でプレイを中断したとかじゃねぇーもん

ねぇー！

「司さんっ、早く私のぽんぽんを撫で撫でしてくださいー！」

「……」ニコ

「……お前の、チラッ……ぽんぽんは撫で撫でしませんのだ。チラッチラッ……自分で撫で撫でしやがれなのだー、チラチラッ」

「そんな～、あぅ」

双葉は俺の返答でションボリちゃんになっていた。

「司先輩は何でハム太●の口調で仕切りに妹さんの顔色を窺っているんですかー？」

苺ちゃん、それはね。あだるてぇの事情と言うものだよと心の中で呟いておく。すると苺ちゃんは俺の心中を察したのかどうか分からんが、『あぁ、了解です～』と言いながら意味深な笑みを浮かべた。決して、その……妹様がビックビクでションベン漏れそうなくらいこぁい何て事はなくてだな……誰だ今、小悪党とか言ったの。いいじゃねぇか小悪党。かぁいいじゃん。萌えるじゃん。おっきするじゃん。……うん、そこで素直に納得するなよ良い子のリアルぴーぽー君達よ。

「おらおら、アンタら何ぼけ～っとくつろいでんだい。晩餐会はまだまだこれからだよ」

すると魔血子は両手で赤い布で覆われた何かを抱えて鍋の方に近づ

いてきた。

「煮詰まった残りの鍋のダシ汁にごはんを入れて雑炊にするんだよねお姉ちゃん？」

「ほう……鍋の定番の最後の締めか。だがそれがいい」

「……！雑炊ですかっ！ちょっとお腹が苦しいですけどまだまだどんとこいですっ！べっぱらですー！」

目ざとく雑炊に反応した双葉は起き上がり、キラキラした目で締めのごはんが投入されるであろう鍋を見つめる。それはべっぱらとは言わない、とつっこもうと思ったがまぁこんなに嬉しそうだしいいか。

「あぁ、そんなもんだよ」だばだばぁー

魔血子はそう言いながら、既に煮詰まったダシ汁が入った鍋に黒っぽい……毒々しい色合いの液体を大量に注ぎ始める。……あれ？何かおかしくない？雑炊のためにダシ汁を追加するってのなら分かるが……えっと、何でそんなエゲツナイ感じの液体を入れてんのこのおばさん？

「おい魔血子、何だその毒々しい色の液体は？」

「何ってドクター●ッパーだよ」

「……ちょっと待て」

「さらにポー●ョン追加だよ～」だぼだぼぉ～

俺が制する前にさらに魔血子は煮詰まったダシ汁＋ド●ターペッパーに淡青色の液体のポ●ションを大量に入れた。……おかしい、何かがおかしい。雑炊ってそんなんだったっけ？俺がおかしいのか？いや……ちょっと、おばさん、あんた次々に変な液体入れたせいで

鍋の中身の汁の色がカオスになってますよ？

「「「「「「……」」」」」」

いきなりの魔血子の凶行に対して双葉、栞、優梨子ちゃんはもちろんの事、店長や苺ちゃんまで黙ってじっと魔血子を眺めている。

「あー、それで最後に締めのごはんをどーんっ！」ざぶぁああー

最後に魔血子は冷やごはんを手掴みで思いっきり鍋に叩きつけるように投入する。鍋に、いや俺たちに何か怨みでもあるのですか？おばさん？

「さぁ食え」

魔血子は鍋の中身の『何か』をかき混ぜながら皆にそう言う。その様は魔女が怪しげな部屋でぐつぐつ煮立った怪しげな液体をニヤニヤ微笑みながらかき混ぜているよう……やべぇ、下向いとこう。奴と目を合わせばその場で死刑宣告を受けることと同意。他の皆を見ても、ある者は口笛を吹きながら上を向いたり、そしてある者はその場で座ったまま狸寝入り、さらにある者は『メガネ～？あれ～？僕ちゃんのメガネどこカナ～？』とか言いながら机の下でごそごそしたり……魔血子と目を合わせぬよう必死になっているのは明らかである。つーか店長、あんたメガネなんか最初っからかけてねーだろ。

「（……えっと、甘いのでごまかしちゃえばなんとかなりそうなんですけど……生クリームを入れるのはどうですか？）」（双葉）

「（いや、ここは爽やか系を目指して……パインとかマンゴーとか果物を入れるのはどう？）」（栞）

「（え～っと……じゃあじゃあ、甘いの反対に辛いので攻めちゃいましょうよっ！わさびとか辛子とかタバスコとかキムチとか唐辛子の種とか大量に入れて辛さで誤魔化すとかどうですか～？）」（苺）
「（クサヤとかホ●オ・フェとかシュールス●レミングとか……ここは強烈な匂いを放つ食べ物を入れるのはどうでしょうか……？）」（優梨子ちゃん）

何か女の子（？）４人が魔血子に聞こえないような小声で今後のカオス雑炊に関して対策会議をしている……がっ！らめぇ～！チミ達ー！それは料理の素人がやたら凝りに凝って変な調味料をバカスカ入れて最終的にカオスな料理が出来上がちった♪となんら変わりない方向性の対策だよそれは？！特に優梨子ちゃんのが一番酷いぞ！？やっぱり優梨子ちゃんは優梨子ちゃんでも魔血子の妹ちゃんには変わりないってかっ！？即死フラグ直行だよ！

「（くるなくるなくるなぁ～、俺の方に向くなよクソババァ～）」ボロボロ……

そして俺は店長の方にチラッと向き様子を窺うと福●さんの画風っぽい必死の形相で涙を流しながら手を擦り合わせ何かにお祈りしていた。アホだ、そんな目立つようなことしたらお前……

「おい、そこのロリおやじ。食え」
「ｏｒｚ」

案の定、最初に店長に死刑宣告が下された。現実は厳しかった。

「ハァ……はぁ、ハッ、ハッ、ハッ……フー、フー……」

見事選ばれた店長は何か息切れして目の前のカオス雑炊を充血した

目で凝視していた。だ、大丈夫か……？でも、何かミラクルなド変態にしか見えないのはどうしてなのだろう……

「どうした、はやく食いなよ」

魔血子は腕組み、いつの間にか汗だくだくの店長の前で仁王立ちしていた。あれはドSの目だ、知っててやってやがる。飼い犬を見つめるような目で店長を見下ろしている。

「はっ、ハッ……め、メントスを入れれば何とか……」

店長は震える手で大量のメントスを今だ煮立っていない鍋の中に入れようとしている……味を誤魔化すためか？……ちょっと待て。メントス？あっ、メントスってぇ、ちょっ……俺が気付い時には既に遅し。大量のメントスは店長の手から鍋に落ちていきーーー

ジュンジュワァアアアア～～～～～～プシュルルルルル～～～～～～～……チュドーーーーーンッ！！！！！（↑イメージ的な感じで）

「ぎゃぁあああああーーーーーー！！！！！！カオス雑炊が噴水にいいいいいーーーーー！！！！！！！」

いわゆるメントスガイザーの劇的瞬間だった。くれぐれも良い子はマネしちゃだ・め・だ・ゾ・☆

12月25日（9）

「……ふぅ、生き返る」
「……あぁ、反り返る」
「……あ？店長、何だそれ？」
「あぁ、あまりの気持ちよさに俺のポークピッツが反り返ってるってことだし」
「ゴメンおじさん、頼むから今すぐこの世から塵となって消え失せてくれませんか？」

俺と店長は街の大きな商店街から少し外れた狭路に位置する銭湯の男湯で少し熱めの湯船に浸かっている。……まぁ何故こんな展開になったかはあれだ、先のカオス雑炊のカオス雑炊によるカオス雑炊のためのメントスザイガー事件が原因だ。炭酸が混じったダシ汁に何を思ったのかアフォ店長がメントスを大量に投下したせいで噴水となって鍋の周辺にいた全員がぶっかけプレイの被害に合うと言う未曾有の出来事、というほどでもないが……いや、まさか天井まで噴水が噴き上がるとは思わなかったから正直おいちゃんびっくりしたけどな。その結果、全身がカオス雑炊まみれで気持ち悪ぃ～ということで全員で銭湯にやって来たという訳だ。

「まぁそうカリカリすんなって司ちゃんよぉー。あれだ、俺のお陰でこうやって羊水に浸かれたじゃねぇか、な？」
「羊水とか言うな」

このアフォ店長の所為で服がカオス雑炊で汚れちまったから切れるのも無理は無い。魔血子はもちろんの事（元はといえばこのオバサンも原因のひとつだが）、あの普段温和な優梨子ちゃんなんか顔は笑っていたけど目は笑ってなかったぐらいだしな。他の皆も今にも

絞め殺すような瞳で店長を見つめていたし……どうでもいいがギャランドゥがやたら濃いなこのオッサン、上の方はうすぃ～けど。

「な、何だよ……こっち見んなよぅ、もぅ……つ、か、さ、く、ん、の、えっちすけっちわんたっちぃ！（／／／）うーたん恥ずかしいんだからぁ！ぷんぷん！（／／／）」チラチラッ

頬をほんのり染め、舌をペロッと出し、ウインクするうーたん。これは……あれか、今世紀中に発売されるかどうか分からない主に１８歳以上のおっきなお友達が蝶期待しているおげれつハートフルアドベンチャーラヴゲーム『ときめきおっさんメモリアル』（税込価格¥１０１５０）のヒロイン（？）の体験版の中のとある台詞か。今時ありえない仕様だが主人公の名前はデフォルトじゃないから変えられるというおっきなお友達にご親切なシステム（声優が名前で呼んでくれないという残念ショボンヌな仕様でもあると言えるが）。そして、どう見てもショタ顔な青年が何故か男女共学の学園で夜な夜な徘徊するセーラー服を身に纏ったオッサンにアレでアレな事をされていくという素敵なストーリー。今時、古めかしいが３Ｄの夜の校舎をショタ顔の青年が一人で徘徊していって行く先々で出会うセーラー服仕様のおっさんと様々なおプレイを楽しみ、総数何と５００枚のＣＧを埋めていくという……しかも差分を含めれば８００枚……地獄でしかないわっそんなゲーム！何の因果でそんなオッサンらの絡み合いなんぞ見なきゃならんのだっ！ねぇよ！こんな残念すぐるゲーム！婦女子、じゃなくて腐女子も引くわ！こんなゲーム！いかんいかん、また脳内で変な妄想を繰り広げていた……いや、な？あまりのてんちょーとか言う変態さんのキモさに頭のネジがイカレちまってな……まぁ、なんだ許してちょんまげ。

「やかましいわ、その汚いブツをこれ見よがしにタオルを動かして俺にチラチラ見せつけるんじゃないハゲ」

「何だとクララァーーーーー！ぼくちゃんのおっきな2袋の巨峰♪はハゲてないぞぉ！見るか！？おぅ？何ならた～んとぺろぺろお舐めなっさーーーーーーい！」バッシャー
「うぉおおーーー！？汚ねぇ！立ち上がんな！あと舐めろとか言うなっ！気持ち悪ぃ！」

ハゲというキーワードが気に障ったのか、店長はいきなり湯船から立ち上がって俺にシモのアレを見せ付けてくる。このおっさんはさっきからシモの話題ばっかだな……俺もほろ酔い程度には好きだけど。

「……ごめん、お前が俺のアレを舐めてるとこ想像したら思いっきり萎えたわ。なんだろ、この気持ちはあれだな、部屋で隠れて特殊オナヌーしてたらお袋に見つかった時のあの下半身のやるせなさと似ているな」ズングリ←
「……そんなボーイでラヴァーな展開にはならないから安心しろ。ていうか今軽く殺意が湧いた。ちょっと一回ぶっ殺してもいいれすかぁー？」
「そんなに切～れ～ん～な～よ～……まぁ、いいや。ところで司、お前風呂で身体洗う時どこから洗う？」
「お前は今をときめく乙女かよ……別にいちいちそんなん気にしてねぇから決まってねぇよ」
「俺はア●ル様から洗うぞ」
「……あ、そう」
「何だよ反応が淡白質だなオイ。溜まってんのか？」
「溜まってねぇよっ！お前はあれか！？常にシモ系の話をしてねぇと正常を保ってられないフランス人形かっ！？」
「何だそのかぁいらしい人形。蝶欲しい」

ったくこのおっさんは……しまいにゃあ、我慢しきれなくなって湯

船の中で自家発電し始めるんじゃねぇだろうな……その時は容赦なく俺の南斗真剣でてんちゅーを下すがな。あー、あちぃなぁもう！のぼせちまうからもうおいちゃん上がっちゃうのらー！そして俺は店長に背を向け、湯船に上がろうとしたが……

「おいおい、待てよ司。ぷりてぃできゅあきゅあ～なめくるめくお楽しみイベントはこれからだろうが」

店長は首からカメラをぶら下げ、何やら怪しげなスコープとバッテンマークが入ったマスクを装着していてた。何その軽く犯罪予備症候群な格好。ちょっと、貴方みたいなドエロ様はお呼びじゃないですよー？

「……おい、アンタまさか」

「スコースコー……なぁ、司？女湯って何のためにあると思う……？覗くためにあるに決まってんでしょおがぁあああああーーーーー！！！！えぇ！？違うか兄弟ぃ！？スコースコー……ハァッ、はぁはぁ（／／／／）」ガシッ

店長は俺の両肩を掴み、そう言った……目が血走ってるよ、ちょっと目が本気と書いてマジだよこのオジサン……いや、ねぇ？そんな……あれだ、ラブコメとかでよくあるいわゆる主人公と悪友が風呂場で女湯お覗きイベントとかさすがにしないよ？さすがにもういい歳だからな。ていうかこの歳でそんなハッスルしてたらマジで青い人達にしょっぴかれるからね。しかし、店長の異様な圧力に耐え切れず俺は……

「わ、分かった……分かったからあんまり俺に近づくなよ……」

「……よし、よく言った勇者よ。まぁ俺もいきなり覗けとか高レベルな技は要求しない。まずはレッスン1……『耳で楽しめ』、いい

か？慌てるな、興奮するな……それが全てだ、スコースコースコスコー」

「……」

『むむむ～……おっきぃです……負けました。私のちっちゃなプライドはズタズタです、ガクッ』（双葉）

『双葉ちゃん……それで勝とうなんて私達には儚い夢なんだよ……そして私もガクッ』（栞）

『いっ、栞さんはまだいいじゃないですかぁー！そんな少し見栄えする膨らみがあってぇ！いいですよぅ！どうせ私なんかアリンコなんですぅー！ちっちゃなポッチしかないんですー！』（双葉）

『だよねー可哀想だけど、その歳でその大きさじゃあ、これからの発育は期待できないねー』（苺）

『うわぁあああん！それをはっきり言わないでくださいぃいいーー！儚い夢だけどぉ！必死で色々試して……牛乳とかシリコンパットとか……と、とにかく色々頑張ってるんですぅー！何ですかぁー！もうこんな不条理な世界やですー！うぇえええん！ブクブクブクブク……（↑湯船に潜水中）』（双葉）

『双葉ちゃんあれでシリコンパットとかしてたんだ……あと苺ちゃんも多分こっち側の人って、あっ！』（栞）

『栞さ～ん？私も『こっち側の人』ってどういう意味カナ～？』（苺）

『ちょっ……やっ、苺ちゃ……揉まな……あっ、やめっ、やぁ……！（／／／）』（栞）

『む～？むむっ、む～～～？？？』（苺）

『あっ、あぅ……？い、苺……ちゃ？な、何……？』（栞）

『むーーー！全然あるじゃーん！なんだよー！何が『こっち側の人』だよーーー！そんな嘘つく悪い子には思いっきりドーン！もふもふ』（苺）
『ーあっ、きゃあっ！ま、まだ……？激しっ……！ちょっ……やぁ！やめっ！ほんとに……あっ！』（栞）

『……さっきから何やってんだいあの子達は？』（魔血子）
『……さぁ？何か言い争ってるけど……止めた方がいいかなお姉ちゃん？』（優梨子）
『ブクブク……（↑潜水から上がってきた哺乳類）』（双葉）
『……あっ、双葉さん？何でそんなところで潜って……？』（優梨子）
『……近づかないで下さい』（双葉）
『え？』（優梨子）
『きょぬー族は私に近づかないで下さいっ！しっしっーですっ！』（双葉）
『きょぬー族！？（汗）双葉ちゃん？意味が……』（優梨子）
『うぅ～～～このっ、この！このぉ！この自己主張の激しいおっきなおっぱいが悪いんですねぇ！？コレのせいで……！コレが私のをドレインしてこんなに大きく……うぅ～～～！返せですっーーー！私のおっぱいを返してくださいぃーーー！！！もふもふーーー！もふもふもふもふーーーーー！』（双葉）
『ちょっ……双葉さん！？あんっ』（優梨子）
『……やれやれ、煩い子達だねぇ』（魔血子）

「いいかぁ、司？人間の五感で一番重要な感覚は視覚だ。日常生活において視覚による判断が多くを占めているからだ。しかし、しかしだ司君っ！我々にはそのような素晴らしき感覚がそれ以外にも４つもあるのだぞん！そう！聴覚、触覚、味覚、嗅覚……どれをとっても我々にとっては視覚同様重要な役割を果たしていることには変わりない！我々が現在、フルに神経を研ぎ澄ましている感覚はどれか分かるかな？ハイッ！先生！聴覚でぇーすっ！ハイッ！司君も一緒にぃ～～～聴覚でぇーすっ！！！」ボタボタボタボタ

「あ～……ハイハイ、聴覚でーす……っておい、鼻血鼻血。湯船に落ちているからな」

「レッスン１……『耳で楽しめ』……慌てるな、興奮するな。それが全てだ。スコースコスコー」

「興奮しているのはお前だ」

俺と店長は男湯と女湯を仕切るタイルの壁に耳をピットリと密着させ、向こうの女湯から聞こえる女共の痴話を盗聴していた。耳で楽しむ……確かにこれはこれで楽しめると言えば楽しめるが……

「何か俺達軽く犯罪まがいな事をしているような気がする……」

「何を今更。次はもっとすごいことをするのだぞん司君！そしてとりあえずこのカセットテープは俺が回収する」

「……って、オイ！？何、その馬鹿でかいカセットデッキ！えっ？何？もしかしてアンタ今の録音してたの？何のために！？この場で耳で楽しむんじゃなかったのアンタ！？」

「もちのロン！心配するな司！このデッキはちっちゃな音声でも拾ってくれる高性能のデッキたんなのだぁーん！！！だから安心してこのカセットテープは俺に預けておけ、な？」

「なっ、何かとてつもなく不純な事に使用されるような気がするっ！やめろっ！そのテープには妹の卑猥な声まで録音されているんだぞっ！？ま、ましてや優梨子ちゃんのこ、声も……ハァハァ！って、ダメだダメだダメだぁー！それは俺が預かる！俺が処分しますぅーーー！！！」

「な、なんだとぉ！？こ、こらぁ！離せっ……！これは俺の……！あっ！」

ポチャン……

俺と店長が言い争ってもみ合いになったせいで音声を録音したテープは店長の手から落ち、湯船に沈んでいった。チーン、南無。

「あっ、あぁあああーーーーー！！！！！なっ、何てことしやがるっ！あっ、あぁあああ～～～～俺の……俺の……女の子達の、女の子達の……エロ、ヴォイスがぁ……ちっくしょう……！こうなったら……！ラストレッスン……『目で楽しむ』……黄金長方形だ、黄金長方形……１：１．６１８の黄金比の長方形を脳内でフルイメージするんだ。回転のイメージ……敬意を払え……」ブツブツ……

……何か四つん這いでブツブツワケの分からん事を語っている店長。何か怖いからもう上がろうかな……俺はそのまま浴場の出口に向かい出て行った。

華麗なる俺はサッとだんでぇな己の身体をバスタオルでふっきふき

し、滑らかに服を着替え、お風呂セットを抱えて番台にいる何やら気難しそうなバァさんの元へ向かった。それは風呂の後のミルクでごっきゅごきゅプレイを楽しみたいからだ。

「ばぁちゃーん、牛乳1本頂戴」

「うちにゃあ、牛乳何ぞ置いてないよ。豆乳と青汁ならあるけんど」

「何で風呂上りなのにそんな後味の悪そうな奴ばっかしか置いてないんだよ……」

「なんだいっ、うちの飲み物にケチつける気かいっこのガキャア！豆乳と青汁をミックスでぶっかけるよっ！」

バシャー

「ぎゃぁあああーーー！？ちょっ、おばちゃん！かかった！ちょっと服にぶっかかったよ！行動と台詞が同時になってる！かぶっちゃってる！それ意味ないＹＯ！」

「ちょっとお祖母ちゃんやめて！周りのお客さんに迷惑掛かるでしょ！？」

番台のバァさんが豆乳やら青汁やら入った瓶を持ってさらに俺にぶっかけプレイをしようとしていたが、誰かの声によって止められた。ん？この声は……？後ろを振り向くとそこにいたのは風呂上りの優梨子ちゃんだった。優梨子ちゃんのライトブルーのロングヘアーが少ししっとりしてて魅力的でおいちゃんぼっきっきー……じゃなくてちょっぴり興奮しました。何だぁ？興奮して悪ぃんですかコラ？

「なんだい、魔鬼子かい。このエテ公みたいなガキと知り合いかい？」

「エテ公って……おぃ（汗）」

「そうだよ、ていうかさっき一緒にここまで入ってきたじゃない。忘れたの？」

「ふんっ、新手のストーカーかと思ったよ。あたしの」

おいバァさん！それはあんまりな勘違いだっ！あんたは俺の思いっきりボールゾーンどころかデッドボール！敬遠だよっ！！！誰が狙うかっ！！！ていうか、このバァさん誰！？優梨子ちゃんと知り合いみたいだけど……

「……つ、司さん？」

「何その疑心暗鬼の目！？いやっ、やめてくれよ！信じないでくれよ優梨子ちゃん！！！狙うとしてもあんなイカレポ●チでマジ基地ババァは狙わないよっ！」

「誰がイ●レポンチでマジ基地ババァだいっ！ぶっ殺すよっ！？」

バシャー

「うっわぁー！また服に豆乳&青汁のエキスがぁー！ひぃー！」

「つ、司さん……ここは少し落ち着かないので外に出て夜風に当たりませんか？お姉ちゃん達は多分、まだお風呂から上がってきませんでしょうし」

「あ、あぁ……！そうしよう！是が非でもそうしよう！」

「待ちやがれクソガキャァー！塩まいとくれ！塩！」パラッパララッ

俺は風呂上りの優梨子ちゃんに手を引かれて、銭湯から出て行った。

……風呂上がりの優梨子ちゃんの綺麗な髪からほのかな香りの良いシャンプーの匂いがして青少年の様にちょっとドキドキしたのはここだけの話。

12月25日（10）

暗雲の空からしんしんと降り続ける雪。
その様は決して静かなクリスマスの夜を演出するものでなく、行き場を失った子供のように舞っていた。
周辺はとうにアスファルトを塗りつぶした雪で積み重ねられ白一色に染まっている。
道を行きかう人も、車も、信号機も、何もかも止まって見える、そこは白と停止の世界。
不思議な事に俺はその感覚に居心地さを感じ、身を委ねていた。
時間だけが流れるように過ぎてゆく、止まぬ雪、無音、無味、無臭。
それでも俺の視覚と触覚という感覚だけは未だ未練がましく残っていた。
視えるものは止まった世界と白の世界という空白の世界。
触れられるものは冷やりとした柔らかな雪のみ。
それでも俺は……温かな感覚が未だ胸に残っていた、いや残そうとしていた。
この温かみは決して夢物語ではなく、幻想でもなく、現実であって、俺はその事実を受け入れる覚悟が必要だった。だからこそ俺はこの感覚を一生忘れぬよう、一生忘れぬように脳に映像として刻んでいく。

だって、な。
夢や幻想であって欲しいと願うのは俺の希望であって、それは目の前の現実に対して甘えているのと一緒じゃん。何処かの誰かさん達はその俺の甘えで気付きいてなかった感情に気付かされた。
だけどそれは彼女達の願いであって、俺はそれに曖昧な態度でしか示せなくて、気付いた時には後の祭り。
そのせいかもしれない、俺の中途半端な視覚と触感という機能が残

ったのは。
早く楽になりたい、早く楽になりたいと願いつつも心のどこかでは未練がましくアイツのことを考えている。
あぁ、何だ、そういうことか。簡単な事だったじゃないか、俺もあいつの事が……
でも今更それを口にする事はまた目の前の現実に対する甘えであって、俺は考えるのを止めた。

しんしんと降り続ける雪が俺の身体を徐々に覆っていく。
雪上から眺める暗雲模様のクリスマスの冬空は俺の頭も何もかも冷やしてくれて、また俺に現実を受け入れろ、と促しているよう。受身の俺にはそれをただ受け入れる事しかできなくて、途端に誰かの胸を借りたくなる衝動に駆られるが……あぁ、これも俺の甘えなんだろうな、とそれさえも受け入れてしまう。
……と、一人でそんな意味の無い事を考えながら己の甘えというぬるま湯に浸っているとどこかで今年のクリスマスの終焉を告げる鐘が鳴った。……ははっ、何だまだ残っているじゃないか俺の聴覚。
俺は寒さで既にほとんど感覚の無くなった身体の事は忘れ、目を閉じた。
そして俺は既に『向こう側』に置いていった記憶を再び辿る事にする。
自分自身の戒めのために、そしてありのままの現実を忘れぬために。

「あー……夜風がひんやりしてて気持ちいいです」
「ハァハァ……お、俺は……展開の速さに着いて来れないよ……」

あれから俺と優梨子ちゃんは何とか番台のバァさんの魔の手から逃れ、銭湯の前まで出たけど……な、なんだったんだ？あの怒涛のよぉなバァさんは？しかしあの圧力はどこかの誰かさんに似ていたような気が……

「ゆ、優梨子ちゃん……あのバァさんとはどうゆう知り合い？」

「あ、えっと……司さんには説明していなかったですね。あの人は私とお姉ちゃんのお祖母ちゃんなんです」

「えっ……そ、そうなの？」

優梨子ちゃんは少し気恥ずかしそうに振る舞いながら言う。驚いたがまぁ……それなら納得。何となく、あのバァさんの血は確かに魔血子に受け継がれているような気がするもんな。でもなぁ……

「でも正直、優梨子ちゃんって魔血子とあのバァさんに似てないよなぁ……って、あっ」

やっべ！思ったことが口に出てしまった！

「あはは……いいですよ。よく言われますから……自分ではよく分からないですけど……それに私、実は……捨て子なんです。だからお姉ちゃんとお祖母ちゃんに似てなくて当然ですから……」

「え……えぇえええーーーー！？」

優梨子ちゃんは少し顔を伏せ、そう言う。ま、マジですか……！？お、俺……もしかしてとんでもなく無神経な事言ったんじゃ……！無神経ナッーウ！フゥー！

「……ぷっ、あはは。嘘ですよ、正真正銘お姉ちゃんとお祖母ちゃんは私と血は繋がってますよ」

「え……またえぇえええーーーーー！？ていうか早っ、ばらすの早いよ優梨子ちゃん！嘘だとしてもそこはもうちょっと溜めようよ！ていうかそれはあんまりな嘘のような気がするよ！？」
「ごめんなさい、ちょっとしたイタズラです」
「よし！優梨子ちゃんかぁい子ちゃんだからおいちゃん許しちゃう！キャッハー！」

俺はその場でぴょんぴょんと飛び跳ねてもうすぐ三十路を迎える大人としての器の広さを全身でアピールした。うん、我ながらアフォなあだるてぇだと思う。でもな、仕方なかったんだよメアリー。最後に俺は優梨子ちゃんのちょっと頬を染めて恥ずかしがって『もぅ、司さんったら……いけない人ですね（／／／）』とか言いながら俺のGパンのジッパーを開いて『そんな……いけない人にはおしおきです、はむっ（／／／）』とかとかそんないけない展開になっちゃったり！いけない人がいける人になっちゃうってウッハー！……ごめん、無いよねそんなエロゲー展開。このっ、このぉ！エロゲー脳がっ！成仏しろ俺の煩悩！さらば俺の煩悩！でもあの頃の爽やかでフルーティのよぉででも苦々しいおっさんの油の乗ったテカテカの髪の毛のよぉな青春時代は決して俺の中で消えんとです！

「かわいい……ですか」

俺は脳内ロンリーコミュニケーションを止め、優梨子ちゃんを見ると優梨子ちゃんはまた顔を少し伏せていた。……あれ？少し様子が変だな。まさか、俺の台詞をマジで受け取ったのかな？まっさか～、ハハッ……そんな、ねぇ？エロゲーみたいな展開があるわけ……

「……司さんは私の事、どう思ってますか？」
「……へ？」

あれ？

「私は司さんのことが好きです」

あれれ？

「司さんの返事が聞きたいです」

「……え、えっと。それは友達として、だよね？」

俺は混乱する頭を抑えて声を出す。ま、まさか……ねぇ？ちょっとモノホンっぽい雰囲気でそんなことを優梨子嬢がおっしゃるからびっくりしたじゃない。そんなこと今更確認するまでも無く俺は優梨子ちゃんの事好き……

「いいえ……一人の女として、私の事をどう思っていますか？」

「……」

俺は優梨子ちゃんの台詞で完全に言葉を失った。俺の視線の先にははっきりと真剣な表情で照れの一つも無く俺を見据える優梨子ちゃんと、ちょうど銭湯から出てきた双葉と栞が映った。

……無言。

俺と優梨子ちゃん、そして双葉と栞の間にしばらく無言の間が続いた。俺は未だにしっかりとした意志を表した瞳で見据える優梨子ちゃんに一種の怖さを感じてしまい、思わず顔を逸らした。双葉と栞の表情に至っては……怖くて1度も見ることすらできなかった。

「……やっぱり、そうですか」

優梨子ちゃんは俺が顔を逸らしたのを確認すると溜息をつき、いつもの優しげな表情、いや……どこか諦めを悟ったような柔らかな表情で俺を見据えた。俺は……何も言えずその場で優梨子ちゃんを見つめて、優梨子ちゃんの次の言葉を待った。

「どうして、どうして……何も言わないんですか」

優梨子ちゃんは目に涙を溜め、今度は弱々しい声で俺に向かってそう言う。俺はどうすればいいんだ……？この娘に何て声を掛けてあげればいいんだ……？

「私の意志は……司さんの意志の前ではあっけないもの、何ですね……」

「……優梨子、ちゃん」

「司さん、私は貴方が大嫌いですっ！……そして、その司さんの意志を知ってて黙っている双葉さんと栞ちゃんも好きになれないですっ……！ひっ……くぅ……！」

優梨子ちゃんはそう言い残し、街の方向へ駆けて行った。俺は何も出来ずその場で優梨子ちゃんの駆けて行った方向を見ながらじっと立ち尽くしていた。俺の意志……俺の、意志ってなんだ……？俺は未だに優梨子ちゃんの行動を理解できぬまま、あぁ、嫌われたんだな、という事実を胸に収めながらいつの間にか涙を流していた。

「魔鬼子はね、知ってたんだよ……あんたが実家へ帰ることを」
「司先輩……」
今度は銭湯から優梨子ちゃんと入れ替わるようにして魔血子と苺ちゃんが出てきた。……何？知っていた？優梨子ちゃんが？何で？どうして……？嘘だろ……？
「これは私の責任かもしれないけどね、どうやらあの時の私とあんたの会話を聞いていたみたいだ。……で、そこの繋がりから行くとどうやらそこの二人も聞いていたみたいだ、そうなんだね？双葉、栞？」
「「……」」
魔血子はふぅと溜息をつき、背後にいる双葉と栞に確認の意味で顔を向けた。しかし二人は返事をせず、ただただじっとその場に立ち尽くしていた。あの時……？あの時って、まさか……魔血子に俺が実家へ帰ることを見抜かれた……まさか、優梨子ちゃんも双葉も栞もそれを聞いていた？
「……これは、言ってしまってもいいのかねぇ。司、あんたこれがどういう意味か分かっているよねぇ？」
「……どういう、意味？」
「……鈍感すぎるよ、あんた。司、いいかい？あんたが実家へ帰ることを知っていたのは一体誰なんだい？あたしは勿論の事、優梨子も、そして……」
「司先輩っ……ごめん、なさい……！ひっ、く……私、……私ぃ！耐え切れなくて……！その事で双葉ちゃんや栞さんや優梨子さんに焚き付けたのは私なんです……！」

魔血子の言葉を遮って苺ちゃんはすすり泣き始めた。

「……この娘も知っていたよ。責任を感じているようだけどね。そしてあんたはどういう気持ちだったんだい？少なくともいつまでも何も言わないあんたに対して皆、不安を抱いていたのさ」

「……お、俺は……」

「……あんたの考えはお見通しさ、最後まで何も言わずに栞と一緒に実家へ帰るつもりだったんだろう？」

「ち、違うっ！俺は最後に皆に挨拶して」

「嘘をつくんじゃないよっ」バシッ

「うっ……」ドサッ

俺は魔血子の渾身の一撃を頬に受けて雪の上に尻餅をついた。

「……その挨拶は誰に向けてのものなんだい……？表面上の仮初の挨拶をされてそれで一体何が残るって言うんだい……？あんたは、決して別れを告げる気は無かったんだよな？」

「……」

「あんたの気持ちも分からなくはないよ。多分、あんたの性格だから湿っぽい別れは嫌だったんだろうよ。皆に心配をかけたくなかったんだろうよ」

「……」

……もう、俺は何も言えなかった。全て魔血子に考えを見通されていたからだ。

「けどね……黙って突然いなくなる……今までそこにあった当たり前の日常が突然無くなったときの彼女達の気持ちを少しでも考えた事あるかい？汲んであげたかい？結局、あんたのソレは身勝手な表面上の礼儀ではないのかい？」

「司、先輩……ごめんなさい、ごめんっ、なさい……」

苺ちゃんは泣いてばかり、やめてくれ、泣かないでくれ、謝れないでくれ……俺が苺ちゃんに謝られる理由なんて無いのだから。

「……司、それに今まで……いや、この４日間で一番あんたの身近にいた娘は誰だったんだい？あんたのその濁った目で見続けていた娘は誰なんだい？ひとりぼっちのあんたが……あんたが一番気にかけていた娘は誰なんだい？分からない、とは言わせないよ……ふぅー……」

魔血子はタバコに火をつけ、それ以上何も喋らない。俺は立ち上がって尻についた雪を払い、ゆっくりその魔血子の言う娘の方に振り向いた。

「……双葉」

「……っ」

双葉はビクッとした様子で反応する。顔は俺が今まで見てきた元気な表情ではなく……青ざめた、知られてしまった、後悔等々……そんな色が混ざった表情だった。俺は……何て顔をさせているんだ。こんな、こんなはずじゃ……

「俺は、お前に言わなきゃならない事が……」

「嫌っ、嫌ですっ、いやぁ！聞きたくない！聞きたくないですっ！！！」

双葉は首を横に振り、ヒステリックな声を上げる。それに対して俺は双葉を落ち着かせる事しかできなかった。

「……お願いだっ、双葉……聞いてくれ、頼む……もうお前達に嘘をつきたくないんだ……！」

「……い、嫌です……来ないで下さい……！」

双葉は怯えるように後ずさりして俺から離れていく……

「私は……私は、私は知っていましたっ！それでも信じたくなかった、司さんを信じていたから……！だから、だから私に近づかないで下さいっ！！！」

「ふ、双葉……」

胸がズキズキした。……辛い、これは自分でまいた種のせいだ。だから俺が何とかしなければならない。けれど……こんなに双葉に嫌われる事が苦しいなんて、俺は……俺は……

「待ってくれ、双葉……お、俺は……」

「……嫌です、待たないです……嫌い、大っ嫌い……私は、私は……私は司さんなんて大嫌いですっ！二度と私の前に現れないで下さいっ！！！」

「お、おい……双葉！？」

双葉は俺に背を向け、街の方へ走って行った。俺は……俺は、双葉にまで嫌われた。また、またひとりぼっちなのか……俺は……もう……そして意気消沈しかけていた俺の胸倉を誰かが掴んできた。

「っ！何やってんだい！このウスノロ野郎！行くんだよっ、さっさ

と追えっ！」
「……魔血子、いいんだ。もう……俺は」
「ばっかやろう！！！甘ったれるのもいい加減にしなっ！！！いい加減目を覚ましなっ！そうやってまたひとりぼっちになるのかいっ！？その足で家に帰るのかいっ！？えぇ！？決着をつけるんだよ！自分のその情けない足でがむしゃらになって這いずくばっても追うんだよっ！嫌われても！あんたのそこについているブツは何のためにあるんだよ！？男だろ！？司ぁ！！！追えっ、追うんだよっコラァーーーーー！！！！！！！」

俺は……俺は……男だ。こんな情けない自分が腹立たしい……何で、俺はこんな所でじっとしているんだ？俺は男だ、俺は……俺は……！

「……」
「……分かったんなら、とっとと行きなヘタレ。魔鬼子はあたしが何とかするから……死んでもあの娘を放すんじゃないよ」
「……」
「……返事も無しかい、はっ。上等じゃないか。……絶対、あの娘を幸せにするんだよ……」

魔血子は俺に背を向け、片手を挙げて歩き出す。無駄な言葉はいらない、魔血子もそれを感じ取ったのか魔血子らしからぬ泣きそうな表情で俺の元から離れていった。……そして、これが俺の見た最後の魔血子の姿であった。

「……追わないで」

今までずっと黙っていた栞が弱々しい声で口を開いた。伏せているせいで表情が読み取れない。

「栞……」

「……私も、知ってた。お兄ちゃんが実家に帰ってくれること。素直に嬉しかった」

「……」

「……でも、でもっ、お兄ちゃん！分かるよねっ！？お兄ちゃんはこのままの生活じゃあダメだってこと！」

栞は顔を上げ、俺の掴みかかってくる。……泣いている、今まで生きてきた中で妹のこんな表情は見たこと無い。俺の中の栞は……ちょっとおっちょこちょいで、たまにしっかりしていると思ったら実はそれは強がりで……本当は子供っぽいところが抜け切れていなくて。兄である俺を慕ってくれた。だからこそ……心配してくれている、今こうやって必死に引き止めているのも……そのためだろう。しかし……それだけの理由では無いということも、今だから何となく分かっている。

「栞……それは、分かっている……」

「……分かってない、分かってないよお兄ちゃんは！私が、私が……どれくらいお兄ちゃんのことを心配しているか分かってる！？本気なんだよっ、本気で心配しているのにっ……！」

栞は半ば自暴自棄となり、さらに俺に掴みかかって引き止めようとする。俺は……何も出来ず、その場で突っ立っていた。けれど、もう俺にはやることはひとつしかない。

「……栞、ごめんな」

「……っ！」
「今まで俺は栞にすごく迷惑をかけてきたよな……お前は俺達家族の中で一番働き者で、第一に家族の事を考えてきてくれたよな……すまない、俺がしっかりしてないばかりに。本当にすまない、だから最後の我儘だ。聞いてくれ……兄貴、お袋、親父によろしくって伝えておいてくれないか？そして、お前は……家に帰るんだ」
「……！！」

……分かっている。俺は今、酷く残酷な選択を栞に突きつけているってことは。でも、俺は全てに決着をつけなければならない。だから今はこうして……兄として、一人の妹を慰めてやることしかできない。

「……やっ、やだ……やだっ！絶対やだっ！私は……私は絶対お兄ちゃんと離れないっ、そんなの……そんな勝手なこと絶対許さないっ、やだやだやだやだ……お兄ちゃんは、お兄ちゃんは……私が、私の……」
「……本当にごめん、栞」
「……ひっ、やだ…やだやだ……！」

俺は懐で栞を抱きしめた。栞はそれでも俺の言葉は受け入れない、分かっていた。栞がどういう気持ちで、どういう感情を持って接してくれているかは。分かっていて俺は分からぬフリをしていた。……辛い、ここで妹を放すのも。けれど……俺は。

「……栞」
「あっ……！」

俺はゆっくりと栞を抱きしめていた手を離して栞と向き合った。そして……

「……じゃあ、な。栞」

俺は背を向け走り出した。振り返らぬように、今度こそ誤らぬように、必死で走る。

「やだぁ！やだよ！行かないで！お兄ちゃん！置いてかないで！お兄ちゃん！私を一人にしないでお兄ちゃん！！！」

「栞ちゃん……！」

背後から子供のように泣き喚く声が聞こえる。振り向きそうになる自分を何とか留めてそれでも俺は走り出す。泣きそうになった、必死で苺ちゃんが栞を止めている。ごめん、苺ちゃん。何で……何で俺はこんな事をしているんだ。何で、こんなに皆に迷惑をかけているんだ……己の情けなさに嫌気が差す。何で……！何で……！俺は……俺は……！

「う、うぁあ……お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんの、お兄ちゃんのバカぁーーーーー！！！！！！！」

栞の泣き叫ぶ声は俺の胸に重く圧し掛かる。ごめん、栞……ごめんっ、本当にごめんな……

俺は色んな物を置いていき、そのまま街へ駆けて行った。俺自身で全てに決着をつけるために。

Last Christmas, you are nobody……

一度でも噛み合いが悪くなった歯車は不良品で粗悪品ーーーそれは誰しもが決めた事ではなくて、為るべくして為ったいわば、数ある結果の内の一つであると言えよう。
すなわちーーーそこには要因が絡み合ってくる。そう、それは一つの結果に行き着くまでの過程に含まれる。
望む望まぬに関わらずたった一つの要因でこれからの道標に影響が出るのだ。しかし、その唯一の要因が何であるかなぞ、所詮結果が示されてからでないと分かりえない。そう、すなわち要因と結果が強く結び付けられるというこの世の善悪をもたらす理論ーーーそれが因果応報である。

「……んぁ、むちゅ……」
「……む、ちゅ、ん……」

少し、ざらついた感触が己の舌を支配する。それは溝淵栞が人生で初めて味わう不思議な感覚であった。受け入れる、攻める、受け入れる、攻める……一定のリズムで舌の攻防は続けられる。

「ぷは……ぁ」

苦しくなったのか、栞の目の前にいる彼女ーーー苺は栞の唇から自分の唇を離す。潤った唇は栞の唇の痕跡、すなわち唾液によるものだった。

「……」

栞は呆然と至近距離にいる苺を見つめる。すがりつくものを求めているわけでもなく、じっと……抜け殻のように、ただそこに佇んでいた。そんな姿の栞を見た苺は少し罪悪感に苛まれながらも言葉を紡ぐ。

「……栞ちゃん、私の舌、どうだった？」

「……おいし、かった」

「……栞、ちゃん」

「……」

それは言葉にならぬほど、弱々しく口を動かす……思わず目を背けたくなるほど堕ちる所まで堕ちた一人の少女の姿が現の栞であった。何なんだろう、この妙な焦燥感ーーー苺は己の気持ちが分からなくなった。最初は……司が双葉の後を追いかけ始めた時は少なくとも栞の瞳に生気は宿っていた。それから自分が栞を止め、司の姿が見えぬようになってから栞の様子はおかしくなった。雪の路上にポテッと、栞の肢体はまるで壊れた人形のように足から崩れ落ちた。

「……そう、嬉しい。私も栞ちゃんの舌、おいしかったよ」

そう言いながら苺は右手を栞のうなじから顎、耳、頬、髪へと……優しく撫でていく。そうすると、栞は少しはにかんで微笑んだ。しかし目は笑っていなかった。それはまるでこの現実の世界を拒絶しているようで、ありのままの本能に従った感情を思わせる微笑であった。儚いーーー苺はそんな一人変わり果てた少女を見て、胸が痛くなった。だから何度も抱きしめた、何度も唇を重ねた、何度も身体を愛撫した、何度も何度も……捨て置かれた自分を忘却の彼方へ

追いやるように。

「……ん、はぁ、栞、ちゃん」

「……あっ、んっ……」

また唇を重ねる、栞の胸を弄る。そして触れ合っていくごとに苺自身の心情も変化しつつあった。これが果たして、栞を想い人を陰影の存在にするための行動なのだろか？いや、それは建前……本音としては愛おしかった。その儚い一人の少女を離したくなかった、人形のように、受身の見せ掛けの感情だけで反応する少女を自分のモノにしたかった。

「……ぷはっ、あはっ……どう？栞ちゃん……？」

何が？と問うものはそこには存在しなかった。唇を離すとキラキラとした僅かに粘性の高い液体が橋のように栞と苺の唇を架けていた。栞の反応は相変わらずはにかんだまま。しかしその様子に苺は一種の快感を覚え、また自らの唇を栞の唇に近づけようと……ゆっくり距離を詰める、が。

「……おにぃ、ちゃん」

栞の両の瞳から涙が零れ、頬を伝って雪上に一滴、一滴……落ちていく。

それは未だ現実と向き合えぬ一人の少女が見せた本当の感情を露にした一時だった。

「……しおり、ちゃん……どうして」

しかし苺はその未だ捨てきれぬ感情を見せる栞に戸惑いと後悔とそ

して……憎悪に入り混じった念を抱いた。
しかしその憎悪の対象は栞本人ではなく、やり切れぬ現実に対して、強いて言うならばこの流れを作った張本人である司に対してのものであった。許さない、ユルセナイ、ユルスモノカーーー憎悪の感情は高まる、こんなにして、自分の妹をこんな状態にして置いていくのかアイツはーーー何て勝手な男だ、殺してやりたい、コロシテヤリタイ、コロシテーーーしかし、そんな言葉はもう当の本人には届くはずも無く、ならばその等価をどこかで補う必要があった。

「栞ちゃんっ……！」
「あっ……うっ」

押し倒す、雪上に苺は栞を押し倒した。もうそれからは止まらなかった、上着、スカート、その他諸々を脱がしにかかる。何かを求めるように、何かを消し去るために、何かを装うように。

「やめっ……てぇ」
「……ごめんね、ごめんね、ごめんね、ごめんね……栞ちゃん」

僅かながら意識を残していた栞は身体全体を左右に動かし必死に抵抗をはかるが、苺に上から馬乗りにされて身体を押さえつけられている所為でその抵抗は無意味なものだった。そして苺はその栞が嫌がる姿に何度も罪悪感に苛まれながらも剥いていく手を休める事はなかった。栞の手に触れる、結ばれる手にはほんのりとした温かみを感じた。

「……先輩の、所為……ですからね」

そう言いながら苺自身の瞳からも涙が零れた。これから自分がしようとしていることが何なのか、これから自分達が行き着く終着点は

どこなのか、そしてーーーこの満たされぬ心は何を代価として埋めるべきなのか、と。

溝淵栞は考えた。
自分は今、何をしているのだろう、とーーー何が因で、どうしてこれが結果なのか、と。そしてそれは果たして『善』なのか、『悪』なのか……それさえも粘着質な何かで潤った脳内では答えは出なかった。ただ、朧げながらも現状が嫌ではないから、楽しもうとーーー彼女に身を委ねた。例え結果が間違ったものであったとしても、例えそれが逃げの選択であったとしても……狂った歯車は止まらない。それでも永遠に回り続けるのだ、徐々に軋みの音を鳴らし、『向こう側の世界』へと物語は紡がれていくーーー

雪が降ってきた。
けれども今夜はますます荒れそうだ。ザマァミロ、街を練り歩くバカップル共めーーー俺は徐々に薄れゆく意識の中でそんな馬鹿な考えに浸っていた。

「はぁ……」

息を空に向かって吐き出した。俺の吐いた白い息は上まで上っていき、僅か数秒で消えていった。
そして考える。どうやら俺は仰向けで冷たい雪の上に寝そべっているらしい。我ながら何やってんだばっかちんだねぇ～と自虐的に鼻で笑う。
そして視線を雪の降る空以外に向ける。信号機、どこぞやのビルーーーそして、さらに周りを見渡す。
人、人、人、人ーーー空間の隙間を埋めるように人が止まったり、歩いていや正確には歩こうと、だな。あと何かを囀ったりーーーしている。
でも、そんなの俺には関係無い。だって、止まって見えるんだぜ、雪以外は何もかも。

「……はぁ、雪」

雪はしんしんと俺の身体の上に少しずつだが、積み重なっていく。重くは無いが数時間経つころにはどうなることやら。そして、俺はまた息を吐き出した。
そして俺は現状を未だ受け入れないでいる。もう少し、もう少しこの世界を楽しみたいという一種のあだるてぃな思考がこの俺に未練という感情を……何？あだるてぃじゃなくてただのガキ？うっせぇよ、ヴぁー……ぁ。

「ちっくしょぉ……」

痛い、どうせならそういう感覚も消えてくれりゃあ良かったのに。
神様は俺をとことん苦しめたいようだ。

けれどもその痛みの感覚にまだ俺はこの世界から消えてないんだな、
という意識を芽生えさせてくれるから俺は少し笑った。良かった、
まだ生きてて。
指は動かない、何かをこの手で掴みたいけれど掴めない。
身体を起こすなどもってのほか、身体の四肢は俺の言う事をちっと
も聞いてくれない。
動かしたいのに、こんな所で寝ている場合じゃないのに。

「ハハッ……」

笑うしかない、何で俺はこんな所で寝そべっているんだ。
寒い、けれども頭の方は何だか生暖かい……こんな暖かさは今まで
感じた事が無い。
……でも、何でこんなに頭は変に冴えているんだろう。そして俺は
ふと横目で地面の雪を見る。

白の雪はペンキで塗られたように鮮血に染まっていた。

「……はは」

そして俺は現実を受け入れた。これが俺の運命なのだと自分に言い
聞かせて。だからもういいんだ、今となっては……俺はもうじき死
ぬ。そんな事実もとうに忘れ俺は浮かれて意味の無い妄想にふけっ
ていた。そして俺は周辺の奴らに迷惑もかけたし、気持ちも踏み弄
るに近い事もした。だからこれは罰だろう、と。

ただ、一つ心残りはあった。
双葉。俺が今までに出会った中で一番気にかけた相手。
それは色々な原因もあるけれど（主に食いしん坊万歳とかロリ様だ
とか）……心のどこかで双葉を通して自分を見ていた。それは俺の

自己満足以外の何物でもない。けれど俺は気付いてしまった、自分の気持ちに。
あいつ、最初俺を見て何て言ったかなぁ……

『私を買って下さいっ！』

最初はなんじゃそりゃ？って思ったさ。
だって、そんな……看板を持って、ねぇ？知らないオジ様に身を委ねるとか、重ねるとか……どう聞いてもそういうイケナイ感じにしか聞こえないじゃん？最初はドキッ、としたさ。えっ、マジで！？とか。嘘っ、この歳になって童貞喪失！？とか。……うん、まぁ多分そんな気持ちも少なからずもあったよ。

『……牛丼、うまいか？』
『はいっ、こんな高級料理食べられるなんて……！夢みたいですっ！』

……そういやアイツ、牛丼食うのあの時が初めてとか言ってたな。
牛丼食ってるときのあの顔はしやわせに満ちていたな。見ているこっちまでしやわせになってきたよあの時は。

『あ……お兄さん……お兄さんだぁー、エへへ……（／／／）』
『……っ』

……そして、俺は一度アイツを見放した。アイツは俺を攻めなかっ

たけれど……何であの時はあんなことをしたんだろう、と今でも悔いている。寒かった……だろうな、今の俺みたいにアイツは雪の上で倒れていたんだ。

『えへへぇ～～～♪ケーキっ、ケーキ♪』

あの時の……店長が双葉にケーキをプレゼントした時に見せた双葉の嬉しそうな表情にイラッときた時の俺の気持ちは……今なら分かる。俺は……悔しかったんだろうな、あんな表情……見せられて。嫉妬、だ。自分以外の何者かに双葉をあんな表情にさせられて俺は……悔しかったんだ。

『……あっ、ご、ごめんなさい司さんっ！わ、私その……ひぅ、こ、こんな……つもりじゃないのにっ……！ご、ごめ、んなさ……ひっく、ごめんなさ……』

そして俺は何度もアイツを泣かせたな……ちょっとしたイタズラから本気まで。けれど、俺はアイツの泣き顔だけじゃなくて色んな表情を見てきた。馬鹿にしたように笑った顔、ぷんすか怒った顔、恥ずかしがった顔、慌てふためいた顔、酔った時の顔……今でも一つ一つの表情を鮮明に覚えている。

『……双葉ちゃん、お兄ちゃん……帰ろ？』
『……お、おう、だな……双葉もいい……か？』
『……ハイッ、エヘヘ……』

だから俺はあの時、気づいておくべきだった。双葉と栞とでケーキ屋に帰ったあの時、あの栞の優しげな表情、いつもとは違った双葉の笑った顔……俺は気づけなかった。俺は、馬鹿だ……

『私は……私は、私は知っていましたっ！それでも信じたくなかった、司さんを信じていたから……！だから、だから私に近づかないで下さいっ！！！』
『……嫌です、待たないです……嫌い、大っ嫌い……私は、私は……私は司さんなんて大嫌いですっ！二度と私の前に現れないで下さいっ！！！』

……こうして俺は、また一人になった。

「……はは、は」

俺はもう泣きたかった、思いっきり雪の降る空に向かって思いっきり。
洗いざらいこの気持ちをぶちまけて、汚くてもいい、罵倒されてもいい、殺されてもいい、ただ……

「やっぱり……一人は……寂じぃよぉ……双葉ぁ……」

もう、嫌だった。死んでもいい、死んでもいいから……一人は、嫌だ。
けれどそんな気持ちを吐き出すことも出来ず、ただただ俺は雪の降る虚空を見上げる事しかできなかった。

双葉……お前はどんな気持ちで俺の元から離れて行ったんだ？
双葉……お前は今どこにいるんだ？腹、空かせてねぇかな……？あんな格好で凍えてねぇかな……？
双葉……お前ってさ、好物は何だ？牛丼？魚肉ソーセージ？それとも……店長の作ったケーキ……？
双葉……お前のお袋さんとか親父さんとか……心配してねぇか……？なぁ、聞いたらダメだったか……？
双葉……なぁ、お前ってさ、好きな奴とかいる……？俺？俺は、いるけどな……誰って……？言えるか馬鹿……
双葉……お前、さ……俺の事、好き……か？なぁ、双葉……おい、聞いてくれよ双葉……なぁ……

……双葉……

真夜中の交差点。
空はとうに黒に染まっていた。
人が溢れかえっていた、一箇所に、集中して。

そんな中、一人の少女はそこに向かって歩き出す。
人混みを抜ける、途中で誰かの足に引っかかりそうになって、踏ん張る。
そして、そのざわめく野次馬の中を抜けると雪はとうに止み、綺麗な夜空を見せていた。
綺麗、ほんとに綺麗です……そう呟いた少女の口から白い息が出てきた、まだ……寒い、寒すぎる。
そしてさらに一歩踏み出す、前へ……前へと、足は自然と前へ進んでいく。そして……ある地点で止まる。

「……」

そして少女は冷たくなった肢体の傍に座り込む。
あったかい……冷たくなったはずの肢体はまだあったかいような気がした。そして、肢体の頬に触れる。何度も何度も……そこにいる存在を自分で確かめるように、自分の体温を移すように。

「……あったかいです」

そして、少女は涙ぐみながらも微笑む。

「……司さん、一人は寂しいです」

弱々しく少女はとうに冷たくなった肢体に向かって呟く。……反応はない。それでも少女は続ける。

「……司さん、一人で行くなんてずるいです」
「私は……ずっと待っていたんです。私と司さんが短い間過ごしたあのアパートの前で」
「えへへ……寒すぎて死んじゃうかと思いました。けど、けど……

ずっと、待っていたんです」
「それなのに……どうして一人だけこんな寒い所で寝ているんですか？こんな寒くて地面が硬い所……寝れないです。早く……ベッドで寝ましょう……」
少女は司を強く抱きしめる。……自分を抱きしめてくれなかった代わりに、強く、強く……
「……司ざぁん、私は、私はここにいるんでずよ……？……無視、しないでください……」
鼻声で少女は司に語りかける。それでも動かなくなった司には声が届かない、耳元で叫んでも声は届かない。彼女が欲したモノは既に『向こう側』に行ってしまった。それでも何度も何度も語りかける……
「……司、さん。私、司さんに言い忘れていたことがありました。はっきりと言って無かったですよね……」
司の顔と自分の顔を向かい合わせる。司の瞳は手で閉じ、息をすーっと吸い込み少女ははっきりとした口調で言う。
「司さん……大好き」
少女は自分の唇と司の唇を重ねた。

Fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5316i/

俺とお前のロンリークリスマス

2010年10月14日02時02分発行